續國譯漢文大成

文學部　四十六

309
65
帙入

始

續國譯漢文大成

文學部 第四十六册（第十二帙の二）

白樂天詩集四の二

吉田待郎氏 寄贈本

昭和六年 帝國圖書館

309
65

律詩凡九十六首

七年元日對酒五首

慶弔經過爛。逢迎跪拜遲。
不因時節日。豈覺此時衰。

【字解】(一)時節　四時の佳節なり。蜀志諸葛亮傳注に、亮初亡、所在各求爲立廟、朝議以禮秩不聽、百姓遂因時節、私祭之於道陌上とある。

【題義】太和七年の元日に酒に對して所感を述べた詩である。

【詩意】慶弔の爲に人を訪ふのも爛く、人に應待するのも大儀になつた。平生はさほどにも感じないが、佳節に遇ふと特に身の老衰を感ずる。

七年元日酒に對す　五首

慶弔經過爛く、逢迎跪拜遲し。
不因時節日。豈此時の衰を覺えんや。

〔二〕

衆老憂添歲。余衰喜入春。

〔二〕

衆は老いて歲を添ふるを憂へ、余は衰へて春に入るを喜ぶ。

年開第七秩。屈指幾多人。　年の第七秩を開くは、指を屈するに幾多人ぞ。

【字解】〔一〕第七秩　六十一歳より七十歳までをいふ。

【詩意】他人は段段年を取るのを憂へてゐるが、俺は諦めてゐるから寧ろ新年を迎へるのが嬉しい。世間には俺のやうに六十を越した人は、數へて見てもあまり澤山はないやうだ。

〔三〕

三杯藍尾酒。一楪膠牙餳。
除却崔常侍。無人共我爭。

三杯藍尾の酒、一楪膠牙の餳。
崔常侍を除却して、人の我と共に爭ふ無し。

【字解】〔一〕藍尾酒　婪尾酒に同じ。元日の祝酒を飲む時は年長者が末席にゐて、若い者から順に飲みまはす習なるが、その最後に飲むを藍尾といふ。〔二〕一楪　一枚の盆。膠牙餳は飴なり。荆楚歳時記に、元日食膠牙餳、取膠固之義とある。〔三〕崔常侍　散騎常侍崔玄亮を指して言ふ。

【詩意】三杯の藍尾の酒を飲み、一盆の膠牙の餳を食つて元日を祝つた。崔常侍を除いては他に我と此資格を爭ひ得るものはない。

〔四〕

今朝吳與洛。相憶一欣然。

今朝吳と洛と、相憶うて一に欣然たり。

夢得君知否。俱過本命年。

夢得君知るや否や、俱に過ぐ本命の年。

余與蘇州劉郎中。同壬子歳。今年六十二。

【字解】〔一〕吳　蘇州を指して言ふ。洛は洛陽。〔二〕夢得　劉禹錫の字。禹錫は時に蘇州刺史たり。〔三〕本命年　生年の干支。六十一歳をいふ。

【詩意】今日は元日なので、君は蘇州に在り僕は洛陽に在り、遙に相憶うて心が欣然としてゐる。お互にもう本命を過ぎて六十二歳になつたのだが。君は其れを知つてゐるか。實に歳を取るのは速いものだ。

〔五〕

同歳崔何在。同年杜又無。
應無藏避處。只有且歡娛。

同歳崔何くにか在る、同年杜又無し。
應に藏れ避くる處なかるべし、只且く歡娛する有るのみ。

余與吏部崔相公。甲子同歳。與前州杜相公。及第同年。秋冬二人俱逝。

【字解】〔一〕崔　自注の吏部崔相公、即ち崔羣をいふ。崔羣は太和六年八月歿す。後集卷十一、寄劉蘇州參照。〔二〕同年　同年の及第者をいふ。杜は杜元穎なり。貞元十六年登第。穆宗の時宰相となり、太和中循州司馬に貶せられた。

【詩意】同歳の崔羣も同年の及第者たる杜元穎も既に死して此世の人ではない。不本意ながら、やがて自分も其仲間入りをしなければならない。死は避け藏れる道がないから、只歡樂を盡して、いつ死

んでも慽のないやうにする外はない。

七年春題府廳

(一)潦倒守三川。因循涉四年。
推誠廢鉤(二)距。示恥用蒲(三)鞭。
以此稱公事。將何銷俸錢。
雖非好官職。歳久亦妨賢。

七年春府廳に題す

潦倒して三川に守たり、因循して四年を涉る。
誠を推して鉤距を廢し、恥を示して蒲鞭を用ふ。
此を以て公事と稱す、將何ぞ俸錢を銷せん。
好官職に非ずと雖も、歳久しく亦賢を妨ぐ。

【字解】〔一〕潦倒　老衰の義。又吏事に適せざる貌。三川は奉の三川郡。河南洛陽附近をいふ。守三川とは河南尹たることをいふ。〔二〕因循　ぐづぐづすること。漢書に、霍光因循守職とある。〔三〕鉤距　鉤ありて呑めば順ひ吐けば逆ふ如く、人をして深入りして出づる能はざらしめ、以て事の隱情を鉤索するに喩ふ。漢書趙廣漢傳に、善爲鉤距とある。〔四〕蒲鞭　蒲を以て鞭となす。寛刑をいふ。漢書に、劉寛爲南陽太守、溫仁多恕、吏民有過、但用蒲鞭撻之、以示辱とある。

【題義】太和七年春、河南尹の役所に題した詩である。

【詩意】老衰して河南尹となり、いつしか四年を經た。誠意を以て民に臨み敢て罪狀を鉤索するやうなことはせず、成るべく刑罰を寛にして唯恥を示すに止めた。これが吾が公事といへば公事なのだから、實は俸錢を戴くほどの仕事ではないのだ。たとひ結構な官職ではないにもせよ、永い間賢者の進路を塞いでゐたわけである。

早春醉吟寄太原令狐相公蘇州劉郎中

早春醉吟、太原の令狐相公・蘇州の劉郎中に寄す

雪夜閒遊多秉(一)燭。　雪夜には閒遊して多く燭を秉り、
花時暫出亦提壺。　花時には暫く出づるも亦壺を提ぐ。
別來少遇新詩敵。　別來新詩敵に遇ふこと少に、
老去難逢舊飲徒。　老い去つて舊飲徒に逢ひ難し。
大振威名降北虜。　大に威名を振ひて北虜を降し、
勤行惠化活東吳。　勤めて惠化を行ひて東吳を活す。
不知歌酒騰騰興。　知らず歌酒騰騰たる興、
得似河(二)南醉尹無。　河南の醉尹に似るを得るや無や。

【字解】〔一〕秉燭　遊惰に耽ける貌。〔二〕河南醉尹　樂天自ら謂ふ。時に河南尹であつたから。

【題義】早春醉吟の詩で、令狐楚（元和十四年に同門下平章事になつたから相公といふ、太和六年に太原尹・北都留守・河東節度使になつた）及び蘇州刺史劉禹錫に寄せたものである。

【詩意】自分は雪の降る時には燭を秉つて夜まで閑遊し、花の咲く時節にはチョット出るにも酒を攜へて歡樂を盡してゐる。併し君等と別れてからは、新しい詩の相手も少く、老いては昔の飲仲間にも逢はれなくなつた。令狐相公は北虜を降服させて大に威名を振ひ、劉郎中は惠政を施して蘇州の民を濟ひ、共に男前を揚げては居るが、歌酒の興を肆にしてゐることは、恐らく河南の醉尹たる僕には及ぶまい。

洛下送牛相公出鎮淮南

洛下にて牛相公の出でて淮南に鎮たるを送る

北闕至東京。風光十六程。
坐移丞相閣。春入廣陵城。
紅旆擁雙節。白鬚無一莖。
萬人開路看。百吏立班迎。
閫外君彌重。樽前我亦榮。
何須身自得。將相是門生。

元和初。牛相公座主制策。登第三等。余爲翰林考覈官。

【字解】【一】洛下　洛陽。牛相公は牛僧孺なり。【二】北闕　天子の宮殿。東京は洛陽。【三】十六程　十六日の里程。【四】廣陵城　淮南節度府の在る處。【五】紅旆　後集卷十一、送令狐相公赴太原の自注を見よ。【六】班　位。列。【七】閫外　武將となること。史記に、閫以内者寡人制之、閫以外者將軍制之とある。

【題義】太和六年洛陽で牛僧孺の淮南節度使となつて赴任するのを送つた詩である。

【詩意】相公は此度丞相を罷めて淮南節度使として廣陵に赴く爲に、長安から十六日間の春光を賞しつつ此洛陽に著いた。相公は節度使であるから二本の紅旆を押し立てて、いかにも勇ましく、まだ一本の白鬚もない若若しさを保つてゐる。萬人が路を開いて相公の風采を仰ぎ、百吏は列位に立つて出迎へた。將軍（節度使）となつて君は彌貴くなり、送別の宴に列して我も光榮を感ずる。もとの自分の門下生が將相となつたのであるから、自分がなつたも同然で、こんな嬉しいことはない。

【餘論】自注にあるやうに、元和元年に牛僧孺が制策に應じた時に樂天は其試驗官であつたから、牛僧孺は樂天の門下生に當るわけである。

箏

雲髻飄蕭綠。花顏旖旎紅。
雙眸剪秋水。十指剝春蔥。

箏

雲髻飄蕭として綠なり、花顏旖旎として紅なり。
雙眸秋水を剪り、十指春蔥を剝ぐ。

楚艶爲門閥。秦聲是女工。
甲鳴銀玓瓅。柱觸玉玲瓏。
猨苦啼嫌月。鶯嬌語記風。
愁を移して手底に來り、恨を送りて絃中に入る。
移愁來手底。送恨入絃中。
趙瑟清相似。胡琴鬧不同。
趙瑟清くして相似たり、胡琴鬧しくして同じからず。
慢彈廻斷鴈。急奏轉飛蓬。
慢彈すれば斷鴈を廻し、急奏すれば飛蓬を轉ず。
霜珮鏘還委。氷泉咽復通。
霜珮鏘として還た委れ、氷泉咽びて復た通ず。
珠聯千拍碎。刀截一聲終。
珠聯りて千拍碎け、刀截ちて一聲終る。
綺麗精神定。矜能意態融。
綺麗にして精神定まり、能に矜りて意態融す。
歇時情不斷。休去思無窮。
歇む時情斷えず、休み去りて思窮まり無し。
燈下青春夜。樽前白首翁。
燈下青春の夜、樽前白首の翁。
且聽應得在。老耳未多聾。
且つ聽きて應に在るを得べし、老耳未だ多く聾せず。

【字解】〔一〕雲磬　雲の如き磬。〔二〕旋旗　旋なる旗。〔三〕春葱　春のネギ。指の美しきに喩ふ。〔四〕女工　女としての遊藝。〔五〕甲　爭を彈する爪。杜甫の詩に銀甲彈箏用とある。〔六〕玓瓅　玉名。〔七〕柱　箏の絃を支ふる柱。〔八〕霜珮　白玉の佩。〔九〕趙瑟　趙國の瑟。史記に趙王、秦王の前にて瑟を鼓せしこと見ゆ。〔十〕千拍　千度うつ。

【題義】美人の箏を彈ずるのを詠じた詩である。

【詩意】綠の黑髪がふさふさとして、花の顏が紅を潮して美しい。二つの目は秋水の如く澄み、十本の指は春葱のやうに白い。其の美しさは親代代の遺傳で、女の嗜みとして特に秦箏に巧である。銀甲を持つて玉柱を拂へば、其音は猨の月下に苦み啼くが如く、鶯の春風に媚ぶるが如く、人をして幽愁暗恨を起さしめ、その清さことは趙瑟に似て、胡琴の鬧しきに似ず。ゆるやかに彈けば孤鴈を廻すべく、急奏すれば飛蓬を飜すに足り、珮玉の鏘鏘たるが如く、泉流の忽ち通ずるが如く、玉の碎くるが如く、帛の裂くるが如くである。容貌の綺麗なるに加へて精神も落著いて居り、技能に矜りて得意の態である。その音は歇んでも聞く人の情思は尙ほ盡きない。春の夜の燈下樽前で白頭の老翁たる我は、此音を聽いて身の健在を覺り得た。

洛中春遊、呈諸親友

洛中春遊、諸親友に呈す

莫歎年將暮。須憐歲又新。
莫れ歎く年の將に暮れんとするを、須らく憐むべし歲の府中三遇臘。洛下五逢春。
府中三たび臘に遇ひ、洛下五たび春に逢ふ。「又新なるを。」

春樹花珠顆。春塘水麴塵。
春娃無氣力。春馬有精神。
詠春遊一時之態。

竝轡鞭徐動。連盤酒慢巡。
經過舊鄰里。追逐好交親。
笑語銷閒日。酣歌送老身。
一生歡樂事。亦不少於人。

【字解】【一】轡　手綱。【二】府中　河南尹の役所の中。【三】淡黃色をいふ。【六】春娃　若き妓女。【七】連盤　皿をならべる。

【題義】洛陽の春を遊賞し、諸親友に贈つた詩である。

【詩意】自分は河南尹となつてから三たび歳暮に遇ひ、洛陽の春に遭ふこと既に五回であるが、年の暮れるのなどは歎くには足らない。寧ろ春の又來るのを喜ぶ者である。春の花は珠の顆を綴り、春の池塘は淺黃色の水を湛へ、妓女はなよなよとして風にも堪へぬ風情があり、吾が乘る馬は春風に勇んでゐる。鄰近所の親友を訪ひ、鞭を振ひ轡を竝べて遊び、珍味をならべて俱に酒杯を擧げ、笑語酣歌して閒日を送つてゐる。他事はさて置き、歡樂の事にかけては敢て人後に落ちないつもりだ。

酬舒三員外見贈長句

舒三員外の長句を贈られしに酬ゆ

自請假來多少日。
假を請うてより來多少の日、

五旬光景似須臾。
五旬の光景須臾に似たり。

已判到老爲狂客。
已に判す老に到りて狂客と爲るを、

不分當春作病夫。
不分す春に當りて病夫と作るを。

楊柳花飄新白雪。
楊柳花飄る新白雪、

櫻桃子綴小紅珠。
櫻桃子綴る小紅珠。

頭風不敢多多飲。
頭風して敢て多多飲まず、

能酌三分相勸無。
能く三分を酌みて相勸むるや無や。

【字解】【一】多少　いくら。どれ程。【二】光景　光陰といふが如し。【三】判　やけになつて自ら我身を棄ててゐること。又拌に作る。杜甫の曲江對酒に、縱飲久判人共棄とある。【四】不分　六朝以來の俗語で、分は意に通ず、豈の字を加へて看る、豈意ちざらんやの意で、意にたへざる意なり。杜甫の詩に、不分桃花紅勝錦、生憎柳絮白如綿とあり、尙夜航詩話に詳なり。【五】櫻桃子　ゆすらうめの實。さくらんぼ。【六】頭風　頭痛がする。

【題義】舒は姓、三は輩行、員外は官名。後集卷一、九日代羅樊二妓招舒著作の舒著作と同一人である。此詩は舒氏から長詩を贈られたのに酬いたのである。

【詩意】病氣で暇を請うてから五十日になるが、五十日ぐらゐ立つのは忽ちの中だ。自分は我が身を見限つてゐるのだから、老いて狂夫となつても今更何とも思はないが、春に當つて病人となつたのは

不平でたまらない。今や楊の花は白雪を飄し、櫻桃子は紅なる珠を綴つてゐる。この陽春の好景に接しては飲まずにはゐられないが、惜いかな頭痛がして澤山は飲めない。杯に三分目ほど酌んで勸めては下さらぬか。

將歸一絶

將に歸らんとす一絶

欲去公門返野扉。　公門を去りて野扉に返らんと欲す、
預思泉竹已依依。　預め思ふ泉竹の已に依依たらんことを。
更憐家醞迎春熟。　更に憐む家醞春を迎へて熟し、
一甕醍醐待我歸。　一甕の醍醐我が歸るを待つを。

【題義】官を罷めて自宅に歸らんとする時に作つた絶句である。

【詩意】役所を去つて自宅に歸らうと思ふ。宅中の泉水や竹樹が慕はしげに我を迎へるであらう。家釀の酒が既に熟して一甕の醍醐が我を待つであらうことは、更に余の尤も喜ぶ所である。

【字解】〔一〕公門　役所の門。野扉は自宅。〔二〕依依　慕はしげなる貌。〔三〕家醞　自家釀造の酒。〔四〕醍醐　美酒に喩ふ。

罷府歸舊居

府を罷めて舊居に歸る　此より後、重れて賓客を授かり、履道の宅に歸りて作る。

陋巷乘籃入。朱門挂印廻。　陋巷籃に乘りて入り、朱門印を挂けて廻る。
腰間拋組綬。纓上拂塵埃。　腰間組綬を拋ち、纓上塵埃を拂ふ。
屈曲閒池沼。無非手自開。　屈曲せる閒池沼、手自ら開くに非ざるは無し。
青蒼好竹樹。亦是眼看栽。　青蒼たる好竹樹、亦是れ眼のあたり看て栽う。
石片擡琴匣。松枝閣酒杯。　石片琴匣を擡げ、松枝に酒杯を閣く。
此生終老處。昨日却歸來。　此生終老の處、昨日却歸し來る。

【字解】〔一〕籃　籃輿。駕籠。〔二〕朱門　朱塗の門。役所の門なり。挂印は官印を掛けること、即ち辭職するなり。〔三〕組綬　官印の綬。〔四〕琴匣　琴をいれる箱。

【題義】河南尹を罷めて自宅に歸つた時の詩である。樂天は太和七年四月、病を以て河南尹を免せられ、再び太子賓客、分司東都を授けられて、洛陽の履道里の舊宅に住むことになつた。

【詩意】官を罷めて役所を去り、駕籠に乘つて舊居に入つた。腰間の印綬は已に拋ち去つて身輕になり、久しくかぶらなかつた冠の塵を拂つてかぶつた。宅中の屈曲せる池は嘗て手自ら掘つたもので、青青としてゐる竹樹は自ら監督して栽ゑたものである。石の上に琴の匣を載せ、松の枝に杯を置いて、琴酒の樂を肆にした。昨日やつと我が終焉の地に歸つて來て、始めて安心立命の地を得たことを感じた。

睡覺偶吟

官初罷後歸來夜。　官初めて罷めて後歸り來る夜、
天欲明前睡覺時。　天明けんと欲する前睡覺むる時。
起坐思量更無事。　起坐して思量するに更に事無し、
身心安樂復誰知。　身心の安樂復た誰か知らん。

【題義】睡覺めて偶然吟じた詩である。

【詩意】官を罷めて自宅に歸つた晩、夜の明ける少し前の頃、ふと睡から覺めた。床の上に起きあがつて考へて見たが、何も心にかかる問題はない。始めて身心の安樂を悟つた。

【字解】〔一〕思量　かんがへる。

問支琴石

疑因星隕空中落。　琴を支ふる石に問ふ
歎被泥埋澒底沈。　星の隕つるに因りて空中より落つるかと疑ひ、
天上定應勝地上。　泥に埋められて澒底に沈みしを歎ず。
支機未必及支琴。　天上定めて應に地上に勝るべし、
機を支ふるは未だ必ずしも琴を支ふるに及ばず。

【字解】〔一〕支機　集林に、有人尋河源、見婦人浣紗、問之、曰此天河也、乃與一石、而歸、問嚴君平、君平曰、此織女支機石也とある。

提攜拂拭知恩否。　提攜拂拭恩を知るや否や、
雖不能言合有心。　言ふ能はずと雖も合に心有るべし。

【題義】琴を置く臺石に問うた詩である。

【詩意】支琴石よ。お前は星の隕ちた時一緒に空中から落ちたのではあるまいかと疑はれるほど美しい石であつたが、惜いことに泥に埋められて澒底に沈んでしまつた。天上の方が地上よりよかつたかも知れないが、織女の支機石となるは必ずしも我が支琴石となるに勝るわけではない。お前は我が提攜拂拭の恩を知つてゐるか、口がないから言ふことは出來まいが、心には感じてゐるであらう。

自喜　自ら喜ぶ

身慵難勉強。性拙易遲廻。　身慵くして勉强し難く、性拙くして遲廻し易し。
布被辰時起。柴門午後開。　布被辰時に起き、柴門午後に開く。
忙驅能者去。閒逐鈍人來。　忙は能者を驅りて去り、閒は鈍人を逐うて來る。
自喜誰能會。無才勝有才。　自ら喜ぶも誰か能く會せん、無才は有才に勝る。

【字解】〔一〕遲廻　徘徊逡巡すること。〔二〕布被　木綿の夜具。辰時は午前八時。〔三〕柴門　木の小枝を集めて作つた門。茅

屋の柵。〔四〕會　理解する。

【題意】身の閑を得たことを喜んだ詩である。

【詩意】身は懶くて勉強することが出來ず、天性疎拙で發展が出來ない。朝寐して八時頃に始めて起き、午後になつてやつと門を開く。才能のある人は多忙を極めてゐるが、僕のやうな鈍物はいつも閑である。此點から觀れば無能は有能に勝ることを知つて、自ら喜んでゐるが、誰も吾が意中を理解する者はない。

裴常侍以題蔷薇架十八韻見示。因廣爲三十韻以和之。

裴常侍蔷薇架に題する十八韻を以て示さる。因つて廣めて三十韻となし、以て之に和す

託質〔一〕依高架。攢華對小堂。
晚開春去後。獨秀院〔二〕中央。
霽景朱〔三〕明早。芳時白晝長。
穠因天與色。麗共日爭光。
剪碧排千蕚。研朱染萬房。〔四〕
煙條塗石綠〔五〕。粉蘂撲雌黃〔六〕。
根動彤〔七〕雲涌。枝搖赤羽翔。
九〔八〕微燈炫轉。七〔九〕寶帳熒煌。
淑〔一〇〕氣熏行徑。清陰接步廊。
照梁迷藻〔一一〕棁。耀壁變雕〔一二〕墻。
爛若蘂然火。殷〔一三〕於葉得霜。
臙〔一四〕脂含臉笑。蘇〔一五〕合裛衣香。
浹〔一六〕洽濡晨露。玲瓏漏夕陽。
合〔一七〕羅排勘纈。醉〔一八〕暈淺深紅。
乍見疑廻面。遙看誤斷腸。
風朝舞飛燕〔一九〕。雨夜泣蕭娘〔二〇〕。
桃李慙無語。芝蘭讓不芳。
山榴〔二一〕何細碎。石竹〔二二〕苦尋常。
蕙慘偎欄避。蓮羞映浦藏。

託質を託して高架に依り、華を攢めて小堂に對す。
晚く開く春去つて後、獨り秀づ院の中央。
霽景朱明早く、芳時白晝長し。
穠は天の色を與ふるに因り、麗は日と共に光を爭ふ。
碧を剪りて千蕚を排し、朱を研りて萬房を染む。
煙條石綠を塗り、粉蘂雌黃を撲つ。
根動きて彤雲涌き、枝搖きて赤羽翔る。
九微燈炫轉し、七寶帳熒煌す。
淑氣行徑に熏じ、清陰步廊に接す。
梁を照して藻棁に迷ひ、壁に耀きて雕墻を變ず。
爛として蘂の火に然ゆるが若く、葉の霜を得たるよりも殷し。
臙脂臉を含んで笑ひ、蘇合衣に裛ひて香し、
浹洽して晨露に濕ひ、玲瓏として夕陽を漏らす。
合羅排勘の纈、醉暈淺深の粧。
乍ち見て疑ひて面を廻らし、遙に看て誤りて腸を斷つ。
風朝飛燕を舞はしめ、雨夜蕭娘を泣かしむ。
桃李慙ぢて語無く、芝蘭讓りて芳しからず。
山榴何ぞ細碎なる、石竹苦だ尋常なり。
蕙は慘みて蘭に偎りて避け、蓮は羞ぢて浦に映じて藏る。

怯敎蕉葉戰。妬得柳花狂。
豈可輕嘲詠。應須痛比方。
畫屏風自展。繡繖蓋誰張。
翠錦挑成字。丹砂印著行。
猩猩凝血點。瑟瑟蹙金匡。
散亂萎紅片。尖纖嫩紫芒。
觸僧飄毳裼。留妓冒羅裳。
寡和陽春曲。多情騎省郎。
緣誇美顏色。引出好文章。
東顧辭仁里。西歸入帝鄉。
假如君愛殺。留著莫移將。

【字解】【一】質　體なり、身なり。薔薇を指して言ふ。高架は高き棚。【二】院　中庭。【三】朱明　爾雅に、夏爲朱明とある。【四】研朱　硯で朱を磨ること。萬房は繁き花。【五】石燕　波斯に產する染料。樂天の詩に、峰攢石綠點、柳窕鵝脂絲とある。【六】怯れて蕉葉をして戰かしめ、妬んで柳花の狂するを得たり。豈輕しく嘲詠す可けんや、應に須らく比方するを痛むべし。畫屏風は自ら展べ、繡繖蓋は誰か張る。翠錦挑げて字を成し、丹砂印して行を著す。猩猩凝血點じ、瑟瑟蹙金匡し。散亂たり萎紅の片、尖纖たり嫩紫の芒。僧に觸れて毳裼を飄し、妓を留めて羅裳を冒す。和するもの寡し陽春の曲、情多し騎省の郎。美顏色を誇るに緣りて、好文章を引き出せり。東に顧みて仁里を辭し、西に歸りて帝鄉に入る。

語曰。里仁爲美。又樂君所居。名仁和里。

假如君愛殺すとも、留著して移し將つこと莫れ。

樂君題詩之次。而常侍詔到。唱和未竟。而軒騎西歸。故云。

峰貲　鈴の具の名。【七】彤雲　赤き雲。【八】九微燈　燈の名。王維の詩に、春窓明滅九微火とある。【九】七寶帳　七寶（金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・琥珀・珊瑚）で飾つた帳。【一〇】淑氣　佳氣といふが如し。【一一】藻梲　梲は桑上の短柱。藻は水藻を畫くなり。論語に見ゆ。【一二】臙脂　紅を刺繡して飾ること。左傳宣公二年に見ゆ。【一三】臙脂　べに。顏料なり。臉は目の下、頰の上。【一四】蘇合　香の名。【一五】淚洽　あまれく潤ふ。【一六】合羅　前集卷四、陸山道に合羅將軍呼萬歲とある。卷十二、喜山石榴花開に紅羅誰家合羅裙（羅裙を合すと讀んだのは誤。ここに訂正す）とある。回鶻の將軍の名であらう。拂菻國は、しぼり染のことで、回鶻の將軍は、しぼり染の服を著てゐるのであらう。【一七】酥暈　酥が發して赤く斑紋の出來ること。【一八】飛燕　漢の成帝の宮女。無に妙なり。【一九】鬱娥　女子の泛稱。【二〇】芝蘭　香草。【二一】山榴　山石榴。さつきの花。【二二】石竹　草花の名。尋常は平凡なこと。【二三】比方　ひきくらべる。【二四】鸞屏風　鸞のかいてある屏風。【二五】繡繖蓋　繖は帝に傘に作る。刺繡を施した傘。【二六】猩猩　獸の名。其血朱を染むべし。【二七】瑟瑟　珍寶の名。蹙金は金線を以て衣を繡し、其紋樹葉なるもの。杜甫の詩に、繡羅衣裳照春日、蹙金孔雀銀麒麟とある。【二八】毳裼　毳裼なり。細毛の僧衣。【二九】陽春曲　すぐれてよき詩。宋玉の文に、客有歌於郢中者、其爲陽春白雪とある。【三〇】騎省郎　散騎常侍（官名）をいふ。【三一】帝鄉　帝都長安。【三二】愛殺　殺は助辭。愛すること。【三三】留著　いつまでも洛陽に殘しておくこと。移將は長安に移し植ゑること。

【題義】裴常侍（裴は姓、常侍は官名）が薔薇架と題する十八韻三十六句の詩を寄せたので、樂天は三十韻六十句の詩を作つて之に和したのである。

【詩意】薔薇の花が羣を成して高い棚に身を託し、春の末、夏の初に、小堂に對して、中庭に咲き誇つてゐる。天與の美麗さが日月と光を爭ひ、千夢は碧を剪りたるが如く、萬房は朱を濺ぎしが如く、枝は石綠を塗りたるが如く、蘂は雌黃を點じたるが如く、根の動くは紅雲の湧くが如く、枝の搖くは赤鳥の翔るが如く、九微燈の輝き、七寶帳の熒くが如くである。香氣は徑に薰じ清陰は步廊に接はり、

欒を照しては欒梲かと怪まれ、牆壁に映じては其色を變じ、叢の火に燃ゆるが如く、葉の霜に飽いて紅なるが如く、笑を含み臙脂をきした美人の頰の如く、蘇合香の衣裳に裹ふが如く、晨の露に濡ひ、夕日に照され、合羅將軍の緋欒の服の如く、酒暈の玉肌に點點たるが如く、風に舞ふ時は趙飛燕が現れたかと思はれ、雨に潤ふ時は少女の泣いてゐるのかと思はれる。桃や李は慙ぢて語らず、芝蘭も其香を讓り、山石榴は細碎れてゐて比較にはならず、石竹などは見劣りがして太刀打は出來ない。蕙（香草の名）も悲んで欄に倚つて避け、蓮も羞ぢて浦曲に隱れ、芭蕉の葉も怯れて戰き、柳花も妬んで狂氣する。輕輕しく歌によむことも出來ず、比ぶべき物もない。畫屏風の自ら展開せるが如く、繡傘の自ら張れるが如く、翠錦の文字をなし、丹砂（其色赤し）の行列を成し、猩猩血の凝りたるが如く、寶石に黃金を鏤めたるが如く、紅紫散亂して、僧衣妓裳の飜るが如くである。さて散騎常侍裴君は此花の美を誇り好詩を作つたが、その詩も亦美好を極めてゐるので誰も唱和する者がない。裴君は仁和里の宅を去つて長安の都に行くことになつたが、たとひ此花を愛するとも、やはり洛陽に殘して置いて、長安に移植することはせぬがよい。

感舊詩卷

舊詩卷に感ず

夜深吟罷一長吁。　夜深け吟じ罷みて一たび長吁す、

【字解】〔一〕長吁　長嘆なり。

老淚燈前濕白鬚。　老淚燈前白鬚を濕す。

二十年前舊詩卷。　二十年前の舊詩卷、

十人酬和九人無。　十人の酬和九人は無し。

【語義】舊詩卷を見て感ずる所を述べた詩である。

【詩意】今二十年前の舊詩卷を見るに、唱和した人十人の中に九人は既に死んでしまつたのを悲んで、夜深けに詩を吟ずることを罷め、長嘆大息すれば涙が白鬚を濕した。

【字解】〔一〕酬和　唱和なり。

酬李二十侍郎

李二十侍郎に酬ゆ

笋老蘭長花漸稀。　笋老い蘭長じて花漸く稀なり、

衰翁相對惜芳菲。　衰翁相對して芳菲を惜む。

殘鶯著雨慵休囀。　殘鶯雨を著け慵くして囀ずるを休め、

落絮無風凝不飛。　落絮風無く凝りて飛ばず。

行掇木芽供野食。　行きて木芽を掇りて野食に供し、

【字解】〔一〕芳菲　花草かほり。〔二〕落絮　楊花の落つるなり。

坐牽蘿蔓挂朝衣。　坐して蘿蔓を牽きて朝衣を挂く。
十年分手今同醉。　十年手を分ちて今同じく醉ふ、
醉未如泥莫道歸。　醉ひて未だ泥の如くならざれば歸らんと道ふ莫れ。

【題義】李二十侍郎（李紳なり）に酬いた詩である。

【詩意】筍も既に伸び蘭も長じ花は極めて少くなつた。時に君と僕と衰翁相對して逝く春を惜んでゐる。殘鶯は雨を帶びて囀るに慵く、柳絮は風が無いので一處に固まつてゐて飛ばない。我等は木の芽を摘んで來ては食料に供し、蘿蔓を牽き張つて朝衣を掛けて語り合ふ。君とは十年も別れてゐて、今久し振りで俱に飲むのだから、醉ひつぶれるまでは歸らないことに致さう。

和夢得

夢得來詩云。謾讀圖書四十車。年年爲郡老天涯。一生不得文章力。百口空爲飽煖家。

夢得の來詩に云ふ、謾に圖書を讀む四十車、年年郡と爲り天涯に老ゆ、一生文章の力を用ひず、百口空しく飽煖家と爲る。

綸閣沈沈無寵命。
蘇臺籍籍有能聲。
豈唯不得清文力。
但恐空傳冗吏名。
郎署廻翔何水部。
江湖留滯謝宣城。
所嗟非獨君如此。
自古才難共命爭。

【字解】〔一〕綸閣　制詔を潤飾する役所。劉禹錫の禮部郎中・集賢院學士たりしことないふ。沈沈は深邃の貌。〔二〕蘇臺　蘇州の姑蘇臺。籍籍は誠すしさ貌。能聲は才能ありとの評判。〔三〕郎署　微官の役所。何水部は尚書水部郎何遜。詩に巧なり。〔四〕謝宣城　謝朓、字は玄暉、南齊の人、五言詩に長ず、曾て宣城太守となる。世に謝宣城といふ。〔五〕命　天命。運命。

【題義】劉禹錫（字は夢得。時に蘇州刺史たり）から詩を寄せられたのに和した作である。

【詩意】君は嘗て禮部郎中・集賢院學士として綸閣に奉職してゐたが、恩命に浴することが出來なかつた。其後蘇州刺史に任ぜられて名聲嘖嘖たるに至つた。然るに唯に文章の力を得ざるを憂ふるのみならず、徒に冗吏の名を傳へることを恐れてゐる。昔何遜はいつまでも郎署に徘徊し、謝朓は江湖に留滯して皆身の不遇を嘆じた。ただ獨り君ばかりではない。いかに才力があつても運命には抗し難い。これが古來の定めである。

贈草堂宗密上人

草堂の宗密上人に贈る

吾師道與佛相應。　吾が師の道は佛と相應ず、

【字解】〔一〕口業　口にたくは

念念無爲法法能。
口藏宣傳十二部。
心臺照耀百千燈。
盡離文字非中道。
長住虛空是小乘。
少有人知菩薩行。
世間只是重高僧。

念念無爲に法法能し。
口藏十二部を宣傳し、
心臺百千燈を照耀す。
盡く文字を離るるは中道に非ず、
長く虛空に住するは是れ小乘。
少しく人の菩薩の行を知る有らば、
世間只是れ高僧を重んせん。

【題義】己の草庵に居る宗密上人に贈つた詩である。

【詩意】上人の道は佛陀に近似し、無爲を念とし能く法を執る。口には能く十二部經を說き、心は百千燈を照すが如く明澈である。盡く文字を離れずして中道を守り、長く虛空に住せずして大乘に入る。世に菩薩の行を知る者あらば、必ず此高僧を尊信するであらう。

喜照密閒實四上人見過

照・密・閒・實四上人の過ぎられしを喜ぶ

紫袍朝士白髯翁。
與俗乖疎與道通。
官秩三廻分洛下。
交遊一半在僧中。
臭帑世界終須出。
香火因緣久願同。
齋後將何充供養。
西軒泉石北窓風。

紫袍の朝士白髯の翁、
俗と乖疎にして道と通ず。
官秩三たび廻りて洛下に分れ、
交遊一半僧中に在り。
臭帑の世界は終に須らく出づべし、
香火の因緣は久しく同じうせんことを願ふ。
齋後何を將てか供養に充てん、
西軒の泉石北窓の風。

【題義】照・密・閒・實（僧侶の名は一字を略するを常とす）四上人の來訪を喜んだ詩である。

【詩意】紫の官袍を著た白髯の老翁（樂天自ら謂ふ）は、俗人とは背き違ふ所が多いが、佛道には叶つてゐる。官職の爲に三たび洛陽を離れたけれども友人の半分は僧侶である。成るべく早く自分も俗界を離脫して、諸君と同じ道に入りたいと思つてゐる。折角來てくれても何のもてなしもないが、食後には西軒の泉石と北窓の風とを御馳走に供しよう。

【字解】〔一〕紫袍　紫色の上衣。〔二〕官秩　官位。洛下　洛陽。〔三〕臭帑世界　汙れた金錢を貴ぶ世間。〔四〕香火因緣　古人の盟誓には多く香火を設けて神に告ぐ。故に佛家彼此契合するを香火因緣といふ。北史に與主上有香火因緣、故相救援耳とある。〔五〕齋後　食後。供養　は饗應といふが如し。

贈皇甫六張十五李二十三賓客

皇甫六・張十五・李二十・三賓客に贈る

昨日三川新罷守。　昨日三川新に守を罷め、
今年四皓盡分司。　今年四皓盡く分司たり。
幸陪散秩閒居日。　幸に散秩閒居の日に陪す、
好是登山臨水時。　好し是れ山に登り水に臨む時。
家未苦貧常醞酒。　家未だ貧に苦まず常に酒を醞し、
身雖衰病尚吟詩。　身は衰病すと雖も尚ほ詩を吟ず。
龍門泉石香山月。　龍門の泉石香山の月、
早晩同遊報一期。　早晩同遊一期を報せん。

【題義】皇甫六・張十五・李二十（李紳）、並に太子賓客・分司東都となつた。因つて此詩を贈つたのである。

【詩意】僕は先頃河南尹の職を罷めたが、今年になつては僕も君等も皆分司東都（官名）になつた。幸にも閒職にゐて暇があるから、相連れだつて山水の間に遊賞しようではないか。お互に貧に苦むほどではないから常に酒が醞してあり、老いたりと雖もまだ詩を吟ずることは出來る。いつか其中龍門山や香山に同遊の約を結ばう。

【字解】〔一〕三川　洛陽附近の地名。三川守とは河南尹をいふ。〔二〕四皓　商山の四皓。漢の高祖の時、太子に侍して遊びし人。因つて太子賓客をいふ。皇甫七・張十五・李二十及び白樂天の四人。分司は東都に分司たること。〔三〕散秩　閒職なり。〔四〕龍門　洛陽の近くの山の名。香山は龍門山の東に在る。〔五〕早晩　いつか。近近の中。一期は一たび期會すること。

微之敦詩晦叔相次長逝。巋然自傷。因成二絶

微之・敦詩・晦叔相次で長逝す、巋然として自ら傷み、因つて二絶を成す

併失鵷鸞侶。空留麋鹿身。　併せて失ふ鵷鸞の侶、空しく留む麋鹿の身。
只因嵩洛下。長作獨遊人。　只嵩洛の下に因りて、長く獨遊の人と作る。

【字解】〔一〕巋然　獨り存する貌。王延壽の靈光殿賦に靈光巋然獨存とある。〔二〕鵷鸞　朝官に喩ふ。〔三〕嵩洛　嵩山・洛水。

【題義】元稹（字は微之）崔羣（字は敦詩）崔玄亮（字は晦叔）三友相次で死亡したので、己の獨り存するを傷み、因つて二絶句を作つたといふのである。

【詩意】昔官界に肩を比べた仲間は皆死んでしまつて、我のみ閒居して獨り殘つてゐる。ただ嵩山・洛水の間に、空しく獨遊する外はない。

〔二〕

長夜君先去。殘年我幾何。　長夜に君先づ去る、殘年我幾何ぞ。

秋風滿衫淚。泉下故人多。　秋風滿衫の淚、泉下故人多し。

【字解】【一】長夜　墳墓ないふ。蘇軾の詩に顧樂ニ長夜室ニとある。【三】殘年　老年なり。【三】泉下　黃泉の下。故人は舊友。

【詩意】君等は一足先きにあの世に去つた。僕も程なく後を追ふであらう。舊友がどんどん黃泉に赴くのを見ては、秋風に對して唯淚を流すばかりである。

池上閒詠

青莎臺上起ニ書樓一。
綠藻潭中繫釣舟一。
日晚愛行深竹裏。
月明多上小橋頭。
暫嘗ニ新酒一還成レ醉。
亦出ニ中門一便當レ遊。
一部清商聊送レ老。
白鬚蕭颯管絃秋。

池上閒詠

青莎臺上書樓を起し、
綠藻潭中釣舟を繫ぐ。
日晚れて愛し行く深竹の裏、
月明かにして多く上る小橋の頭。
暫く新酒を嘗めて還た醉を成し、
亦中門を出でて便ち遊びに當つ。
一部の清商聊か老を送る、
白鬚蕭颯たり管絃の秋。

【字解】【一】青莎　細草の名。【二】清商　樂曲の名。【三】蕭颯　秋風の音。

【題義】秋日池邊の景況を述べた詩である。

【詩意】青莎の生えてゐる高臺の上に書樓を建て、綠藻の生えまつはる潭に釣舟を繫ぎ、日暮には深い竹叢の中を好んで散歩し、月の明るい夕には多くは小橋の上に立つて眺め、新酒を飲んでは醉を求め、中門を出て遊賞すれば、どこからともなく清商曲の音が聞えて來て、我を送るものの如くである。白鬚の老人が秋日管絃の音を聞いては、坐に感慨を催さざるを得ない。

涼風歎

昨夜涼風又颯然。
螢飄葉墜臥床前。
逢レ秋莫歎須知分。
已過ニ潘安三十年一。

涼風歎

昨夜涼風又颯然、
螢飄り葉墜つ臥床の前。
秋に逢ひて歎ずる莫れ須らく分を知るべし、
已に潘安に過ぐること三十年。

【字解】【一】潘安　晉の潘岳、字は安仁、年三十二にして二毛を生じ、歎息のあまり秋興賦を作る。

【題義】秋風に過うて歎息した詩である。

【詩意】昨夜から秋風が颯然と吹き初め、吾が寢臺の前にも螢が飛び葉が落ちるやうになつた。併し實は秋に逢つても今更嘆息すべき分際ではないのだ。何となれば潘岳よりも三十年も年上なのだもの。

和高僕射罷節度讓尚書授少保分司喜遂游山水之作

高僕射が節度を罷め、尚書を讓り、少保分司を授けられ、遂に山水に游ぶを喜ぶの作に和す

暫辭八座罷雙旌。　暫く八座を辭して雙旌を罷め、
便作登山臨水行。　便ち登山臨水の行を作す。
能以忠貞酬重任。　能く忠貞を以て重任に酬い、
不將富貴礙高情。　富貴を將て高情を礙げず。
朱門出去簪纓從。　朱門出で去りて簪纓從ひ、
絳帳歸來歌吹迎。　絳帳歸り來れば歌吹迎ふ。
鞍轡鬧裝光滿馬。　鞍轡鬧裝光馬に滿つ、
何人信道是書生。　何人か信に道ふ是れ書生と。

【字解】〔一〕八座　隋唐には左右僕射六尚書を八座となす。雙旌は節度使をいふ。後集巻十一の送令狐相公赴太原を見よ。〔二〕朱門　朱塗の門。高官の役所の門。簪纓は官職に喩ふ。ここでは太子少保・分司東都たること。〔三〕絳帳　後漢書に、馬融坐高堂、施絳紗帳、前授生徒、後列女樂とある。因つて講座を稱して絳帳といふ。〔四〕鬧裝　衆寶雜飾を合せること。胡應麟

【題義】高僕射は高瑀である。この詩は高瑀が武寧軍節度使を罷め刑部尚書を辭し、太子少保（舊唐書本傳には太子少傅とある）分司東都に任ぜられ、山水の遊を肆にすることを得るを喜んだ詩に和したのである。

【詩意】高僕射が八座や節度使の榮職を辭して、山水の間に閑遊しようとするのは、誠に高尚な志である。能く忠貞を以て大任を奉じ、富貴を以て其志を汚さず、立派な官職は去つたが、それでも尚ほ閑職に任ぜられ、太子賓客となり歌吹を以て迎へられ、鞍轡を飾つた馬にも光が滿ちてゐる。この華華しさを觀ては誰も書生だなどと謂ふ者はあるまい。（後集巻十一、送徐州高僕射赴鎮を見よ）

送考功崔郎中赴闕　考功崔郎中の闕に赴くを送る

稱意新官又少年。　意に稱ふ新官又少年、
秋涼身健好朝天。　秋涼しく身健にして天に朝するに好し。
青雲上了無多路。　青雲に上り了るは多路無し、
却要徐驅穩著鞭。　却つて要す徐に驅りて穩かに鞭を著くるを。

【字解】〔一〕青雲　高官に喩ふ。

【題義】考功郎中（官名）崔氏が宮闕に赴くのを送る詩である。

【詩意】君が少年の身を以て自分の氣に入つた新官に任ぜられ、清秋の時節に宮闕に赴くのは誠に喜ばしいことである。念の爲に君に注意するが、將來の榮達を期するには、別に樣樣な道があるわけで

はない。じみに著實に進んで行けばよいのである。

送楊八給事赴常州

無嗟別青瑣。且喜擁朱輪。　嗟く無れ青瑣に別るるを、且つ喜べ朱輪を擁するを。
五十得三品。百千無一人。　五十にして三品を得るは、百千に一人も無し。
須勤念黎庶。莫苦憶交親。　須らく勤めて黎庶を念ふべし、苦だ交親を憶ふ莫れ。
此外無過醉。毗陵何限春。　此外醉ふに過ぐるなし、毗陵何限の春。

【題義】給事中（官名）楊虞卿の常州刺史となつて赴任するのを送る詩である。容齋隨筆に「太和七年李德裕を以て相となす。文宗與に朋黨の事を論ず。時に給事中楊虞卿・蕭澣・中書舍人張元夫、權要に依附し、上は執政を干し下は有司を撓す。上、之を惡む。是に於て楊を出して常州に刺たらしめ、蕭を鄭州に刺たらしめ、張を汝州に刺たらしむ。皆李宗閔の客なり。他日、上、また朋黨に言及す。宗閔曰く、臣素より之を知る。故に虞卿が輩には皆美官を與へずと。德裕曰く、給事中・中書舍人は美官に非ずして何ぞと。宗閔色を失ふ」とある。されば虞卿の常州刺史となつたのは朝廷から逐はれたのである。

【詩意】宮闕に別れ去るを嗟かずに、常州刺史に任ぜられたことを喜ぶがよい。五十で三位に敍せられる人は、百千人中一人もない。以て光榮となすに足るのである。勤めて衆民を濟ふことを念ひ、親友を憶ふことなどはせぬがよい。其外は何よりも先づ酒を飲み給へ。常州の春景色は無限によいから。

【字解】〔一〕青瑣　宮門なり。刺して連瑣の文をなし青く之を塗る。故に此名あり。〔二〕朱輪　貴人の乘る車。〔三〕三品　三位なり。〔四〕黎庶　衆民。〔五〕交親　親友。〔六〕毗陵　卽ち常州。今の江蘇省武進縣治。何限は無限といふが如し。

聞歌者唱微之詩

新詩絶筆聲名歇。　新詩筆を絶つて聲名歇み、
舊卷生塵篋笥深。　舊卷塵を生じて篋笥深し。
時向歌中聞一句。　時に歌中に向ひて一句を聞く、
未容傾耳已傷心。　未だ耳を傾くるを容れずして已に心を傷ましむ。

【題義】歌者の元稹（字は微之）の作つた詩を歌ふのを聞いて作つた詩である。

【詩意】元稹は既に故人になつたから、新作もないので評判もなくなり、ただ舊詩卷が手文庫の中に塵に埋もれてゐるばかりだ。今歌の中で其作を聞き、まだ耳を傾けるに及ばずして先づ心を傷ましめた。

【字解】〔一〕篋笥　本箱、文庫。

醉送李二十常侍赴鎮浙東

醉うて李二十常侍が浙東に赴鎮するを送る

靖安客舍花枝下。
共脫青衫典濁醪。
今日洛橋還醉別。
金杯翻汙麒麟袍。
喧闐夙駕君脂轄。
酩酊離筵我藉糟。
好去商山紫芝伴。
珊瑚鞭動馬頭高。

靖安の客舍花枝の下、
共に青衫を脫して濁醪に典す。
今日洛橋に還た醉別し、
金杯翻して汙す麒麟の袍。
喧闐夙に駕して君轄に脂さす、
離筵に酩酊して我糟を藉く。
好し商山紫芝の伴を去つて。
珊瑚鞭動いて馬頭高し。

客の四皓の條を見よ。

【題義】李紳（字は公垂）の浙東觀察使となつて赴任するのを送る詩である。

【詩意】嘗て靖安里の客舍の花の下で、共に青衫を脫ぎ之を質において濁酒を飲んだこともあつたが、今日は洛橋で醉別し、金杯をこぼして麒麟袍を汙した。君が夙に駕して去らんとすれば衆人が騷ぎ立つて見送り、我は送別會場に泥醉して糟の上に尻餅をついた。君は雄雄しくも太子賓客たる我我を後にし、珊瑚の鞭を振つて去る。

【字解】〔一〕靖安　長安の里の名。前集卷十、夢與李七庾三十三同訪元九を見よ。〔二〕青衫　官服。濁醪は濁酒。典は質におく。〔三〕麒麟袍　麒麟を刺繍した上衣。〔四〕喧闐　大騷ぎすること。脂轄は轄に油をさして車のよくまはるやうにする。〔五〕酩酊　醉倒する。離筵は送別の宴席。〔六〕商山紫芝伴　商山の四皓のやうに山に隱れて芝草を採る仲間、太子賓客たる人人。前の題は皇甫六・張十五・李二十・三賓

醉別程秀才

醉うて程秀才に別る

五度龍門點額廻。
却緣多藝復多才。
貧泥客路粘難出。
愁鎖鄉心掣不開。
何必更遊京國去。
不如且入醉鄉來。
吳絃楚調瀟湘弄。
爲我殷勤送一杯。

程生善琴。尤能沈湘曲。

五度龍門より點額して廻る、
却つて多藝にして復た多才なるに緣る。
貧は客路を泥し粘して出で難く、
愁は鄉心を鎖して掣すれども開かず。
何ぞ必ずしも更に京國に遊び去らん、
如かず且つ醉鄉に入り來らんには。
吳絃楚調瀟湘の弄、
我が爲に殷勤に一杯を送れ。

【題義】程秀才の落第して去るのに別れる詩である。

【字解】〔一〕龍門　後漢書李膺傳に、士有被其容接者、名爲登龍門とあり、注に辛氏の三秦記を引きて曰く、河津、一名龍門。水險不通、魚鼈之屬莫能上、上則爲龍也と。點額は水經注に、鯉魚三月上後龍門、得波爲龍、否則點額而還とある。科擧に落第するに喩ふ。〔二〕京國　京師。帝都。〔三〕瀟湘弄　瀟湘曲といふが如し。〔四〕殷勤　ねんごろに。

【詩意】君は五回落第したが、それは無能な爲ではなく、却つて多藝多才の爲である。氣の毒なことに貧窮して路銀にも事缺く有樣であるが、心は鄉愁に鎖されて開かうとしても開かない。今更京師などへ行つて試驗を受ける必要はない、寧ろ酒でも飲んで氣を霽らすがよい。特に君は音樂に妙を得てゐるのだから、まア一曲彈いて我に一杯の酒を侑められよ。

自詠

白衣居士紫芝仙。
半醉行歌半坐禪。
今日維摩兼飲酒。
當時綺季不請錢。
等閒池上留賓客。
隨事燈前有管絃。
但問此身銷得否。
分司氣味不論年。

自詠

白衣の居士紫芝の仙、
半は醉ひて行歌し半は坐禪す。
今日の維摩は兼ねて酒を飲み、
當時の綺季は錢を請はず。
等閒に池上賓客を留め、
事に隨つて燈前管絃有り。
但問ふ此身銷し得るや否や、
分司の氣味年を論せず。

【字解】〔一〕白衣居士　白衣をまとうてゐる佛教信者。紫芝仙は山中に靈草を採る仙人。樂天自ら謂ふ。〔二〕維摩　維摩詰。菩薩の名。〔三〕綺季　商山四皓の一人、綺里季。〔四〕等閒　かりそめに。〔五〕分司　官名。分司東都なり。氣味は興趣といふが如し。

【題義】自己の境遇を詠じた詩である。

【詩意】吾が身は半は在家の僧の如く半は仙人のやうである。されば醉つて行歌することもあれば坐禪することもある。昔の維摩詰は酒を飲まなかつたらうが、今日の維摩詰（樂天自ら比す）は酒を飲む。又昔の仙人の綺里季は俸祿などは取らなかつたが、今の仙人（樂天自ら比す）は俸祿を戴いてゐる。閒に任せて客を引き留めて池邊に宴したり、燈前で管絃を弄したりもする。分司東都たる興趣は年齡に拘はらず愉快であるが、この愉快が我身を銷磨することがなければよいが。

把酒思閒事二首

把酒思閒事。春愁誰最深。
乞錢羈客面。落第擧人心。
月下低眉立。燈前抱膝吟。
憑君勸一醉。勝與萬黃金。

酒を把りて閒事を思ふ　二首

酒を把りて閒事を思ふ、春愁誰か最も深き。
錢を乞ふ羈客の面、落第せる擧人の心。
月下に眉を低れて立ち、燈前に膝を抱いて吟ず。
君に憑む一醉を勸めよ、萬黃金を與ふるに勝れり。

【字解】〔一〕閒事　つまらない事。〔二〕羈客　旅人。〔三〕擧人　官吏登庸試驗の受驗者。

【題義】酒杯を持つて取りとめもない事を考へたといふ意。

【詩意】杯を手に持つて愚にもつかぬ事を考へた。春愁の最も深いのはどんな人であらうか。旅先で旅費がなくなり人に錢を乞ふ者が、月下に眉を低れて立つ時か。或は落第した擧人が燈前に膝を抱いて沈吟する時であらう。そんな人には一杯を勸めてやるがよい。そんな時の一杯の酒は萬金にまさる價がある。

〔二〕

把酒思閒事。春嬌何處多。
試鞍新白馬。弄鏡小青娥。
掌上初教舞。花前欲按歌。
憑君勸一醉。勸了問如何。

〔二〕

酒を把りて閒事を思ふ、春嬌何の處か多き。
鞍を試みる新白馬、鏡を弄する小青娥。
掌上に初めて舞を教へ、花前に歌を按ぜんと欲す。
君に憑む一醉を勸めよ、勸め了りて如何と問へ。

【字解】〔一〕小青娥　少女。〔二〕掌上初教舞　體擧の輕きを稱するなり。漢の趙飛燕、能く掌上の舞をなせしこと、飛燕外傳に見ゆ。〔三〕按歌　歌を考へる。

【詩意】杯を手に持つて愚にもつかぬ事を考へた。嬌態の最も多いのは何であらうか。白馬に始めて鞍を置いて騎りまはし、花の下で歌を考へたり、鏡を弄ぶやうになつた少女に、初めて舞を教へたりする時であらう。その時に先づ一杯の酒を勸め、さて感慨はどうだと聞いて見るがよい。

衰荷

白露凋花花不殘。
涼風吹葉葉初乾。
無人解愛蕭條境。
更遶衰叢一匝看。

衰荷

白露花を凋して花殘らず、
涼風葉を吹いて葉初めて乾く。
人の解く蕭條境を愛する無し、
更に衰叢を遶りて一匝して看る。

【題義】秋になつて凋衰した蓮の葉のさまを述べた詩である。

【詩意】秋になり白露が降つて花を殘らず枯らしてしまひ、涼風が吹いて葉も乾びてしまつた。このさびれた處に無限の味があるのだが、誰もこの氣味を愛好する者がない。自分は唯獨り衰叢のまはりを更に一回まはつて見た。

【字解】〔一〕蕭條　淋しき貌。

池上送考功崔郎中。兼別房寶二妓

池上にて考功崔郎中を送り、兼ねて房・寶の二妓に別る

文昌列宿徵還日。
洛浦行雲放散時。

文昌列宿徵還の日、
洛浦行雲放散の時。

【字解】〔一〕文昌　星の名。史記に斗魁戴匡六星曰ニ文昌宮一とある。列宿は列星なり。崔郎中に喩ふ。

鵷鷺上天花逐水。　鵷鷺天に上りて花水を逐ふ、
無因再會白家池。　再び白家の池に會するに因無し。

鵷鷺　朝官をいふ。崔郎中に喩ふ。花は妓に喩ふ。【四】白家池　白氏（樂天）の家の池。

【題義】池邊で考功郎中崔氏の行を送り（前に送考功崔郎中赴闕と題する詩あり）兼ねて房・寶（姓なり）二妓に別れる詩である。

【詩意】文昌星（崔郎中に喩ふ）が都に徵し還され、二妓も伴つて去るので、洛浦の神女が解放されたやうである。やがて鵷鷺は天に上り花は水を逐うて去り、再び我が家の池に會する由もない。殘り惜いことだ。

【字解】【一】依仁　長安の里の名。【二】履信　長安の里の名。【三】宿草　宿葬に同じ冬にも枯れない草。

【四】洛浦　洛水のほとり。漢衡の賦に召洛浦之宓妃とあり。行雲は飛び行く雲。房寶二妓に喩ふ。【三】

自問

依仁臺廢悲風晚。　依仁の臺は廢す悲風の晚、
履信池荒宿草春。　履信の池は荒る宿草の春。

晦叔亭臺在依仁。微之池館在履信。

自問老身騎馬出。　自ら問ふ老身馬に騎りて出で、
洛陽城裏覓何人。　洛陽城裏何人をか覓むる。

【題義】自ら問ふ詩である。

【詩意】崔玄亮（字は晦叔）は死んで依仁里の亭臺も破れ、元稹（字は微之）も死んで池館も荒れてしまつた。折角馬に騎つて出かけて見ても、廣い洛陽城中に訪ふべき人とてもない。

送陳許高僕射赴鎭　陳許の高僕射が鎭に赴くを送る

敎詩閱禮中軍帥。　詩に敎く禮を閱す中軍の帥、
重士輕財大丈夫。　士を重んじ財を輕んず大丈夫。
常與師徒同苦樂。　常に師徒と苦樂を同じうし、
不敎親故隔榮枯。　親故をして榮枯を隔てしめず。
花鈿坐遶黃金印。　花鈿坐して遶る黃金の印、
絲竹行隨白玉壺。　絲竹行き隨ふ白玉の壺。
商皓老狂唯愛醉。　商皓老狂して唯醉を愛す、
時時能寄酒錢無。　時時能く酒錢を寄するや無や。

【字解】【一】敎詩閱禮　左傳僖公二十七年に晉作三軍謀元帥、趙衰曰、郤縠可、臣亟聞其言矣、說禮樂而敎詩書云云とある。中軍帥は卽ち元帥なり。【二】師徒　部下の兵士。【三】親故　親戚故舊。【四】花鈿　婦人の首飾。前集卷十二の長恨歌に見ゆ。ここでは美人の意に用ふ。【五】絲竹　管絃なり。【六】商皓　商山の四皓。前の贈皇甫六・張十五・李二十・三賓客の四皓を見よ。【七】酒錢　酒を買ふ錢、さかて。

【題義】　高僕射（前の和下高僕射罷二節度一讓二尚書一授二少保分司一、喜二遂游二山水一之作上を見よ）が陳許の節度使となつて赴任するのを送る詩である。

【詩意】　高僕射は詩書禮樂に造詣が深く、士を重んじ財を輕んずる立派な將軍である。常に部下の兵士と苦樂を俱にし、人の榮枯によつて待遇を異にするやうなことはない。今や此地を去るに臨み、盛な送別の宴が開かれて、美人が將軍を取卷いて黃金の官印を遶り、管絃の音が白玉の酒壺に隨行する。さて商皓にも比すべき我は、老狂して唯酒を飲むのを樂としてゐるが、時時酒代を惠んでは下さるまいか。

青氈帳二十韻

合聚千羊毳。施張百子絳。
司馬遷書云。張二帟帳一。

骨盤邊柳健。色染塞藍鮮。
北製因戎掠。南移虜逐遷。
汰風吹不動。禦雨濕彌堅。
有頂中央聳。無隅四嚮圓。
傍通門豁爾。內密氣溫然。
遠別關山外。初安庭戶前。
影孤明月夜。價重苦寒年。
軟暖圍氈毯。鉾摐束管絃。
最宜霜後地。偏稱雪中天。
側置低歌座。平鋪小舞筵。
閒多揭簾入。醉便擁袍眠。
鐵檠移燈背。銀囊帶火懸。
深藏曉蘭焰。闇貯宿香煙。
獸炭休親近。狐裘可棄捐。
硯溫融凍墨。瓶煖變春泉。
惠帳徒招隱。茅庵浪坐禪。
貧僧應歎羨。寒士定留連。
賓客於中接。兒孫向後傳。

青氈帳二十韻

千羊の毳を合聚し、百子の絳を施張す。

骨は邊柳を盤めて健に、色は塞藍に染めて鮮かなり。
北製戎に因りて掠め、南移虜を逐ひて遷る。
風を汰して吹けども動かず、雨を禦ぎ濕ひて彌よ堅し。
頂有りて中央に聳え、隅無くして四嚮圓なり。
傍は通じて門豁爾、內は密にして氣溫然。
遠く關山の外に別れ、初めて庭戶の前に安んず。
影は孤なり明月の夜、價は重し苦寒の年。
軟暖にして氈毯を圍み、鉾摐として管絃を束ぬ。
最も霜後の地に宜しく、偏に雪中の天に稱ふ。
側に低歌の座に置き、平かに小舞筵に鋪く。
閒多くして簾を揭げて入り、醉ひて便ち袍を擁して眠る。
鐵檠燈を移して背き、銀囊火を帶びて懸く。
深く曉蘭の焰を藏し、闇に宿香の煙を貯ふ。
獸炭親近するを休め、狐裘棄捐す可し。
硯溫かにして凍墨を融かし、瓶煖かにして春泉を變ず。
惠帳徒に隱を招き、茅庵浪に坐禪す。
貧僧應に歎羨すべし、寒士定めて留連せん。
賓客中に於て接はり、兒孫後に向ひて傳ふ。

王家誇舊物。未及此青氈。

王子敬語二愉兒一：青氈我家舊物。

【字解】〔一〕毳　細毛なり。〔二〕百子帟　百挺の弓。〔三〕邊柳　邊地の柳。〔四〕塞藍　邊塞に生ずる藍。〔五〕汰　除き去る。〔六〕四簡　四方といふが如し。〔七〕鮫鼎　廣大の鼎。〔八〕氈毯　毛氈。〔九〕爺揮　爺爺なり。音の鼎。〔一〇〕閒多閒暇なり。〔一一〕鑪鼎　爐臺。〔一二〕銀甕　帳中の鑪なり。〔一三〕宿香　久しくこもつてゐる香。〔一四〕獸炭　獸の形に作つた炭。晉書に羊琇性豪侈、炭屑和作二獸形一、以温レ酒、洛下豪貴、咸効效之とある。〔一五〕薰帳　香草を薰めて作つた帳。〔一六〕留連　逗留する。〔一七〕王家　自注にある王子敬、卽ち晉の王獻之なり。

【題義】青い毛氈の帳を詠じた詩である。甌北詩話卷四に、按其製頂高體圓、來レ自二戎俗一、卽今蒙古包也、とある。

【詩意】この青氈帳は千頭の羊の細毛を聚め、百本の弓を張つて作つたもので、邊地の柳の枝を盤めて骨となし、之を染むるに邊塞の藍を以てし、北方の戎の土地で作られ、虜の南下すると共に中國に移り來り、よく風を凌ぎ雨を禦ぐことが出來る。頂は其中央に聳え圓く四方に裙を引いてゐる。傍に出入口があつて、中は密閉されて溫かである。遠く關山萬里の異域を別れて、今我が庭戸の前に安んせられてゐる。此中に居れば毛氈に圍まれてゐるから、ボカボカと心地よく、管絃を奏すれば鏘鏘と音がこもつて反響し、霜雪の時節には跳へ向の品物である。歌の座に置いてもよく、舞筵に置いてもよい。故に閒さへあれば此中に入り、醉へば袍にくるまつて眠つてゐる。燭臺を後に移し中に火爐を設け、香を焚きなどする。かうしてゐれば獸炭などを近づける必要もなく、狐裘などは棄てたいくらゐだ。硯の氷も融け瓶の水も春泉の如くである。かの薰帳は隱者じみて居り、茅庵は坐禪に適するのみである。されば貧僧が此を見たらさぞ羨むであらうし、貧士は逗留して去らないであらう。我は此中で賓客と應對し、死後には子孫に讓らうと思ふ。かの王獻之は偸兒に向ひ「青氈は我が家傳來の舊物だ」と誇つてゐるが、この青氈帳には及ぶまい。

答夢得秋日書懷見寄

夢得の秋日懷を書して寄せられしに答ふ

幸免二非常病一。甘當二本分衰一。

幸に非常の病を免れ、甘んじて本分の衰に當る。

眼昏燈最覺。腰瘦帶先知。

眼の昏きは燈最も覺え、腰の瘦せたるは帶先づ知る。

樹葉霜紅日。髭鬚雪白時。

樹葉霜に紅なる日、髭鬚雪のごとく白き時。

悲愁緣欲老。老過却無悲。

悲愁は老いんと欲するに緣る、老い過ぐれば却て悲む無し。

【字解】〔一〕本分　當然の分限。

【題義】劉禹錫（字は夢得）が、秋、感懷を書して送り越したのに答へた詩である。

【詩意】幸に大病にも罹らないで、分限相當の老衰境に入つた。燈を見る時に一番よく視力の衰へたことがわかり、身の瘦せたことは帶の長さでよくわかる。樹葉の紅を呈する秋に當り、鬚髮の雪白を

感することが深い。併し悲愁するのは先づ老境に入らうといふ時代のことで、老境を過ぎ越してしまへば却つて悲愁しなくなるものだ。

同諸客題于家公主舊宅

諸客と同じく于家公主の舊宅に題す

平陽舊宅少人遊。
應是遊人到卽愁。
布穀鳥啼桃李院。
絡絲蟲怨鳳皇樓。
臺傾滑石猶殘砌。
簾斷眞珠不滿鉤。
聞道至今蕭史在。
髭鬚雪白向明州。

【字解】〔一〕平陽　洛陽の里の名か。〔二〕布穀鳥　鳥の名。一に鳲鳩といひ、又郭公ともいふ。〔三〕絡絲蟲　こほろぎ。鳳皇樓は夫妻和樂してゐた樓。左傳に、鳳皇于飛、和鳴鏘鏘とある。〔四〕鉤　簾を捲いて懸けるカギ。〔五〕蕭史　善く簫を吹きて鳳鳴をなす。秦の穆公、女弄玉を以て之に妻はす。遂に弄玉は鳳に簫を吹くことを教ふ。後弄玉は鳳に乗り、蕭史は龍に乗りて飛昇して去る。ここでは公主の夫たる于秀友に喩ふ。〔六〕明州　今の浙江省鄞縣。

【題義】諸客と俱に于家公主の舊宅に題した詩である。汪立名曰く「按ずるに周益公の英華辨證に、于家公主は憲宗の女永昌公主（皇女を公主といふ）の下りて于頔の子季友に嫁せるなり。元和の間に卒す。梁國に追封せられ惠康と謚せらる。于頔は河南に家し後京兆に徙る。居易題する所の舊宅は洛中に在り。公主已に亡して蕭史尚ほ在りと言ふ。後又寄明州于駙馬使君詩（後集巻十三）あり、云はく、留滯三年在浙東及び海味腥鹹の語あり。皆明州を指すなり。英華に韶州に作るは、是れ誤つて于季友を以て于琮となせばなり云云」と。

【詩意】平陽里に在る公主の舊宅は訪ふ人も稀で、荒廢を極めてゐるから、一たび訪へば誰でも愁嘆しないものはない。春ならば淋しく桃李の咲き亂れた中庭に布穀鳥が啼いてをり、秋ならば絡緯が嘗て夫妻和樂した樓閣に鳴いてゐるといふ有樣である。臺は傾いて滑石が猶ほ砌に殘存し、眞珠の飾を施した簾も千切れて鉤に懸らない。聞けば今でも夫君はまだ存命で、老衰して明州あたりに往つてゐるさうだ。

答夢得八月十五日夜翫月見寄

夢得が八月十五日夜、月を翫んで寄せられしに答ふ

南國碧雲客。東京白首翁。
松江初有月。伊水正無風。

南國碧雲の客、東京白首の翁。
松江初めて月有り、伊水正に風無し。

遠思兩鄉斷。清光千里同。
不知娃館上。何似石樓中。

其夜余在龍門石樓上翫月。

【字解】〔一〕南國　時に劉禹錫は蘇州刺史たり。〔二〕東京　洛陽。時に樂天は洛陽に在り。〔三〕松江　蘇州に在る川。〔四〕伊水　洛陽に在る川。〔五〕娃館　蘇州に在る館娃宮。昔吳王夫差の西施を館せしめた處。〔六〕石樓　自注に在る洛陽の龍門山の石樓。

【題義】劉禹錫（字は夢得）の八月十五夜に月を賞して寄せられた詩に答へたのである。

【詩意】君は碧雲を隔てた南國に居り、僕は白髮の老人として洛陽に居る。八月の十五夜に松江に新月の上る頃は、伊水にも風がなく靜な夜であつた。千里を照す明月の光を仰ぎ觀て、身は兩地に隔れども相思ふ心は正に相同じであつたらう。館娃宮の上で君の看た月と龍門山の石樓の中で僕の看た月と、果して相違があつたであらうか。

初冬早起寄夢得

起戴烏紗帽。行披白布裘。
爐溫先煖酒。手冷未梳頭。

初冬早起、夢得に寄す

起きて烏紗の帽を戴き、行きて白布の裘を披る。爐溫かにして先づ酒を煖め、手冷かにして未だ頭を梳らず。
早起煙霜白。初寒鳥雀愁。
詩成遣誰和。還是寄蘇州。

【字解】〔一〕烏紗帽　帽の名。〔二〕蘇州　時に劉禹錫は蘇州刺史たり。

【題義】初冬朝早く起きた時の樣を敍して劉禹錫に寄せた詩である。

【詩意】朝起きて烏紗帽をかぶり白布裘を著て閒步し、まづ爐の火を盛にして酒を燗し、手がつめたいのでまだ髮も梳らない。あたりには霜氣が白く罩めて軒端には雀が鳴いてゐる。詩が出來たから又君の處へ寄せて唱和してもらふ。

秋夜聽高調涼州

樓上金風聲漸緊。
月中銀字韻初調。
促張絃柱吹高管。
一曲涼州入沈寥。

秋夜高調涼州を聽く

樓上の金風聲漸く緊し、
月中の銀字韻初めて調ふ。
絃柱を促張して高管を吹く、
一曲の涼州沈寥に入る。

【字解】〔一〕高調　調子を高くひくことであらう。後集巻十一、夜招梅叔二に、高調奉箏一兩弄、小花蠻絃二三升とある。涼州は樂曲の名。〔二〕金風　秋風。〔三〕銀字　樂器の名。〔四〕促張　ひきしめる。〔五〕沈寥　おほぞら。想辭に沈寥兮天高而氣肅とある。

律詩　初冬早起寄夢得　秋夜聽高調涼州

【題義】秋の夜に涼州曲を吹くのを聴いて作つた詩である。

【詩意】明月に照された樓上から、秋風のひしひしと身に泌む時、涼州の曲を吹奏する銀字の高調が大空に響き渡る。

香山寺二絶

香山寺

空門寂靜老夫閒。
伴鳥隨雲往復還。
家醞滿瓶書滿架。
半移生計入香山。

空門寂靜にして老夫閒なり、
鳥に伴ひ雲に隨つて往き復た還る。
家醞は瓶に滿ち書は架に滿つ、
半は生計を移して香山に入る。

【題義】香山寺に遊んだ詩である。

【詩意】香山寺は至つて閑靜で、此に遊べる余も亦閑暇である。鳥に伴ひ雲に隨つて往還徘徊した。瓶に滿つる酒と書架に滿つる書と、謂はば全財産の半を攜へて、此寺に寄留したやうなものだ。

【字解】〔一〕空門　佛寺をいふ。老夫は樂天自ら謂ふ。〔二〕家醞　自家釀造の酒。〔三〕生計　財産といふが如し。

〔一〕

愛風巖上攀松蓋。
戀月潭邊坐石稜。
且共雲泉結緣境。
他生當作此山僧。

〔二〕

風を愛して巖上松蓋を攀ぢ、
月を戀ひて潭邊石稜に坐す。
且つ雲泉と共に緣境を結ぶ、
他生當に此山の僧と作るべし。

【詩意】自分は風を愛しては巖上の松に攀ぢ上り、月を戀ひては潭邊の岩角に坐し、且つ雲や泉と親交を結んでゐる。恐らく再び此世に生れかへつたら、此山の僧にでもなるであらう。

【字解】〔一〕松蓋　松の枝が茂つて傘のやうになつてゐる處。〔二〕石稜　石のかど。〔三〕他生　來世

送舒著作重授省郎赴闕

舒著作が重ねて省郎を授けられ闕に赴くを送る

三歲相依在洛都。
遊花宴月飽歡娛。
惜別笙歌多怨咽。
願留軒蓋少踟躕。
劍磨光彩依前出。
鵬擧風雲逐後驅。
從此求閒應不得。

三歲相依りて洛都に在り、
花に遊び月に宴して飽くまで歡娛す。
別を惜みて笙歌多く怨咽し、
留まるを願ひて軒蓋少く踟躕す。
劍磨きて光彩前に依りて出で、
鵬擧りて風雲後を逐ひて驅る。
此れより閒を求むる應に得ざるべし、

【字解】〔一〕洛都　洛陽。〔二〕軒蓋　馬車の輦。

更能重醉白家無。　更に能く重ねて白家に醉ふや無や。

【題義】舒著作（舒は姓、著作は著作郎の略、官名。前に見ゆる舒員外といふのと同一人であらう。）が重ねて省郎に任せられて宮闕に赴くのを送る詩である。

【詩意】これまで三年間共に洛陽にゐて、花月の遊を倶にして樂を盡したのが、いよいよ別れなければならなくなつたので、別を惜んで笙歌すれば其聲が怨むが如く咽ぶが如くである。因つて馬車を引留めて暫く落著かせた。君の佩びてゐる劍は新に磨かれて一層の光彩を增した。大鵬の飛揚するが如く華華しく都を指して上れば、風雲が君の後を追つて飛ぶのを見る。省郎となれば今迄のやうに閒を得ることは出來まいから、更に僕の家に來て倶に酒を酌むことも出來まい。

同諸客嘲雪中馬上妓

珊瑚鞭彈馬踟躕。　珊瑚鞭彈れて馬踟躕す、
引手低蛾索一盃。　手を引き蛾を低れて一盃を索む。
腰爲逆風成弱柳。　腰は風に逆ふが爲に弱柳と成り、
面因衝冷作凝酥。　面は冷を衝くに因りて凝酥と作る。
銀篦穩篆烏羅帽。　銀篦穩かに篆す烏羅の帽、
花襜宜乘叱撥駒。　花襜乘るに宜し叱撥の駒。
雪裏君看何所似。　雪裏君看よ何の似たる所ぞ、
王昭君妹寫眞圖。　王昭君が妹の寫眞の圖。

諸客と同じく雪中馬上の妓を嘲る

【題義】諸客と倶に雪中馬上の妓を戲弄した詩である。

【詩意】珊瑚の鞭を垂れた馬が徘徊し、馬上の美妓が手を伸し眉を低れて一杯の酒を求めてゐる。その腰は風に逆ふ柳の力なきが如く、顏は寒氣の爲に乳の固まつたやうに白い。銀篦を穩かに插して黑い薄絹の帽をかぶり、美しい膝蔽をして若駒に乘つてゐる。それが雪の中に立つてゐる所は、全く王昭君の妹の肖像畫のやうである。

【字解】【一】踟躕　徘徊といふが如し。【二】蛾　美人の眉。一盃は一杯。【三】凝酥　凝脂に同じ、白き乳のかたまり。【四】銀篦　篦は髮を梳る具。烏羅は黑い薄絹。【五】花襜　美しい膝蔽。叱撥は馬の名。續博物志に、唐天寶中、大宛逆汗血馬六匹、一曰紅叱撥云云とある。【六】王昭君　漢の元帝の宮女。後匈奴の單于に嫁す。馬上に琵琶を彈ず。

喜劉蘇州恩賜金紫。遙想賀宴。以詩慶之

劉蘇州が金紫を恩賜せられしを喜び、遙に賀宴を想ひ、詩を以て之を慶す

海內姑蘇太守賢。　海內にて姑蘇の太守賢なり、
恩加章綬豈徒然。　章綬を恩加せらるる豈徒然ならんや。
賀賓喜色欺杯酒。　賀賓の喜色は杯酒を欺り、

【字解】【一】姑蘇太守　蘇州刺史といふに同じ。【二】章綬　金印紫綬。徒然は偶然に同じ。【三】欺　あなどる。【四】魚璫　魚袋なり。

醉妓歡聲遏管絃。
魚珮葺鱗光照地。
鶴銜瑞帶勢冲天。
莫嫌鬢上些些白。
金紫由來稱長年。

醉妓の歡聲は管絃を遏む。
魚珮葺鱗光地を照し、
鶴銜瑞帶　勢天に冲す。
嫌ふ莫れ鬢上些些の白きを、
金紫由來長年に稱ふ。

【題義】 蘄州刺史劉禹錫が金印紫綬を賜はつたことを喜び、遙に其賀宴の樣を想像し、詩を作つて祝意を述べたのである。

【詩意】 蘄州刺史劉禹錫は天下の賢才であるから、金紫を賜はつたのも當然である。今頃は祝賀の客が喜んで頻に杯の數をかさね、醉妓の歡聲に管絃の音も消されるほどであらう。君の佩びてゐる魚袋の光が地を照し、鶴は瑞帶を銜んで天に飛翔するやうであらう。鬢の毛が少し白くなつたことなどは敢て意に介するに足らない。由來金紫を賜はるのは大抵老人ときまつてゐるから。

宋史輿服志に、魚袋之制始於唐、蓋以爲符契也、其始曰魚符、左二右一、左者進內、右者隨身、凡三品以上官姓名、出入合之、因盛以袋、故曰魚袋、宋因其制、以金銀飾爲魚形、公服則繫於帶、垂於後、以明貴賤、非復如唐之符契矣とある。

葺鱗は集れる鱗。【四】 鶴銜　唐書車服志に、袍襖之制、三品以上服紫、以鶴銜瑞草、雁銜綬帶とある。冲天は天に飛翔すること。【六】 長年　老年なり。

藍田劉明府攜酌相過。與皇甫郎中卯時同飲。醉後贈之

藍田の劉明府酌を攜へて相過る。皇甫郎中と卯時に同じく飲み、醉後之に贈る

臘月九日煖寒客。
卯時十分空腹杯。
玄晏舞狂烏帽落。
藍田醉倒玉山頹。
貌偸花色老暫去。
歌蹋柳枝春閤來。
不爲劉家賢聖物。
愁翁笑口大難開。

臘月九日煖寒の客、
卯時十分なり空腹の杯。
玄晏舞狂して烏帽落ち、
藍田醉倒して玉山頹る。
貌は花色を偸みて老暫く去り、
歌は柳枝を蹋みて春閤に來る。
劉家賢聖の物の爲ならざれば、
愁翁の笑口大に開き難し。

世說容止篇に、山公曰、嵇叔夜之爲人也、巖巖若孤松之獨立、其醉也傀俄若玉山之將崩とある。【五】 柳枝　隋曲の名。張祜の詩に、莫折宮中楊柳枝、當時曾向笛中吹とある。【六】 賢聖物　淸酒を聖人といひ、濁酒を賢人といふ。【七】 愁翁　樂天自ら謂ふ。

【字解】 【一】 明府　縣令の稱。皇甫郎中は皇甫湜である。前に見ゆ。卯時は朝の六時なり。【二】 臘月　十二月。煖寒は開元天寶遺事に、王元寶每歲冬月大雪、令僕夫自本家具酒炙、宴樂之爲煖寒之會とある。【三】 玄晏　晉書皇甫謐傳に、謐有高尙之志、以著述爲務、自號玄晏先生とある。ここは皇甫湜に代用す。烏帽は黑い帽子。【四】 玉山頹　藍田山に玉を生ず。故に玉山ともいふ。玉山頹は醉倒するなり。

【題義】 藍田縣令劉氏が酒を攜へて來訪したので、皇甫湜と三人で朝酒をきこしめし、醉後に此詩を贈つたといふのである。

【詩意】 十二月九日に接待酒を攜へて劉明府が來たので、三人で空腹へ朝酒をきこしめしたので、醉

が十分に回つた。皇甫郎中は狂舞して帽子を落し、劉明府は醉ひつぶれてしまつた。皆花のやうな顔色になつて暫く老衰を忘れ、柳枝の曲を謳歌すれば春が來たやうである。劉氏が酒を持つて來てくれなければ、こんなに愉快に笑ふことは出來なかつたであらう。

劉蘇州以華亭一鶴遠寄。以詩謝之

劉蘇州華亭の一鶴を以て遠く寄す。詩を以て之を謝す

老鶴風姿異。衰翁詩思深。
老鶴風姿異なり、衰翁詩思深し。

素毛如我鬢。丹頂似君心。
素毛は我が鬢の如く、丹頂は君の心に似たり。

松際雪相映。雞羣塵不侵。
松際雪相映じ、雞羣塵侵さず。

殷勤遠來意。一隻重千金。
殷勤なり遠來の意、一隻重さ千金。

【字解】〔一〕素毛　白い毛。〔二〕松際　松のそば。〔三〕殷勤　れんごろなる意。〔四〕一隻　一羽。

【題義】蘇州刺史劉禹錫が華亭（江蘇省松江縣の西の地名で、鶴の名所である）の鶴を一羽送つてくれたので、此詩を寄せて謝意を表したのである。

【詩意】老鶴の姿が何處となく高尚なので、之を見て我も坐に詩思を深うした。毛の白いことは我が鬢の如く、頂の赤いことは君の誠心のやうである。松の側に居れば雪かと怪まれ、雞羣にまじつても少しも俗氣に染まない。君が遠く此を送つてくれた親切は、實に一羽千金とも謂ふべきである。

早春憶蘇州寄夢得

早春蘇州を憶ひて夢得に寄す

吳苑四時風景好。
吳苑は四時風景好し、

就中偏好是春天。
就中偏へに好きは是れ春天。

霞光曙後殷於火。
霞光は曙けて後火よりも殷く、

水色晴來嫩似煙。
水色は晴れ來りて煙よりも嫩かなり。

士女笙歌宜月下。
士女の笙歌は月下に宜しく、

使君金紫稱花前。
使君の金紫は花前に稱ふ。

誠知歡樂堪留戀。
誠に知る歡樂留戀に堪ふるも、

其奈離鄉已四年。
鄉を離れて已に四年なるを其奈せん。

【字解】〔一〕吳苑　即ち蘇州。〔二〕使君　刺史をいふ。金紫は金印紫綬。

【題義】早春の時節に蘇州を憶ひ、蘇州刺史たる劉禹錫（字は夢得）に寄せた詩である。

【詩意】蘇州は春夏秋冬いつでも景色が好いが、最も好いのは春である。夜の明けた後の霞の色は火よりも赤く、晴れてからの山の色は煙よりも嫩かである。月下に士女の笙歌を聞くにもよく、刺史た

る君が佩びてゐる金印紫綬は花とよく調和するであらう。歡樂の留戀するに足るものは多いが、君も既に鄉を離れて四年になるのだから、鄉愁の起るを禁じ得ないであらう。

嘗新酒憶晦叔二首

新酒を嘗めて晦叔を憶ふ　二首

樽裏看無色、杯中動有光。　樽裏看るに色無く、杯中動いて光有り。
自君拋我去、此物共誰嘗。　君が我を拋ちて去りしより、此物誰と共にか嘗めん。

【字解】〔一〕拋我去　我を棄て去る。〔二〕此物　酒を指して言ふ。

【題義】新酒を飲んで崔玄亮（字は晦叔。前に送二考功崔郎中赴闕一と題する詩あり）を憶うた詩である。

【詩意】樽の中の色を看れば無色透明で、杯にさして見ると動いて光がある。君が我を棄てて長安に去つてからは、誰も此酒を共に酌む相手がないのは、誠に遺憾である。

〔二〕

世上強欺弱、人間醉勝醒。　世上強は弱を欺り、人間醉は醒に勝る。
自君拋我去、此語更誰聽。　君が我を拋ちて去りてより、此語更に誰か聽かん。

【字解】〔一〕欺　侮る。〔二〕人間　世間。世上に同じ。

【詩意】この世間では強は弱を侮り醉は醒に勝るものである。これが俺の人世觀であるが、君がゐなくなつてからは、誰も俺の說を謹聽してくれる者がない。

負春

春に負く

病來道士教調氣、　病み來りて道士調氣を教へ、
老去山僧勸坐禪。　老い去つて山僧坐禪を勸む。
孤負春風楊柳曲、　春風楊柳の曲に孤負し、
去年斷酒到今年。　去年より酒を斷ちて今年に到る。

【題義】春に負いて淋しく暮してゐる樣を述べた詩である。

【詩意】病氣になつてから道士が攝生法を敎へてくれ、老衰したので山僧が頻に坐禪を勸める。春に負いて楊柳枝の曲をも奏せず、去年からは酒さへ斷つてゐる。

【字解】〔一〕調氣　攝生といふが如し。〔二〕孤負　そむく。楊柳曲は楊柳枝なり。樂曲の名。張祜の詩に、莫レ折宮中楊柳枝、當時曾向笛中一吹とある。

池上閒吟二首

池上閒吟　二首

高臥閒行自在身。　高臥閒行自在の身、
池邊六見柳條新。　池邊六たび見る柳條の新なるを。

【字解】〔一〕柳條　柳の枝。〔二〕羲皇尚上人　太古の伏羲氏時代よりも以前の人。晉書隱逸傳に、

幸逢堯舜無爲日。　幸に堯舜無爲の日に逢ひ、
得作羲皇向上人。　羲皇向上の人と作るを得たり。
四皓再除猶且健。　四皓再び除せられて猶ほ且健に、
三川罷守未全貧。　三川守を罷めて未だ全く貧しからず。
莫愁客到無供給。　愁ふる莫れ客到りて供給無きを、
家醞香濃野菜春。　家醞香濃かなり野菜の春。

【題義】宅中の池邊で閑吟した詩である。

【詩意】自分は自由の身だから或は高臥したり、或は閑行したりして、既に池邊の柳の六回春に遇うたのを見た。幸に堯舜の如く無爲にして治まる昭代に生れたので、太古の人のやうに超俗的生活を送ることが出來る。再び太子賓客に任ぜられて然も健康であり、河南尹の職は罷めたが貧に苦むこともないから、客が來ても供給する物のない心配はない。手作りの酒も野菜もあるから。

陶潛雪甫、夏月虛閑、高臥北窓之下、清風颯至、自謂羲皇上人とある。【四】四皓　商山の四皓。漢の高祖の太子に從つて遊ぶ。因つて太子賓客の官に任ぜられたことをいふ。再除は再び任ぜられたこと。【五】三川　洛陽附近の稱。三川罷守とは河南尹を免ぜられたこと。【六】家醞　自家釀造の酒。

〔二〕

非莊非宅非蘭若。　莊に非ず宅に非ず蘭若に非ず、
竹樹池亭十畝餘。　竹樹池亭十畝餘。

【字解】【一】莊　別莊。蘭若は寺。【二】道　道士。【三】烏帽　黑い帽子。【四】信意　心に任かせる。莊子の齊物論に、莊子が夢に蝴蝶となりしこと見ゆ。【五】便是魚　莊子の秋水篇に、濠梁の上に遊びて魚の游樂するを觀たること見ゆ。【六】勝負　優劣といふが如し。

非道非僧非俗吏。　道に非ず僧に非ず俗吏に非ず、
褐裘烏帽閉門居。　褐裘烏帽門を閉ぢて居る。
夢遊信意寧殊蝶。　夢遊信意寧ぞ蝶に殊ならんや、
心樂身閒便是魚。　心樂み身閒なるは便ち是れ魚。
雖未定知生與死。　未だ生と死とを定知せずと雖も、
其間勝負兩何如。　其間の勝負兩ながら何如。

【詩意】別莊ともつかず住宅ともつかず寺院ともつかず、十餘畝の地に竹樹と池亭とがある。そこに自分は道士でもなく僧侶でもなく俗吏でもなく、褐裘を著烏帽を戴いて閉居してゐる。呑氣なことは夢に化して飛遊する蝴蝶の如く、心の樂は水中の魚の如くである。まるで生きながら死んでゐるやうな生活であるが、一體生と死とは、どちらがよいものであらう。

早春招張賓客

久雨初晴天氣新。　久雨初めて晴れて天氣新なり、
風煙草樹盡欣欣。　風煙草樹盡く欣欣。

【字解】【一】冷落　おちぶれる。褒褒は褒廣なり。【二】陽和　陽春といふが如し。【三】商山老伴　商

雖當冷落衰殘日。　冷落衰殘の日に當れりと雖も、
還有陽和暖活身。　還た陽和暖活の身有り。
池色溶溶藍染水。　池色溶溶として藍水を染め、
花光焰焰火燒春。　花光焰焰として火春を燒く。
商山老伴相收拾。　商山の老伴相收拾せん、
不用隨他年少人。　他の年少の人に隨ふを用ひず。

【題義】早春の時節に太子賓客（官名）張氏を招く詩である。

【詩意】久雨も晴れて天氣がよくなり、風煙草樹すべて欣欣としてゐる。自分は老衰敗殘の身であるが、さすが陽春に遇つて生氣を回復した。池の水は溶溶として藍のやうに青く、花の色は火の燃えるやうである。太子賓客連中で、相伴つて春色を賞しようではないか。年少者の仲間入りなどはせぬがよい。

山の老人なかま。太子賓客たる人人をいふ。收拾とは、つれだつて遊ぶこと。

營閒事

自笑營閒事。從朝到日斜。　自ら笑ふ閒事を營み、朝より日斜なるに到るを。
澆畦引泉脈。掃徑避蘭芽。　畦に澆ぎて泉脈を引き、逕を掃ひて蘭芽を避く。

閒事を營む

暖變墻衣色。晴催木筆花。　暖かにして墻衣の色を變じ、晴れて木筆の花を催す。
桃根知酒渴。晚送一甌茶。　桃根酒渴を知り、晚に送る一甌の茶。

【字解】〔一〕澆畦　畠に水をかける。〔二〕墻衣　牆上の青苔。〔三〕木筆　木の名。こぶし。辛夷。〔四〕桃根　晉の王獻之の愛妾。古今樂錄に、晉王獻之愛妾桃葉、其妹曰桃根とある。〔五〕一甌　一瓶。

【題義】つまらぬ暇つぶしの仕事をして日を送つてゐる樣を述べた詩である。

【詩意】朝から晚まで、つまらぬ事をしてゐるのは、自分ながら可笑しい程だ。泉の流を引いて畠に水を灌ぎ、蘭の新芽を避けて逕を掃除などしてゐる。段段暖かになつて牆の青苔が色を增し、晴れては辛夷の花が咲き始める。妾は酒後の渴を知つて夕に一瓶の茶をくれた。

感春

老思不禁春。風光照眼新。　春に感ず
花房紅鳥觜。池浪碧魚鱗。　老思春に禁へず、風光眼を照して新なり。
倚棹誰爲伴。持杯自問身。　花房は鳥觜よりも紅に、池浪は魚鱗よりも碧なり。
心情多少在。六十二三人。　棹に倚りて誰か伴を爲す、杯を持して自ら身に問ふ。
心情多少在りや、六十二三の人。

【字解】〔一〕花房　花の集團。〔二〕多少　いくらか。〔三〕六十二三人　樂天時に年六十三。

【題義】春の感懐を述べた詩である。

【詩意】春になつて風光の一新するを見て、老思の自ら禁ずる能はざるものがある。花は鳥の背よりも紅に、池の水は魚の鱗よりも碧である。誰も相手になる者もないので、獨り池に舟を泛べ杯を持つて「六十二三の老人になつても、まだ春らしい感じがいくらかするか」と自ら問うて見た。

春池上戯贈李郎中

滿池春水何人愛。　滿池の春水何人か愛する、
唯我廻看指似君。　唯我廻看し指して君に似す。
直似挼藍新汁色。　直藍を挼む新汁の色に似て、
與君南宅染羅裙。　君が南宅の與に羅裙を染めん。

【題義】春、池の邊で戯れに李郎中に贈つた詩である。

【詩意】池に滿ちてゐる春水を誰が愛好するであらう。我ひとり飽かず眺めて李郎中に指し示し、「池の水はまるで藍を挼んだ汁のやうである。これで君の愛妾の羅裙を染めたいやうだ」と言つた。

【字解】〔一〕南宅　ここに李郎中の愛妾が居るのであらう。羅裙は薄絹の衣裳。

翫半開花贈皇甫郎中　八年寒食日。池東小樓上作。

半開の花を翫び、皇甫郎中に贈る　八年寒食の日、池東小樓上の作

勿訝春來晚。無嫌花發遲。
訝る勿れ春の來ること晩きを、嫌ふ無れ花の發くこと遲きを。
人憐全盛日。我愛半開時。
人は全盛の日を憐み、我は半開の時を愛す。
紫蠟粘爲蔕。紅蘇點作蕤。
紫蠟粘して蔕と爲り、紅蘇點じて蕤と作る。
成都新夾纈。梁漢碎臙脂。
成都夾纈を新にし、梁漢臙脂を碎く。
樹杪眞珠顆。墻頭小女兒。
樹杪眞珠の顆、墻頭の小女兒。
淺深粧駁落。高下火參差。
淺深粧駁落、高下火參差。
蝶戯爭香朶。鶯啼選穩枝。
蝶戯れて香朶を爭ひ、鶯啼いて穩枝を選ぶ。
好教郎作伴。合共酒相隨。
好し郎をして伴と作らしむるに、合に酒と共に相隨ふべし。
醉翫無勝此。狂嘲更讓誰。
醉翫此に勝る無し、狂嘲更に誰にか讓らん。
猶殘少年興。不似老人詩。
猶ほ殘る少年の興、老人の詩に似ず。
西日憑輕照。東風莫殺吹。
西日輕く照すを憑む、東風殺らし吹くこと莫れ。
明朝應爛熳。後夜更離披。
明朝應に爛熳たるべし、後夜更に離披せん。
林下遙相憶。樽前閤有期。
林下遙に相憶ふ、樽前閤に期有り。
銜杯嚼蘂思。唯我與君知。
杯を銜み蘂を嚼みて思ふ、唯我と君と知るのみ。

【字解】〔一〕憐　愛する。〔二〕紅蘇　紅のふさ。蘇は草木華垂の貌。〔三〕成都　蜀の地名。織物の産地なり。〔四〕燭はしぼりぞめ。〔五〕臙脂　べに。〔六〕樹杪　梢。〔七〕眞珠顆は眞珠の粒。〔八〕參差　一樣ならざる貌。〔九〕皇甫郎中を指す。伴は遊び伸間。〔十〕爛漫　咲き亂れる貌。〔十一〕離披　花の十分に開き盡すこと。

【題義】半開の花を賞翫して皇甫湜に贈つた詩で、太和八年寒食の日に、池東の小樓の上で作つた。

【詩意】春の來るのが晩く花の咲くのが遅いのを嫌ふには及ばない。俗人は滿開を好むけれども、僕は却つて半開の時を好む。蕾は紫の蠟を著けたやうで、點點たる花は紅の蘇を垂れたやうである。夾纈のやうでもあり臙脂を碎いたやうでもある。梢の花は眞珠の粒の如く、牆頭の花は少女の如く、薄く濃く色樣樣の粧を凝らして、或は高く或は低く、火の燃えるやうな色合である。蝶は香しき枝を爭ひ、鶯は穩かな枝を選び、或は舞ひ或は歌つてゐる。この好氣節に當り君と相攜へて花を賞し共に酒を酌みたいものだ。醉翫狂嘲するには君に勝る相手はない。老いたりと雖もまだ若若しい感興も殘つて居り、その詩も老人じみてゐない。西日の輕く花を照し、春風の吹き散らさない間が命である。明朝となれば爛熳と咲き亂れ、明晩となれば更に開き切つて見所がなくなるであらう。僕は林下に在りて樽前君と賞花の會をなさうと獨り自ら期してゐる。杯を銜み藥を嚼んで思ふ。此情を知る者は唯我と君とのみであると。

池邊

池邊

柳老香絲宛。荷新鈿扇圓。
殘春深樹裏。斜日小樓前。
醉遣收杯杓。閒聽理管絃。
池邊更無事。看補採蓮船。

【字解】〔一〕香絲　柳の枝。宛はからみつくこと。〔二〕荷　蓮の葉。鈿扇は螺鈿のうちは。

【題義】池邊の卽景を敍した詩である。

【詩意】柳の枝が長く伸びてからみつき、蓮の葉が新に生えて螺鈿の團扇のやうである。時恰も晩春で樹樹の綠が濃かになり、小樓の前には夕日がまともに當つてゐる。醉つて杯杓を片附けさせ、靜に管絃を奏するを聽き、爲す事もなく唯蓮採り船を修繕してゐるのを眺めた。

家醞新熟。每嘗輒醉。妻姪等勸令少飲。因成長句以諭之

家醞新に熟し、嘗むる毎に輒ち醉ふ、妻姪等勸めて少しく飲ましむ。因つて長句を成し以て之を諭す

君應怪我朝朝飲。　君應に我が朝朝飲むを怪むなるべし、
不說向君君不知。　說いて君に向はざれば君知らず。

【字解】〔一〕家醞　自家醞造の酒。〔二〕君　妻姪を指す。〔三〕甕頭　酒瓶のほとり。罈背は開いて

身上幸無疼痛處。　身上に幸に疼痛の處無し、
甕頭正是撇嘗時。　甕頭に正に是れ撇嘗する時。
劉妻勸諫夫休醉。　劉が妻勸め諫めて夫醉ふことを休め、
王姪分疏叔不癡。　王が姪分疏して叔癡ならず。
六十三翁頭雪白。　六十三翁頭雪のごとく白し、
假如醒黠欲何爲。　假如醒黠するも何を爲さんと欲する。

飲む。【四】劉妻　晉の劉伶、尤も酒を嗜む。常に鹿車に乘り、一壺の酒を攜へ、人をして鍤を荷ひて之に隨はしめ、謂つて曰く、死せば即ち我を埋めよと。伶の妻、伶の飲酒甚だ過ぐるを諫む。伶曰く、當に神に誓つて斷たんと。【五】王姪　晉の王湛の姪。晉書王湛傳に、湛初有隱德、皆以爲癡、兄子濟歷之、嘗詣

漢、湛談易、玄理微妙、濟因歎其籌、而湛武見濟曰、卿家癡叔死未、濟曰、臣叔殊不癡とある。分疏は辯解するなり。【六】六十三翁　樂天時に年六十三。【七】醒黠　醒慧なり。

【題義】家釀の酒が出來たので、飲んでは醉うてゐるのを見て、妻や姪が飲み過ぎないやうにと勸告したので、此詩を作つて諭したのである。

【詩意】お前等は俺が毎朝酒を飲むのを怪むであらう。その譯を言つて聞かせないから知らないのも嘗然であるが、甕を開いて飲んでさへ居れば、幸に息災で體に故障がなくなるのだ。昔劉伶の妻が夫を諫めて酒を止めさせ、王湛の姪が叔父の癡愚ならぬ由を辯解した例もないではないが、まア考へても見ろ、この老翁がたとひ醒慧であつた所が何が出來るものか。それよりは飲んで遙者でゐる方がよいではないか。

送常秀才下第東歸

常秀才の下第して東に歸るを送る

東歸多旅恨。　東歸旅恨多し、
西上少知音。　西上知音少なり。
寒食看花眼。　寒食看花の眼、
春風落第心。　春風落第の心。
百憂當二月。　百憂二月に當り、
一醉直千金。　一醉千金に直る。
到處公卿席。　到る處公卿の席、
無辭酒盞深。　酒盞の深きを辭する無れ。

【字解】【一】旅恨　旅愁といふが如し。【二】西上　西の長安に往きて試驗を受けたこと。知音は知己、即ち己の才能を認めてくれる人。【三】寒食　冬至から百五日をいふ。【四】酒盞　酒杯。

【題義】常秀才（常は姓。秀才は文官試驗の科目の名）の落第して東に歸るのを送る詩である。

【詩意】西の都に上つて試驗を受けたが、不幸にして落第の憂目に遇ひ、すごすごと東の故郷に歸るのであるから、定めて旅愁の多いことであらう。寒食の時節に花を看、却つて春風に臨んで悲觀するであらう。花の二月に心に百憂を抱いてゐるのだから、其心を慰める爲の酒は、千金に値するであらう。行くささきで公卿の席に列したら、辭退せずに飲んで心を慰めるがよい。

且遊

且遊べ

手裏一杯滿。　手裏一杯滿つ、
心中百事休。　心中百事休す。

春應唯仰醉。老更不禁愁。
弄水廻船尾。尋花信馬頭。
眼看筋力減。遊得且須遊。

【字解】〔一〕手裏　手の中。

【題義】須らく遊賞して春愁を除くべきことを述べた詩である。

【詩意】心中に抱いてゐた計畫はすべておぢやんになつた。せめて手に杯を持つて滿を引くとしよう。老いては愁に堪へないから、醉を借りて一掃するに如くはない。水を弄して舟遊をするもよく、馬に信せて花を尋ねるもよい。歳月人を待たずで刻刻に體力は衰へるのだから、出來る時に遊んでおくがよいのだ。

題王家莊臨水柳亭

王家の莊、水に臨める柳亭に題す

弱柳緣堤種。虛亭壓水開。
條疑逐風去。波欲上階來。
翠羽偸魚入。紅腰學舞廻。
春愁正無緒。爭不盡殘杯。

弱柳堤に緣りて種ゑ、虛亭水を壓して開く。
條は風を逐ひて去るかと疑ひ、波は階に上りて來らんと欲す。
翠羽魚を偸んで入り、紅腰舞を學んで廻る。
春愁正に緒無し、爭でか殘杯を盡さざらん。

【題義】王氏の別莊、卽ち池に臨める柳亭に題した詩である。

【詩意】柳が堤に沿うて植ゑられ、虛亭が水に臨んで建てられてゐる。柳の條は風を逐うて飛び去るかと思はれ、緣の波は階上に上つて來るかと思はれる。翡翠鳥は魚を捕へて飛び込み、亭上には美人が舞の稽古をしてゐる。ここに遊べる余は春愁がむらむらと起つて絶えないから、杯の數を重ねて自ら慰めた。

題令狐家木蘭花

令狐家の木蘭花に題す

膩如玉指塗朱粉。
光似金刀剪紫霞。
從此時時春夢裏。
應添一樹女郎花。

膩は玉指の朱粉を塗るが如く、
光は金刀の紫霞を剪るに似たり。
此より時時春夢の裏、
應に一樹の女郎花を添ふべし。

自註に唐人謂二辛夷一爲二女郎花一とある。

【字解】〔一〕翡翠　玉鬪とも、辛夷ともいふ。樹の大なるものは高さ五六丈。花は蓮花の如く紅黃白數色あり。四月始めて開く。〔二〕膩　滑澤なり。〔三〕女郎花　辛夷の別名。陸游の詩に閒看女郎花とあり、

【題義】令狐氏（令狐楚であらう。前に見ゆ）の木蘭の花に題した詩である。

【詩意】其花の滑澤なことは玉指に朱粉を塗つたやうで、其光は紫の霞を剪つたやうである。今日

から後は春の夜の夢に、一樹の女郎花を加へるであらう。

拜表廻閒遊

表を拜し廻りて閒遊す

玉珮金章紫花綬。
紵衫藤帶白綸巾。
晨興拜表稱朝士。
晚出遊山作野人。
達磨傳心令息念。
玄元留語遣同塵。
八關淨戒齋銷日。
一曲狂歌醉送春。
酒肆法堂方丈室。
其間豈是兩般身。

玉珮金章　紫花の綬、
紵衫藤帶白綸の巾。
晨に興きて表を拜して朝士と稱し、
晚に出で山に遊びて野人と作る。
達磨は心を傳へて念を息めしめ、
玄元は語を留めて塵に同せしむ。
八關の淨戒齋して日を銷し、
一曲の狂歌醉ひて春を送る。
酒肆法堂方丈の室、
其間豈是れ兩般の身ならんや。

【字解】〔一〕拜表　天子に上書すること。〔二〕玉珮　腰に佩ぶる玉。金章は黃金の官印。紫花綬は紫の印綬。〔三〕紵衫　紵は麻の類。紵で織つた上衣。白綸巾は白い綸子の帽子。〔四〕達磨　佛僧の名。嵩山の少林寺に居り、面壁九年にして化す。禪宗の第一祖。〔五〕玄元　唐は老子を奉じて始祖となし、尊んで玄元皇帝といふ。同ノ塵は老子道德經に、和二其光一、同二其塵一、とあゝ。〔六〕八關　佛を奉ずる者の持する所の齋。法苑珠林に、八關是關二閉八惡一、不レ起二諸過一、不二非時食一者是齋とある。〔七〕酒肆　酒店。法堂は

講法する講堂。方丈は坐禪する室。〔八〕兩般　兩樣。別樣なり。

【題義】上書して自宅に歸り更に閒遊したことを述べた詩である。

【詩意】玉珮や金印紫綬を帶び、夙に起きて上書し擧り、紵衫藤帶を著て白綸の帽を戴き、夕に野人として閒遊する。達磨は俗念を止めよと敎へ、老子は俗と伍せよと敎へてゐる。因つて余は或は八關齋を守つて日を送り、或は醉歌して春を過してゐる。酒店にゐる時の我も方丈にゐる時の我も同一の樂天居士である。

西街渠中種蓮疊石。頗有幽致。偶題小樓

西街の渠中に蓮を種ゑ石を疊み、頗る幽致あり、偶〻小樓に題す

朱檻低墻上。清流小閣前。
雇人栽菡萏。買石造潺湲。
影落江心月。聲移谷口泉。
閒看卷簾坐。醉聽掩牕眠。
路笑淘官水。家愁費料錢。
是非君勿問。一對一翛然。

朱檻低墻の上、清流小閣の前。
人を雇ひて菡萏を栽ゑ、石を買ひて潺湲を造る。
影は落つ江心の月、聲は移る谷口の泉。
閒に看て簾を卷きて坐し、醉ひて聽き牕を掩ひて眠る。
路は笑ふ官水を淘するを、家は愁ふ料錢を費すを。
是非君問ふこと勿れ、一たび對すれば一に翛然。

【字解】〔一〕朱檻　朱塗の欄干。〔二〕菡萏　蓮花。〔三〕潺湲　流水の鶏。〔四〕淘　流す。〔五〕翛然　疾き鶏。

【題義】西街の渠の中に蓮を植ゑ石を疊んだ所が、大に雅致を添へた。因つて小樓に題した詩である。

【詩意】朱塗の欄干、低い土屏の先の、清流に臨んだ小樓の前に、人を雇つて蓮を植ゑさせ、石を疊んで小流を造つた。月は江心の影を沈め、水は山谷の泉聲を移し、簾を捲いて看ることも出來れば、隱を掩うて聽くことも出來る。路行く人は官水を流すのを笑ひ、家人は無益な金錢を費すことを愁へるが、姑く是非得失を論ずるを休めよ。此流に對すれば吾が心がさつぱりとする。

晩春閒居。楊工部寄詩。楊常州寄茶。同到。因以長句答之

晩春閒居せしとき楊工部は詩を寄せ、楊常州は茶を寄せ、同じく到る。因つて長句を以て之に答ふ

宿醒寂寞眠初起。
春意闌珊日又斜。
勸我加餐因早笋。
恨人休醉是殘花。
悶吟工部新來句。
渴飲毗陵遠到茶。

【字解】〔一〕宿醒　ふつかよひ。宿酔。〔二〕闌珊　衰落といふが如し。後集卷七、詠懷に、詩情頹意漸闌珊とある。〔三〕早笋　はしりの筍。〔四〕毗陵　卽ち常州。〔五〕兄弟　楊工部と楊常州。

兄弟東西官職冷。
門前車馬向誰家。

【題義】晩春閒居してゐる時、楊工部（名は汝士、字は慕巢、虞卿の從兄である。太和中、中書舍人となり、後工部侍郎に改められ、八年出されて同州刺史となる）が詩を寄せ、楊常州（前の送楊八給事赴常州を見よ）が茶を寄せ、皆樂天の手許に屆いた。因つて此詩を作つて答へたのである。

【詩意】宿酔の爲に寢込んでゐたが、起き上つて見ると春も大分老けて日も西に傾いてゐる。折しも「筍の時節になつたが老人の癖に食ひ過ぎぬやうに用心しろ」とか、「もう春も過ぎたのだから酒をひかへて體を大事にしろ」とかいふ勸告の詩が舞ひ込んだ。因つて新來の共詩を閑吟し、常州から遠來の茶を飲んだ。君等兄弟は東西に離れて官職も振はず、晩春の今日車馬を驅つて誰を尋ねるであらう。あまり羽振のよい友達もあるまい。

玉泉寺南三里。澗下多深紅躑躅。繁艶殊常。感惜題詩。以示遊者

玉泉寺の南三里、澗下に深紅の躑躅多し。繁艶常に殊なり。感惜して詩を題し、以て遊ぶ者に示す

玉泉南澗花奇怪。

不似花叢似火堆。
今日多情唯我到。
毎年無故爲誰開。
寧辭辛苦行三里。
更與留連飲兩杯。
猶有一般孤負事。
不將歌舞管絃來。

花叢に似ずして火堆に似たり。
今日多情唯我到る、
毎年無故に誰が爲にか開く。
寧ろ辭せんや辛苦して三里を行くを、
更に與に留連して兩杯を飲まん。
猶ほ一般孤負の事有り、
歌舞管絃を將て來らず。

【題義】玉泉寺の南三里ばかりの澗の下に深紅色の躑躅があつて、それが非常に美しい。觀る人もない偏僻な處に在るのを惜しく思ひ、詩を題して倶に遊んだ人に示したのである。

【詩意】玉泉寺の南澗の花は非常に美しく、花の叢といふよりは寧ろ火の塊といひたい位だ。折角咲いても看る人もなく、之を愛好するのは我等のみである。然るに花は誰に見せようとてか毎年恙なく開いてゐる。此花を看る爲には三里ぐらゐ行くのは少しも厭はない。更に君と倶に留連して酒でも飲まう。ただ一つ遺憾な事は歌舞管絃の用意をして來なかつた事だ。

【字解】〔一〕一般　一個といふが如し。孤負は、そむく意。

早服雲母散

曉服雲英漱井華。
寥然身若在煙霞。
藥銷日晏三匙飯。
酒渴春深一碗茶。
毎夜坐禪觀水月。
有時行醉翫風花。
淨名事理人難解。
身不出家心出家。

早に雲母散を服す

曉に雲英を服して井華に漱ぐ、
寥然として身は煙霞に在るが若し。
藥銷し日は晏けぬ三匙の飯、
酒渴し春深し一碗の茶。
毎夜坐禪して水月を觀、
時有りて行醉して風花を翫ぶ。
淨名の事理人解し難し、
身は出家せずして心は出家す。

【字解】〔一〕雲英　雲母の別名。〔二〕淨名　菩薩の名。

【題義】朝雲母散（仙藥の名）を飲んだ詩である。

【詩意】朝雲母散を飲んで井水に漱げば、身心寥然として煙霞の中に棲んだやうになる。やがて藥もこなれ日も高く升つた頃に三匙ほど飯を食ひ、酒後に渴を覺えた時には一椀の茶を啜る。毎夜坐禪して水中の月を觀、時としては行醉して風裏の花を賞する。人は菩薩の事理を解せぬであらうが、身は出家しないで心だけ出家する。これが菩薩だ。

三月晦日晩聞鳥聲

晩來林鳥語殷勤。
似惜風光說向人。
遣脱破袍勞報暖。
催沽美酒敢辭貧。
聲聲勸醉應須醉。
一歳唯殘半日春。

【題義】三月三十日、夕に鳥の聲を聞いて作つた詩である。

【詩意】夕方林の中で鳥が殷勤に鳴いてゐる。恰も春の去るのを惜んで人に訴へるもののやうである。暖を報じて人をして破袍を脱がしめ、貧を厭はず美酒を買ふことを催促してゐる。折角醉ふことを勸めるのだから、宜しく美酒に醉ふがよい。今年の春は餘す所僅に半日だから。

【字解】〔一〕殷勤　ねんごろな様。

晩來林鳥語殷勤、風光を惜み說いて人に向ふに似たり。
破袍を脱せしめて勞しく暖を報じ、
美酒を沽ふことを催して敢て貧を辭せんや。
聲聲醉を勸む應に須らく醉ふべし、
一歳唯殘る半日の春。

早夏遊平原廻

夏早日初長。南風草木香。
肩輿頗平穩。澗路甚清涼。
紫蕨行看採。青梅旋摘嘗。
療飢兼解渴。一盞冷雲漿。

早夏平原に遊んで廻る
夏早日初めて長く、南風草木香し。
肩輿頗る平穩、澗路甚だ清涼。
紫蕨行くゆく看て採り、青梅旋や摘みて嘗む。
飢を療し兼ねて渴を解く、一盞の冷雲漿。

【題義】初夏に平原に遊んで歸つた時作つた詩である。

【詩意】夏になつて日が長くなり、南風が吹いて草木も香しい。肩輿も穩かで動搖せず、澗間の路がすがすがしい。行きながら蕨を採つたり、青梅をつまんで食つたりした。家に歸つてから一杯の五雲漿を飲んで飢と渴とを醫した。

【字解】〔一〕夏早　早夏なり。〔二〕肩輿　人の舁く駕籠。〔三〕一盞　一杯。冷雲漿は五雲漿なり。東信の温湯碑に、其色變者通爲五雲之漿、其味美者結爲三危之露とある。

宿天竺寺廻

野寺經三宿。都城復一還。
家仍念婚嫁。身尚繫官班。
瀟洒秋臨水。沈吟晩下山。

天竺寺に宿して廻る
野寺三宿を經、都城復た一たび還る。
家は仍ほ婚嫁を念ひ、身は尚ほ官班に繫る。
瀟洒として秋水に臨み、沈吟して晩に山を下る。

長閒猶未得。逐日且偸閒。　長閒猶ほ未だ得ず、日を逐うて且つ閒を偸まん。

【字解】〔一〕都城　城下。都會。〔二〕官班　官列といふが如し。

【題義】天竺寺（後集巻二、天竺寺七葉堂避暑を見よ）に宿つて家に歸り、此詩を作つた。

【詩意】山寺に三晩宿つて、また城下に歸つて來た。子女の婚嫁の事も氣にかかり、官職に繫がれてゐる身でもあるからである。秋水の瀟洒たるに臨み、夕に山を下つて沈吟するのは誠に愉快である。長い閒暇は得られないから、閒を偸んで折折また天竺寺に遊ばうと思ふ。

侍中晉公欲到東洛。先蒙書問。期宿龍門。思往感今。輒獻長句

侍中晉公東洛に到らんと欲し、先づ書問を蒙る。期して龍門に宿し、往を思ひ今を感じ、輒ち長句を獻ず

昔蒙興化池頭送。　昔は興化池頭の送を蒙り、

太和三年春。居易授賓客分司。東來。特蒙侍中於興化里池上宴送。

今許龍門潭上期。　今は龍門潭上の期を許さる。

聚散但愁長見念。　聚散但愁づ長く念はるるを、

榮枯安敢道相思。　榮枯安んぞ敢て相思ふことを道はん。

【字解】〔一〕興化　長安の里の名。〔二〕潭上　龍門山に九龍潭あり。〔三〕蔡州　裴度は憲宗の時中書侍郎を以て討つて淮蔡を平げ、晉國公に封ぜらる。

功成名遂來雖久。　功成り名遂げて來ること久しと雖も、

雲臥山遊去未遲。　雲に臥し山に遊びて去ること未だ遲からず。

聞說風情筋力在。　聞說らく風情筋力在り、

只如初破蔡州時。　只初めて蔡州を破りし時の如しと。

【題義】侍中晉公（裴度なり。後集巻三に見ゆ）が東都留守に任ぜられて洛陽に到らんとするに就いて、先づ手紙をよこした。樂天は因つて晉公と龍門山に期會し、昔や今を思うて此詩を獻じたのである。

【詩意】昔は興化里の池の頭で送別を辱うし、今は龍門山の潭の上で會合を許された。聚散ごとにいつも御親切に預るのは偏に感謝する所であるが、榮枯境遇を異にする身は敢て相思ふなどと申上げるのを憚る。公は功成り名遂げて以來久しいけれども、山中に遊宿するのもまだ遲いわけではない。聞けば元氣も體力も蔡州の賊を破つた時と少しも御變りにならないさうである。

奉和晉公侍中蒙除留守。行及洛師。感悅發中。斐然成詠

晉公侍中が留守に除せられ、行いて洛師に及び、感悅中より發し、斐然として詠を成すに和し奉る

鸞鳳翺翔在寥廓。
貂蟬瀟洒出埃塵。
致成堯舜昇平代。
收得夔龍強健身。
拋擲功名還史冊。
分張歡樂與交親。
商山老皓雖休去。
終是留侯門下人。

【題義】晉公侍中（前の詩を見よ）の「東都留守に任ぜられ行いて洛師（洛陽なり。書經の洛誥に見ゆ）に及び、悅心中より起り、斐然として詠を成した」といふ詩に和したのである。

【詩意】公は恰も鸞鳳の天上に飛翔するが如く、貂蟬の冠を戴いて宮中に奉仕し、天子を輔佐して太平を致し、大功を立てて且身が強健である。功名を擲つて史冊に任せ、歡樂を分ちて親友と與にする。太子賓客たりし我は已に罷めたとはいへ、やはり公の部下に屬する者である。

【字解】〔一〕斐然　文彩ある貌。論語に斐然成章とある。〔二〕鸞鳳　晉公斐度に喩ふ。寥廓　天上寛廣の處。史記に、下二靜嘿一而無レ地兮、上二寥廓一而無レ天とある。〔三〕貂蟬　侍中のかぶる冠。〔四〕昇平　太平なり。〔五〕夔龍　舜の賢臣。〔六〕交親　親友。〔七〕商山　老皓　商山の四皓。漢の太子に從つて遊ぶ。因つて太子賓客をいふ。樂天自ら謂ふなり。〔八〕留侯　張良なり。漢の高祖に仕へて功あり。留に封ぜらる。

送劉五司馬赴任陜州。兼寄崔使君

劉五司馬の任に陜州に赴くを送り、兼ねて崔使君に寄す

位下才高多怨天。
劉兄道勝獨恬然。
貧於揚子兩三倍。
老過榮公六七年。
筆硯莫拋留壓案。
簞瓢從陋也銷錢。
郡丞自合當優禮。
何況夷陵太守賢。

【題義】劉五（五は輩行）が陜州司馬となつて赴任するのを送り、兼ねて陜州刺史（使君は刺史の稱）に寄せた詩である。

【詩意】己の才能が優れてゐるのに不幸にして官位が低ければ、多くは天を怨み不平を鳴らすもので

【字解】〔一〕恬然　安んずる貌。〔二〕揚子　漢の揚雄。虞照郎の長安古意に、寂寂寥寥揚子居。時賓王の帝京篇に、揚雄仕レ漢乏二良媒一とある。〔三〕榮公　榮啓期なり。孔子泰山に遊び榮啓期に遇ふ。啓期時に年九十。列子天瑞篇に見ゆ。〔四〕從レ陋　陋巷に在ること。論語に、子曰、賢哉回也、一簞食一瓢飲、在二陋巷一、人不レ堪二其憂一、回也不レ改二其樂一とある。〔五〕郡丞　州の司馬。〔六〕夷陵太守　崔使君を指して言ふ。

あるが、劉兄（劉五）は道徳の高い人だから不平も何も言はない。貧は揚子にまさること二三倍、老は榮啓期に過ぐること六七歳であつて、常に筆硯に親み其稿積んで机案を壓し、なけなしの金を使ひ果して貧乏生活をしてゐる。併し郡丞の職は當然優待さるべき職で、特に其長官は賢者である。必ず君を優待するであらうから、喜んで赴任するがよい。

菩提寺上方晩眺

樓閣高低樹淺深。
山光水色暝沈沈。
嵩煙半卷青綃幕。
伊浪平鋪綠綺衾。
飛鳥滅時宜極目。
遠風來處好開襟。
誰知不離簪纓內。
長得逍遙自在心。

菩提寺の上方にて晩眺す

樓閣高低樹淺深、
山光水色暝くして沈沈。
嵩煙半卷く青綃の幕、
伊浪平かに鋪く綠綺の衾。
飛鳥滅する時宜しく目を極むべし、
遠風來る處好し襟を開くに。
誰か知らん簪纓の內を離れず、
長く逍遙自在の心を得んとは。

【字解】〔一〕上方　地勢最高の處をいふ。杜甫の詩に、上方重閣晚、百里見纖毫とある。〔二〕沈沈　深遠の貌。〔三〕嵩煙　嵩山の雲煙。〔四〕青綃　青い絹。〔五〕伊浪　伊水の波。綠綺　綠の絹。〔六〕簪纓　官職に喩ふ。

【題義】菩提寺（洛陽に在る）の高處から夕に四方を眺めた情景を敍した詩である。

【詩意】樓閣が或は高く或は低く竝び立ち、樹色が薄く濃く茂つてゐる。山や川は夕暮に包まれて明瞭しない。嵩山の雲煙は半青絹の幕を卷いたやうで、伊水の浪は平に綠の絹を敷いたやうである。遠く眸を放てば飛鳥の雲に沒する眺もよく、襟を開けば風が遠くから吹いて來て、誠に快い。まだ官職を帶びた身でありながら、こんなに逍遙自在の心を得られようとは、實に案外である。

楊柳枝詞八首

六么水調家家唱。
白雪梅花處處吹。
古歌舊曲君休聽。
聽取新翻楊柳枝。

楊柳枝の詞　八首

六么水調家家唱へ、
白雪梅花處處吹く。
古歌舊曲君聽くを休めよ、
聽取せよ新翻の楊柳枝。

【字解】〔一〕六么　曲の名。琵琶錄に、綠腰、卽錄要、本自樂工逝レ曲、上令レ錄出要一者、乃以爲レ名、後謂爲綠腰・六么一也とある。水調　曲の名。海錄碎事に、隋煬帝開汴河ハ、自造水調一とある。〔二〕白雪　琴曲の名。梅花は梅花落なり。笛曲の名。〔三〕新翻　新作の曲譜。

【題義】楊柳枝は樂曲の名。漢の鐃歌鼓吹曲。もと折楊柳といふ。隋の時に至り始めて宮詞となる。張祜の詩に、莫レ折宮中楊柳枝、當時曾向二笛中一吹とあるに由つて證することが出來る。併し樂天の此詩に、古歌舊曲君休レ聽、聽取新翻楊柳枝とあり、劉禹錫の詩に、請君莫レ奏前朝曲、聽レ唱新翻楊柳

枝とあれば、當時變じて洛下の新聲となつたもので、隋宮の舊譜でないことがわかる。その體七言四句より成る。

【詩意】六幺・水調・白雪・梅花などの曲はどこでも吹奏してゐるから珍らしくない。そんな古歌舊曲は聽くに足らないから、吾が新曲を聽き給へ。

〔一〕

陶令門前四五樹、
亞夫營裏百千條。
何似東都正二月、
黃金枝映洛陽橋。

〔二〕

陶令門前の四五樹、
亞夫營裏の百千條。
何ぞ似かん東都正に二月、
黃金の枝は映ず洛陽橋。

【詩意】陶淵明が門前の四五本の柳も、漢の將軍周亞夫が陣屋の百千の枝も、東都の二月、黃金色の枝が洛陽橋に映ずる美しさには及ぶまい。

【字解】〔一〕陶令　彭澤縣令陶淵明。その宅邊に五柳樹あり。故に自ら五柳先生と號す。〔二〕亞夫　漢の將なり。文帝の時匈奴入寇す。周亞夫軍を細柳に屯す。〔三〕東都　洛陽をいふ。〔四〕黃金枝　柳の新芽の生えた枝。

〔三〕

依依嫋嫋復青青。

〔三〕

依依嫋嫋復た青青、
勾引春風無限情。
白雪花繁空撲地、
綠絲條弱不勝鶯。

【詩意】柳の枝がたをやかに青青と垂れて、限なき春の情趣を惹起す。やがて雪のやうな花も散つて、弱弱しい條が鶯を宿すにも堪へぬやうである。

【字解】〔一〕依依嫋嫋　柳の枝のたをやかな貌。〔二〕勾引　ひきつける。〔三〕白雪花繁　柳の花は白くして雪の如し。空撲地は空しく散るなり。

〔四〕

紅版江橋青酒旗。
館娃宮暖日斜時。
可憐雨歇東風定、
萬樹千條各自垂。

〔四〕

紅版江橋酒旗青し、
館娃宮暖かにして日斜なる時。
憐む可し雨歇みて東風定まり、
萬樹千條各自に垂る。

【詩意】川には朱塗の橋が架つてゐて、橋の袂の酒屋の軒には青旗が春風に翻り、遙に見ゆる館娃宮のあたりを夕日がぽかぽかと照してゐる。雨も歇み風も定まり、千枝萬枝の青柳の絲が靜に垂れてゐる風情は、何とも謂へぬ好い景色だ。

【字解】〔一〕紅版江橋　版は板に同じ。朱塗の橋。〔二〕館娃宮　吳王夫差の西施を館せし宮殿。蘇州に在り。〔三〕可レ憐　愛すべしの意。

〔五〕

蘇州楊柳任君誇。
更有錢塘勝館娃。
若解多情尋小小。
綠楊深處是蘇家。

〔五〕

蘇州の楊柳は君の誇るに任す、
更に錢塘の館娃に勝る有り。
若し解く多情小小を尋ぬれば、
綠楊深き處是れ蘇家。

【字解】〔一〕錢塘　杭州なり。〔二〕小小　南齊時代の錢塘の妓。姓は蘇。

【詩意】蘇州の柳を誇らば誇れ、蘇州には館娃宮で名高い西施といふ美人がゐたといふなら、錢塘には西施にも勝る蘇小小がゐた。若し一目拜みたいといふ御執心があるなら、それそこの綠楊の深く垂れた處が其家だ。

〔六〕

蘇家小女舊知名。
楊柳風前別有情。
剝條盤作銀環樣。
卷葉吹爲玉笛聲。

〔六〕

蘇家の小女舊名を知らる、
楊柳風前別に情有り。
條を剝ぎ盤して銀環の樣を作し、
葉を卷き吹いて玉笛の聲を爲す。

【字解】〔一〕蘇家小女　卽ち蘇小小なり。〔三〕盤　まるめること。

【詩意】錢塘は昔から蘇小小で名高い處で、今でも美しい少女が多い。その美しい少女が、柳の枝を摘み、葉を卷いて銀環の形のやうにし、玉笛のやうに吹き鳴らしながら、春風になぶられる柳の下に立つてゐるのは、何ともいへぬ風情がある。

〔七〕

葉含濃露如啼眼。
枝嫋輕風似舞腰。
小樹不禁攀折苦。
乞君留取兩三條。

〔七〕

葉は濃露を含みて啼眼の如く、
枝は輕風に嫋みて舞腰に似たり。
小樹は禁へず攀折の苦に、
乞ふ君留取せよ兩三條。

【字解】〔一〕留取　殘して置く。

【詩意】葉はしつとりと露を含んで啼いた眼のやうであり、枝は輕風になぶられて舞の腰振のやうである。まだ小さい樹は攀折の苦に堪へられないやうだから、二三本手折らずに殘しておいてやれ。

〔八〕

人言柳葉似愁眉。
更有愁腸似柳絲。
柳絲挽斷腸牽斷。

〔八〕

人は言ふ柳葉愁眉に似たりと、
更に愁腸の柳絲に似たる有り。
柳絲挽き斷えて腸牽き斷ゆ、

彼此應無續得期。　彼此應に續ぎ得る期無かるべし。

【詩意】人は柳の葉は愁眉に似てゐるといふが、單にそればかりではない。柳の絲は亦愁腸に似てゐる。何となれば柳の絲が挽き斷え腸が牽き斷えると、再び續ぎ得る時はないから。

浪淘沙詞六首

浪淘沙の詞　六首

一泊沙來一泊去。　一泊沙來り一泊去る、
一重浪滅一重生。　一重浪滅し一重生ず。
相攪相淘無歇日。　相攪し相淘して歇む日無し、
會教山海一時平。　會ず山海をして一時に平かならしめん。

【題義】浪淘沙は曲調の名である。

【詩意】沙が浪に淘ひ去られて、浪の去來に隨つて沙が去來する。相攪し相淘うて歇む日とてはない。この調子だと山も海もいつかは必ず平になつてしまふだらう。

〔一〕

白浪茫茫與海連。　白浪茫茫海と連る、

【字解】〔一〕茫茫　ひろき貌。

平沙浩浩四無邊。　平沙浩浩四に邊無し。
暮去朝來淘不住。　暮に去り朝に來り淘して住まらず、
遂令東海變桑田。　遂に東海をして桑田に變せしめん。

【詩意】白浪がひろびろと海と連り、沙濱がひろびろと限りもなくひろがつてゐる。朝となく晩となく、一刻も休みなしに浪が沙を淘うてゐる。やがて海が變じて桑畠になつてしまふであらう。

【字解】〔一〕浩浩　ひろき貌。〔三〕桑田　桑畠。

〔二〕

青草湖中萬里程。　青草湖中萬里程、
黃梅雨裏一人行。　黃梅雨裏一人行く。
愁見灘頭夜泊處。　愁へて灘頭夜泊の處を見れば、
風翻闇浪打船聲。　風は闇浪を翻して船を打つ聲。

【詩意】青草湖中の萬里の旅程を、梅雨を冒して唯一人行く。早瀨にさしかかつて今夜舟を泊すべき處を望めば、風が浪を翻して一入舷を敲きつける。

【字解】〔一〕青草湖　湖の名。湖南省湘陰縣の北一百里に在り、南は湘水に接し、北は洞庭湖に通ず。〔二〕黃梅雨裏　さみだれの降る中。〔三〕灘頭　早瀨のほとり。

〔四〕

借問江潮與海水。
何似君情與妾心。
相恨不如潮有信。
相思始覺海非深。

〔四〕

借問す江潮と海水と、
何似か君が情と妾が心とに。
相恨む潮の信有るに如かざるを、
相思ふ始めて覺る海も深きに非ざるを。

【詩意】潮と海とに問はう。郎が心と妾が心とに比して果して如何と。郎が心の潮のやうに信のないのが恨めしく、郎を思ふ妾が心は海よりも深い。

〔五〕

海底飛塵終有日。
山頭化石豈無時。
誰道小郎拋小婦。
船頭一去沒廻期。

〔五〕

海底塵を飛ばす終に日あり、
山頭石に化する豈時なからんや。
誰か道ふ小郎小婦を拋ち、
船頭一たび去つて廻る期沒しと。

【詩意】海の水が乾上つて海底から塵の立つ日が來ないとも限らない。昔ある若衆が小娘を棄てて舟出したまま歸らなかつたので、其小娘が山の頂で石に化したといふではないか。（神異經に見ゆる望夫石の故事を詠んだのである。）

〔六〕

隨波逐浪到天涯。
遷客生還有幾家。
却到帝鄉重富貴。
請君莫忘浪淘沙。

〔六〕

波に隨ひ浪を逐ひて天涯に到る、
遷客生きて還るは幾家か有る。
却つて帝鄉に到りて重ねて富貴ならば、
請ふ君忘るる莫れ浪の沙を淘するを。

【字解】〔一〕遷客　遠方に貶謫される人。幾家は幾人の意。〔三〕帝鄉　帝都。

【詩意】浪のまにまに天涯に貶謫された人は、生きて還ることは稀である。若し幸に帝京に歸つて更に富貴になり得たならば、全く浪に淘はれた沙のやうだと思ふがよい。

白樂天詩後集　卷十三

律詩　凡八十首

讀老子

言者不知知者默。　言ふ者は知らず知る者は默す、
此語吾聞於老君。　此語吾老君に聞けり。
若道老君是知者。　若し老君は是れ知者なりと道はば、
緣何自著五千文。　何に緣りてか自ら五千文を著せる。

【題義】老子道德經を讀んで感想を述べた詩である。

【詩意】彼是れと言ふ者は實は物の道理を知らないからで、本當に知つてゐる人は言はないものだといふことを、吾は老子から聞いた。さて若し老子が本當の知者であるならば、なぜ五千言の書を著したのであらう。

【字解】〔一〕言者不知　老子に知者不言、言者不知とある。〔二〕老君　老子。〔三〕五千文　老子道德經は五千字より成る。

讀莊子

莊生齊物同歸一。
我道同中有不同。
遂性逍遙雖一致。
鸞鳳終校勝蛇蟲。

莊子を讀む

莊生が齊物は同じく一に歸す、
我が道は同中不同有り。
性を遂げて逍遙たるは一致なりと雖も、
鸞鳳は終に校蛇蟲に勝れり。

【題義】莊子を讀んで所感を述べた詩である。

【詩意】莊子は齊物論を著して萬物皆一なりと說き、平等無差別を主張してゐるが、我が道に於ては平等の中に差別ありと說く。萬物各〻その本性を遂げて從容遊樂することは同じであるが、鸞鳳はやはり蟲蛇よりも貴いやうだ。

【字解】〔一〕莊生　莊子。齊物論を著し萬物皆一なりと說く。〔二〕我道　儒學を指して言ふ。〔三〕遂　從容遊樂すること。

讀禪經

須知諸相皆非相。
若住無餘却有餘。
言下忘言一時了。

禪經を讀む

須らく知るべし諸相は皆相に非ず、
若し無餘に住せば却つて有餘。
言下に言を忘れて一時に了す、

【字解】〔一〕諸相　佛語。ありとあらゆるもの、是を法といひ、諸法の體狀、是を相といふ。〔二〕無餘　佛語。佛の授記に、有餘無餘の二種あり。演密鈔に、餘卽求盡之義、今盡言之、名爲無餘とある。

夢中說夢兩重虛。
空花豈得兼求果。
陽焰如何更覓魚。
攝動是禪禪是動。
不禪不動卽如如。

夢中に夢を說きて兩重虛し。
空花は豈兼ねて果を求むるを得んや、
陽焰如何ぞ更に魚を覓めん。
攝動は是れ禪禪は是れ動、
不禪不動卽ち如如。

法皆如なれば如如といふ。

【題義】禪學の經文を讀んで所感を述べた詩である。

【詩意】世間の諸相は皆實相ではない。これぞと言を盡して言へば既に言を失つてゐるので、何とも言はないのが至理を盡してゐるのだ。夢中に夢を說くは卽ち虛言である。空しき花は果を得ることは出來ず、陽焰は水の如きも決して魚を覓めることは出來ない。一方から見れば動を攝めるのが禪であるが、一方から觀れば禪は亦活動的のものである。動靜はもと不可分のものである。

【字解】〔一〕來由　由來。〔二〕陽焰　佛語。遠地の日光、水を見るが如く然るをいふ。以て空花に對す。夢幻泡影と譬喩正に同じ。〔三〕攝動　動くことを攝收すること。〔四〕如如　佛語。法性の理體不二平等なるを如といひ、此彼の諸

感興二首

吉凶禍福有來由。

感興　二首

吉凶禍福來由有り、

但要深知不要憂。
只見火光燒潤屋。
不聞風浪覆虛舟。
名爲公器無多取。
利是身災合少求。
雖異匏瓜難不食。
大都食足早宜休。

但深く知るを要して憂ふるを要せず。
只見る火光の潤屋を燒くを、
聞かず風浪の虛舟を覆すを。
名は公器たり多く取る無れ、
利は是れ身の災なり合に少しく求むべし。
匏瓜に異にして食はざること難しと雖も、
大都食足らば早く宜しく休すべし。

【題義】所感を述べた詩である。

【詩意】吉凶禍福の來るは皆由つて來る所の原因があるのだから、それを探知することは必要だが、徒に憂ふるを要せぬのである。富める家は火災に罹ることがあるが、如何なる風浪でも虛舟を覆すことはない。名と利とは天下の公器であり又災のもとであるから、多きを貪つてはいけない。人は匏瓜ではないから食はずには生きてゐられないが、先づ生活が出來れば早く罷めて退くがよい。

潤屋　富める家。大學に富潤屋とある。【三】名　名譽。【四】匏瓜　苦匏なり。其味苦くして食ふべからず。論語に、吾豈匏瓜也哉、焉能繫而不食とある。

〔二〕

魚能深入寧憂釣。
鳥解高飛豈觸羅。
熱處爭先炙手去。
悔時其奈噬臍何。
樽前誘得猩猩血。
幕上偸安燕燕窠。
我有一言君記取。
世間自取苦人多。

魚は能く深く入らば寧ろ釣らるるを憂へんや、
鳥は解く高く飛ばば豈羅に觸れんや。
熱き處には先を爭つて手を炙り去れ、
悔ゆる時は臍を噬むを其奈何せん。
樽前誘ひて猩猩の血を得、
幕上に偸に燕燕の窠に安んず。
我に一言有り君記取せよ。
世間自ら苦を取る人多し。

【字解】【一】熱處　勢燄の盛なるをいふ。唐語林に、會昌中語曰、鄭楊段薛、炙手可熱とある。【二】噬臍　後悔すること。左傳に若不早圖、後君噬臍とある。【三】猩猩血　猩猩の血なり。華陽國志に、其血可染朱爾とある。朱爾は紅色の毛氈。【四】燕燕窠　燕の巣。季札孫文子の戚に在るを譏りて曰く、夫子之在此也、猶燕之巢於幕上と。事左傳に見ゆ。居る處の不安なるを

【詩意】魚は水の底深く潜めば釣られる心配はなく、鳥は空高く飛べば網に罹る心配はない。されば勢燄の盛な處に長居は無用だ。よき程に手を炙つたらサッサと去るがよい。禍が來てから後悔しても間に合はない。榮華を極めて樽前に緋の毛氈を敷いて盛宴を張つても、恰も幕の上に燕が巣を作つたやうなもので、永く安住することは出來ないのだ。一言戒を與へるから、よく覺えておけ。そは他にあらず、「苦は皆自ら招くのだ」といふことだ。

いふ。【四】記取　よく覺えておけといふ意。

問鶴

烏鳶争食雀争窠。
獨立池邊風雪多。
盡日蹋冰翹一足。
不鳴不動意如何。

鶴に問ふ

烏鳶は食を争ひ雀は窠を争ふ、
獨り池邊に立ちて風雪多し。
盡日冰を蹋みて一足を翹ぐ、
鳴かず動かず意如何。

【題義】鶴（高士に喩ふ）に問ふ詩である。

【詩意】烏や鳶は食を争ひ雀は巣を争つてゐるのに、鶴は獨り風雪の中の池の邊に終日片足で立つて鳴きもせねば動きもしない。一體どんな考でゐるのだらう。

【字解】〔一〕窠　巣。〔二〕盡日　終日。

代鶴答

鷹爪攖雞雞肋折。
鶻拳蹙鴈鴈頭垂。
何如斂翅水邊立。
飛上雲松棲穩枝。

鶴に代つて答ふ

鷹爪雞に攖れて雞肋折れ、
鶻拳鴈に蹙りて鴈頭垂る。
何ぞ如かん翅を斂めて水邊に立ち、
飛びて雲松に上りて穩枝に棲むに。

【題義】鶴に代つて答へた詩である。

【詩意】鷹の爪が雞に攖れると雞の肋は忽ち折れ、鶻の拳が雁をつかむと雁の頭が忽ち飛んでしまふ。暴力にかかつては到底かなはない。だから翅を斂めて水邊に立ち、或は雲中の松の穩かな枝を選んで棲つてゐるがよいのだ。

閑臥有所思二首

向夕褰簾臥枕琴。
微涼入戸起開襟。
偶因明月清風夜。
忽想遷臣逐客心。
何處投荒初恐懼。
誰人遶澤正悲吟。
始知洛下分司坐。
一日安閑直萬金。

閑臥して思ふ所あり　二首

夕に向へば簾を褰げ臥して琴を枕とし、
微涼戸に入れば起つて襟を開く。
偶ま明月清風の夜に因りて、
忽ち想ふ遷臣逐客の心。
何の處にか荒に投ぜられて初めて恐懼する、
誰人か澤を遶りて正に悲吟する。
始めて知る洛下分司の坐、
一日安閑直萬金。

【字解】〔一〕微涼　涼しい風。〔二〕遷臣逐客　貶謫せられた人。〔三〕投荒　遠方に謫せられる。〔四〕遶澤正悲吟　楚の屈原の貶せられて、澤畔に行吟した故事。〔五〕洛下　洛陽。分司は分司東都の官。時に樂天は分司東都たり。

【題義】閒に臥して思ふ所を述べた詩である。

【詩意】夕方になれば簾を捲き琴を枕にして臥し、涼風が戸にはひつて來れば襟を開いて起坐する。ふと明月清風に對して貶謫せられてゐる人の身の上を想像した。今頃は遠方に流されて恐懼してゐる者もあるだらう。又屈原のやうに澤畔を行吟してゐる者もあるだらう。それから見れば洛陽に分司となつてゐるのは、安穩無事で、一日千金の値がある。

〔一〕

權門要路是身災。
散地閒居少禍胎。
今日憐君嶺南去。
當時笑我洛中來。
蟲全性命緣無毒。
木盡天年爲不才。
大抵吉凶多自致。
李斯一去二疏廻。

〔一〕

權門要路は是れ身の災なり、
散地閒居は禍胎少なり。
今日憐む君が嶺南に去るを、
當時笑ふ我が洛中に來りしを。
蟲の性命を全くするは毒無きに緣り、
木の天年を盡すは不才なるが爲なり。
大抵吉凶は多く自ら致す。
李斯は一たび去り二疏は廻る。

【字解】〔一〕權門要路　權勢の地位に在ること。〔二〕散地閒居　閒散の地位に居ること。禍胎は禍の本。〔三〕君　李宗閔を指して言ふ。嶺南は五嶺の南。〔四〕性命　生命に同じ。〔五〕不才　役に立たないこと。〔六〕李斯　秦の相なり、晩に刑ぜられて死す。二疏は漢の疏廣と疏受。一旦年七十に滿ちしを以て官を辭して鄉に歸る。故に天壽を全うするを得たり。

【詩意】權要の地位に居るのは身の災である。之に反して閒散の地位に居れば災は少い。君は權要の地位にゐたが、氣の毒なことに今日嶺南に貶せられるやうになり、嘗て君は我が自ら求めて洛陽に來たのを笑つたが、おかげで自分は今以て無事である。蟲の生命を全うするのは毒を持たないからで、木のいつまでも伐られずに壽命を盡し得るのは何の役にも立たないからである。だから不才無能に勝る寶はない。大抵吉凶は自ら招くのである。李斯は權勢を恣にしたから非命の最後を遂げ、二疏は早く引退したから天命を全うしたではないか。

【餘論】汪立名曰く「按ずるに此詩は太和九年に作る。時に李訓・鄭注事を用ひ、絲恩髮怨必ず報い、盡く二李の黨を逐ふ。李德裕既に外に貶せらる。注又素より京兆尹楊虞卿を惡み、構へて虞州に貶す。李宗閔論救し、亦坐して貶せらる。樂天もと楊虞卿に於て姻親たり。史其惡を稱し黨人の斥けらるるに緣り、頃に分司東都を求む。故に當時笑二我洛中來一の句あるなり。權門要路及び李斯等は蓋し宗閔を指すのみ。見るべし樂天は特に宗閔に附かざるのみならず、亦幷せて虞卿に私せず、久しく已に身を二黨の外に潔くせるを」と。

喜閒

閒を喜ぶ

瀟洒伊嵩下。優游黃綺間。

瀟洒たり伊嵩の下、優游す黃綺の間。

未曾一日悶。已得六年閒。
魚鳥爲徒侶。煙霞是往還。
伴僧禪閉目。迎客笑開顏。
興發宵遊寺。慵時晝掩關。
夜來風月好。悔不宿香山。

【字解】〔一〕瀟洒　さつぱりとしてゐる貌。伊嵩は伊は川の名、嵩は山の名。〔二〕黃綺　商山四皓中の人。夏黃公と綺里季。太子賓客たる人人に喩ふ。〔三〕徒侶　遊び仲間。〔四〕往還　往來して交る。〔五〕香山　洛陽の近くの山。

【題義】閒を得たことを喜ぶ詩である。

【詩意】伊水嵩山のあたりの瀟洒たる處に、黃綺を友として優遊し、一日も憂悶するやうなことはなく、既に六年の閒を得た。魚鳥を侶とし煙霞の間に往來し、僧に伍して坐禪したり、客を迎へて談笑したりしてゐる。興が湧けば夜でも寺に遊び、慵い時は晝でも門を閉ぢておく。今夜は風月が特に美しいので、香山に遊びに往かなかつたことを悔いた。

詩酒琴人例多薄命。予酷好三事。雅當此科。而所得已多。爲幸斯甚。偶成狂詠。聊寫愧懷

詩酒琴の人は例として多くは薄命なり。予酷だ三事を好む。雅に此科に當れり。而るに得る所已に多し。幸たること斯に甚し。偶〻狂詠を成し聊か愧懷を寫す。

愛琴愛酒愛詩客。
多賤多貧多苦辛。
中散步兵終不貴。
孟郊張籍過於貧。
一之已歎關於命。
三者何堪併在身。
只合飄零隨草木。
誰教凌厲出風塵。
榮名厚祿二千石。
樂飲閒遊三十春。
可得無厭時咄咄。
猶言薄命不如人。

琴を愛し酒を愛し詩を愛する客、
多くは賤しく多くは貧しく多くは苦辛す。
中散步兵終に貴からず、
孟郊張籍貧に過ぐ。
之を一にするも已に命に關するを歎ず、
三者何ぞ併せて身に在るに堪へん。
只合に飄零して草木に隨ふべし、
誰か凌厲して風塵を出でしむる。
榮名厚祿二千石、
樂飲閒遊三十春。
厭ふ無きを得べきも時に咄咄として、
猶ほ言ふ薄命人に如かずと。

【字解】〔一〕三事　詩酒琴なり。〔二〕中散　三國魏の嵇康、中散大夫に拜せられ、酒詩を好めり。步兵は三國魏の阮籍、亦酒詩を好む。官步兵校尉に至る。故に阮步兵といふ。〔三〕孟郊・張籍　並に唐の詩人、韓愈の弟子なり。〔四〕一之　詩酒琴の中一を好むこと。〔五〕凌厲　勢よく飛躍する。〔六〕咄咄　嗟嘆する貌。

【題義】詩と酒と琴とを好む人は通例薄命なものときまつてゐる。予は極めて此三者を好むから當然薄命であるべき筈であるのに、却つて幸を得てゐる。因つて此詩を作つて感懷を述べたといふ意。

【詩意】琴酒詩を好む人は多くは貧賤苦辛する。嵇康や阮籍は生涯貴くはなれず、孟郊や張籍は窮の間に生涯を終つた。三者の中一を好んでさへ運命に關するのに、我は三者を好むのであるから推して知るべきのみで、必ず草木と倶に零落すべき筈であるのに、何の幸か風塵を出でて飛揚することが出來て、二千石の官を奉じて榮名厚祿を享け、三十年間樂飲閑遊することが出來た。意外の幸運なのだから其れで滿足すべき筈なのに、時時不平をこぼして身の薄命を嘆ずる。

寄明州于駙馬使君三絶句

明州の于駙馬使君に寄する三絶句

有花有酒有笙歌。　花有り酒有り笙歌有り、
其奈難逢親故何。　親故に逢ひ難きを其奈何せん。
近海饒風春足雨。　近海は風饒く春は雨足る、
白鬚太守悶時多。　白鬚の太守悶時多し。

【題義】明州に居る于季友に寄せた詩である。後集巻十二、同二諸客一題二于家公主舊宅一を參照せよ。

【字解】〔一〕于駙馬　于は姓、名は季友。天子の女婿を駙馬といふ。使君は刺史の稱。〔二〕親故　親戚故舊。〔三〕白鬚太守　于使君を指して言ふ。

【詩意】明州（今の浙江省鄞縣）には花もあり酒もあり笙歌もあるが、親戚故舊に遇はれないのが不足であらう。特に海に近い土地で風雨が多いから、白鬚の太守はさぞ愁悶してゐるであらう。

〔一〕

平陽音樂隨都尉。　平陽の音樂都尉に隨ひ、
留滯三年在浙東。　留滯三年浙東に在り。
吳越聲邪無法用。　吳越聲邪にして法用無し、
莫教偸入管絃中。　偸みて管絃の中に入れしむる莫れ。

【字解】〔一〕平陽音樂　漢の武帝平陽公主の第に幸し、謳者衛子夫の美を愛し、召し入れて宮中に侍せしむ。ここは平陽公主を借りて永昌公主に比す。都尉は駙馬の職官。〔二〕浙東　明州なり。〔三〕吳越　明州地方。

【詩意】永昌公主の下に仕ふる美妓竝に都尉を隨ひて、君は既に三年間浙東に留滯してゐる。吳越地方の音樂は邪淫で正法に叶つてゐないから、管絃の中に取り入れないがよい。

〔二〕

何郎小妓歌喉好。　何郎の小妓歌喉好し、
嚴老呼爲一串珠。　嚴老呼んで一串の珠と爲す。

嚴尚書與二于駙馬一共珠。詩云。莫惜歌喉一串珠。

【字解】〔一〕何郎　三國魏の何晏、少くして才秀を以て名を知られ、魏の公主に尚す。ここは借りて于駙馬に比す。〔二〕一串珠　一貫の珠。

海味腥鹹損聲氣。　海味腥鹹にして聲氣を損ず、
聽看猶得斷腸無。　聽看して猶ほ腸を斷つを得るや無や。

【詩意】君の小妓は聲が善いので嘗て峻尚書は一串の珠のやうだと評したが、明州は海邊だから、鹽分が其聲を損じたであらう。それでも聽いて看て猶ほ人をして腸を斷たしむるであらうか。

【題義】閒臥の氣味を述べた詩である。

【詩意】食事の淡泊なことは齋戒のやうで、閒職に居ることは隱士も同然である。佛は我を容れて弟子となし、天は我を許して閒人とした。只水の邊に臥床を置くより外には、何物をも身に近づけない。

【字解】〔一〕薄食　淡泊な食事。〔二〕散班　閒職。隱淪は隱士なり。杜甫の詩に行歌非ㇾ隱淪」とある。〔三〕紗巾　紗の頭巾。〔四〕聽看　きいてみる。

閒臥

薄食當齋戒。散班同隱淪。
佛容爲弟子。天許作閒人。
唯置牀臨水。都無物近身。
清風散髮臥。兼不要紗巾。

風の當る處に髮を散らして臥してゐるので、頭巾の必要もない。

春早秋初因時卽事。兼寄浙東李侍郎

春早秋初晝夜長。　春早秋初晝夜長し、
可憐天氣好年光。　可憐の天氣好年光。
和風細動簾帷暖。　和風細に動きて簾帷暖かに、
清露微凝枕簟涼。　清露微しく凝りて枕簟涼し。
窓下曉眠初減被。　窓下曉に眠りて初めて被を減じ、
池邊晚坐乍移牀。　池邊晚に坐して乍ち牀を移す。
閒從蕙草侵堦綠。　閒に蕙草の堦を侵して綠なるに從せ、
靜任槐花滿地黃。　靜に槐花の地に滿ちて黃なるに任す。
理曲管絃聞後院。　曲を理むる管絃後院に聞え、
熨衣燈火映深房。　衣を熨す燈火深房に映ず。

【字解】〔一〕可憐　愛すべき意。好年光は好季節といふが如し。〔二〕被　夜著。〔三〕蕙草　香草なり。〔四〕四時　春夏秋冬。別は眞價を識別する意。

四時新景何人別。　四時の新景何人か別つ、
遙憶多情李侍郎。　遙に憶ふ多情の李侍郎。

【題義】春早秋初氣節の變化する時の卽景を敍し、兼ねて浙東觀察使李紳（字は公垂）に寄せた詩である。

【詩意】春の初は日が長くなり秋の初は夜が長くなり、愛すべき好季節である。穏かな風が暖かに吹いて簾帷を動かし（春）、白露が結んで枕簟を掃ふ風も涼しく（秋。以下皆春と秋とを互に述べた）、うとうとと晩まで眠つて夜具も輕輕となり、池の邊に牀を移して夕に坐し、蕙草の綠が日を逐うて堦を侵し、槐の花が落ちて地上一面に黃色になり、管絃の調が奥の書院まで聞え、秋衣を熨す燈火が奥の部屋に照り映えてゐるなど、皆棄て難い風情がある。この新景の興趣を本當に識別する者は君を措いて他に求めることは出來ないので、新景に遇ふ毎に遙に君を憶うてゐる。

新秋喜涼

新秋涼を喜ぶ

過得炎蒸月。尤宜老病身。
炎蒸の月を過し得て、尤も老病の身に宜し。
衣裳朝不潤。枕簟夜相親。
衣裳朝に潤はず、枕簟夜相親む。
樓月纖纖早。波風嫋嫋新。
樓月纖纖として早く、波風嫋嫋として新なり。
光陰與時節。先感是詩人。
光陰と時節と、先づ感ずるは是れ詩人。

【字解】〔一〕纖纖　細き貌。〔二〕嫋嫋　風の吹く貌。

【題義】秋に入つて新涼を得たことを喜んだ詩である。

【詩意】蒸し暑い幾月かを過ぎて秋に入り、老病の身には特に快く思はれる。朝の衣裳も汗ばむことなく、夜は簟の上に枕して横はる。樓上の三日月の影、水波を漂はす新秋の風、とりどりに風情がある。時節と風光との變化に最も敏感なのは、我我詩人の本領である。

初夏閒吟。兼呈韋賓客

初夏閒吟、兼ねて韋賓客に呈す

孟夏清和月。東都閒散官。
孟夏清和の月、東都閒散の官。
體中無病痛。眼下未飢寒。
體中病痛無く、眼下未だ飢寒せず。
世事聞常悶。交游見卽歡。
世事聞きて常に悶し、交游見れば卽ち歡ぶ。
杯觴留客切。妓樂取人寬。
杯觴客を留むること切に、妓樂人を取ること寬なり。
雪鬢隨身老。雲心著處安。
雪鬢身に隨ひて老い、雲心處に著して安し。
此中殊有味。試說向君看。
此中殊に味有り、試みに說きて君に向ひて看せしむ。

【字解】〔一〕孟夏　初夏なり。清和は四月をいふ。〔二〕東都　洛陽をいふ。〔三〕交游　友人。〔四〕雪鬢　白い鬢毛。〔五〕雲心　雲の如き心。

【題義】初夏の時節に閑吟し、兼ねて太子賓客（官名）韋氏に呈した詩である。

【詩意】初夏の好季節に洛陽に在りて閑職を奉ずる我は、身に病痛もなく眼前に飢寒もなくて日を過ごし、世間の事を聞いては憂悶し、友達の顔を見ては歡び、杯酒を以て懇に客を引留め、まづいのをも厭はず妓をして歌樂を奏せしめる。身の老ゆるままに鬢は白くなるが、心は雲の如く隨處に安んじてゐる。かかる生活狀態の中に言ふに言はれぬ味がある。今試みに君に說いて看せる次第である。

哭崔二十四常侍

崔二十四常侍を哭す

崔好酒放歌。忘懷生死。知疾不起。自爲誌文。

崔酒を好み歌を放にし、懷に生死を忘る。疾んで起たざるを知り、自ら誌文を爲る。

貂冠初別九重門。
馬鬣新封四尺墳。
薤露歌詞非白雪。
旌銘官爵是浮雲。
伯倫常置隨身鍤。
元亮先爲自祭文。
莫道高風無繼者。
一千年內有崔君。

【字解】〔一〕貂冠　常侍の冠。九重は天子の宮殿。〔二〕馬鬣　墳墓に土を封ずる狀をいふ。禮記檀弓に吾見封之若堂者矣、見若坊者矣、見若覆夏屋者矣、見若斧者矣、吾從若斧者、馬鬣封之謂也とある。〔三〕薤露　挽歌なり。白雪は巧なる詩をいふ。宋玉の文に、爲陽春白雪、國中屬而和者、不過數十人とある。〔四〕旌銘　銘旌なり。官職姓名を書して柩上に加ふる旌。浮雲は論語に、不義而富

【題義】崔常侍（常侍は官名、二十四は輩行）の死を哭する詩である。

【詩意】君は常侍の官を以て宮闕を辭し、今や死して墳墓の中の人となつた。吾が君の死を哭する詩は決して好詩と謂ふに足らず、銘旌に記さるる君の官爵は空しく浮雲となつてしまつた。昔劉伶は常に人をして鍤を荷つて隨はしめ、陶淵明は生前早くも自祭文を作つて置いた。かかる生に執著のない高風を、一千年內に繼いだ者は實に我が崔君のみである。

且貴、於我如浮雲」とあるを用ふ。〔四〕伯倫　晉の劉伶、字は伯倫。尤も酒を嗜み、人をして鍤を荷ひて之に隨はしめ、謂うて曰く、死せば即ち我を埋めよと。〔六〕元亮　晉の陶淵明、字は元亮、生前に自祭文を作る。

奉酬侍中夏中雨後遊城南莊。見示八韻

侍中が夏中の雨後に城南の莊に遊び、八韻を示されしに酬い奉る

島樹間林巒。雲收雨氣殘。
四山嵐色重。五月水聲寒。

老鶴兩三隻。新篁千萬竿。
化成天竺寺。移得子陵灘。
心覺閒彌貴。身緣健更歡。
帝將風后待。人作謝公看。
角里年雖老。高陽興未闌。
佳辰不見召。爭免趁杯盤。

来時云。何處趁杯盤。

【字解】〔一〕兩三隻　二三羽。〔二〕新篁　新しく生えた竹。〔三〕天竺寺　杭州に在る寺の名。〔四〕子陵灘　浙江省桐廬縣の南に在る嚴陵瀨ならん。後漢の嚴光、字は子陵の居りし處。〔五〕風后　黄帝の相。帝王世紀に、黄帝得二風后於海隅一、登以爲レ相とある。〔六〕謝公　晉の謝安、字は安石。東山に隱居し、妓を以て相從ふ。卒して太傅を贈られ、世に謝太傅と稱す。〔七〕角里　商山四皓中の一人、角里先生。太子賓客たる樂天自ら比す。〔八〕高陽　晉の山簡出でて征南將軍となり襄陽に鎮す。每に習家の園池に遊び、池上に置酒す。之を名づけて高陽池といふ。〔九〕佳辰　よき時節。

【題義】侍中は後集卷十二に見ゆる侍中晉公裴度であらう。此詩は裴度が、夏、雨後に洛陽城南の山莊に遊び、八韻十六句の詩を作つて樂天に示したので、樂天が酬いたのである。

【詩意】島中の樹木が林巒と相間り、雲散じ雨收まり、四方の山氣は翠を累ね、泉流は淙淙として響を增し、老鶴が二三羽飛びかはし、新竹が千萬本聳え立つてゐる。山は天竺寺の境內かと怪まれ、水は子陵灘かと疑はれる。侍中裴公は心は閒を覺えて彌〻貴く、身は健なるに因つて更に歡び、天子は公を待つて宰相となし、世人は公を以て謝太傅に比してゐる。太子賓客たる我は年老いたりと雖も酒興は未だ盡せりとなさず。されば今日の如き好時節には、たとひ招かれずとも杯盤を趁うて淸遊に伴はざるを得ないのである。

送兗州崔大夫駙馬赴鎭　兗州の崔大夫駙馬の鎭に赴くを送る

戚里誇爲賢駙馬。
儒家認作好詩人。
魯侯不得辜風景。
沂水年年有暮春。

【字解】〔一〕兗州　州の名。古の魯の地。崔大夫の崔は姓。大夫は諫議大夫か御史大夫ならん。駙馬は皇女を娶りし者の稱。〔二〕戚里　天子の外戚の居る處。〔三〕魯侯　崔大夫を指して言ふ。〔四〕沂水　魯に在る川の名。

【題義】崔駙馬が兗州の鎭に赴任するのを送る詩である。

【詩意】戚里に於ては崔大夫をば賢駙馬と誇り、儒者は崔大夫を認めて好詩人と謂つてゐる。苟くも一國に長たる以上は其風景に辜負することは出來ないから、今後は年年沂水の暮春の好風景を詠ずる

であらう。

少年問

少年問ふ

少年怪我問如何。　少年我を怪んで如何と問ふ、
何事朝朝醉復歌。　何事ぞ朝朝醉ひ復た歌ふ。
號作樂天應不錯。　號して樂天と作す應に錯らざるべし、
憂愁時少樂時多。　憂愁の時は少くして樂む時は多し。

【題義】少年の樂天に問ふ意に擬して作つた詩である。

【詩意】少年が我を怪んで「毎日醉つたり歌つたりしてゐるのは何故であるか。自ら樂天と號するからには、憂愁する時は少くて樂む時は多い筈ではないか。何も醉歌などする必要はなからう」と問ふ。

問少年

少年に問ふ

千首詩堆青玉案。　千首詩は堆し青玉の案、
十分酒寫白金盂。　十分酒は寫す白金の盂。
回頭却問諸年少。　頭を回し却つて諸の年少に問ふ、

【字解】〔一〕白金盂　銀杯。

作箇狂夫得了無。　箇の狂夫と作ることを了するを得るや無や。

【題義】少年に問ふ詩である。

【詩意】なるほど俺は少年諸君の怪むとほり青玉の机に堆積する程多くの詩を作り、銀杯に酒を十分に瀉いで傾ける。さて頭を回らし却つて少年諸子に問うた。「俺がかく一箇の狂夫になつた俺の苦衷が諸君にわかるか」と。

代琵琶弟子謝女師曹供奉寄新調弄譜

琵琶の弟子に代り女師曹供奉が新調の弄譜を寄せしに謝す

琵琶師在九重城。　琵琶の師は九重の城に在り、
忽得書來喜且驚。　忽ち書の來るを得て喜び且つ驚く。
一紙展看非舊譜。　一紙展べて看るに舊譜に非ず、
四絃翻出是新聲。　四絃翻出す是れ新聲。
蕤賓掩抑嬌多怨。　蕤賓掩抑嬌として多く怨み、
散水玲瓏峭更清。　散水玲瓏峭として更に清し。

【字解】〔一〕女師　女師匠。曹供奉の曹は姓。供奉は官名。唐の代には一藝一能に長ずる者は内廷に奉仕するを得、供奉の名を得たり。
〔二〕九重城　長安の宮城なり。
〔三〕四絃　琵琶なり。

珠顆涙霑金捍撥、
紅粧弟子不勝情。

（義賓・散水。皆新調名。）

【題義】琵琶を習つてゐる弟子に代つて、女師匠の曹供奉が新曲の譜を送つてくれたのに謝した詩である。

【詩意】琵琶のお師匠様は長安の宮城に居られるが、このごろ手紙を下さつたので喜び且驚いた。展げて看ると舊來の譜ではない。琵琶に合せて彈いて見ると全く新作の曲譜である。その中の蕤賓の曲は嬌怨の味に富み、散水の曲は峭清の風がある。之を聽いて女弟子たちは情に堪へないで、眞珠の粒のやうな涙を流して、金捍撥を霑しました。

【一】珠顆　眞珠の粒で　金捍撥は海蜃碎事に、金捍撥在琵琶面上當弦、或以金塗爲飾、所以捍護其撥也とある。

代林園戲贈

裴侍中新修集賢宅成。池館甚盛。數往遊宴。醉歸自戲耳。

林園に代つて戯れに贈る　裴侍中新に集賢宅を修して成り、池館甚だ盛、數〻往いて遊宴し、醉うて歸り自ら戯るるのみ。

南院今秋遊宴少。
西坊近日往來頻。

南院今秋遊宴少なり、
西坊近日往來頻なり。

【字解】【一】南院　履道里の樂天の邸を指して言ふ。【二】西坊　集賢里の裴侍中の宅を指して言ふ。

假如宰相池亭好。
作客何如作主人。

假如宰相池亭の好きも、
客と作るは何ぞ主人と作るに如かん。

【題義】自注にあるとほり裴侍中（裴度なり、前に見ゆ）が新に集賢里の宅を修理して、池館などが立派に出來たので、樂天も數〻遊宴した。この詩は履道里の自分の邸に歸つてから、林園の樂天に贈るに擬して作つたのである。

【詩意】あなた（樂天を指す）は今年の秋は南院に遊宴することが稀で、西坊にばかりいらつしやるが、なるほど宰相の池亭は好いには相違あるまいが、併し客となつて樂むよりは、たとひ劣つてゐても自分の林園で樂む方がまさつてゐるでは御坐らぬか。

【三】宰相　裴侍中を指す。

戯答林園

戯れに林園に答ふ

豈獨西坊來往頻。
偸閒處處作遊人。
衡門雖是棲遲地。
不可終朝鏁老身。

豈獨り西坊にのみ來往すること頻ならんや、
閒を偸んで處處に遊人と作る。
衡門は是れ棲遲の地なりと雖も、
終朝だも老身を鏁す可からず。

【字解】【一】西坊　前の詩に見ゆ。【二】衡門　かぶき門。木を横たへて作りし門。隱者の門。詩經に衡門之下、可以棲遲とある。棲遲は遊息すること。【三】終朝　夜明けから朝飯前までをいふ。

【題義】前の詩に答へたのである。

【詩意】自分は西坊にばかり遊びに行くのではない。暇を見ては到る處に遊びに行くのだ。吾が家は游息の處なりとはいへ、一朝だつて此處にばかり閉ぢ籠つてはゐられない。

重戲贈

重ねて戲れに贈る

集賢池館從他盛。
履道林亭勿自輕。
往往歸來嫌窄小。
年年爲主莫無情。

集賢の池館は他の盛なるに從ず、
履道の林亭自ら輕んずる勿れ。
往往歸り來りて窄小を嫌ふも、
年年主と爲り情無きこと莫らんや。

【字解】〔一〕集賢池館　前に見ゆ。裴侍中の池館。〔二〕履道林亭　樂天の自邸。〔三〕窄小　狹小なり。

【題義】前の詩と同義。

【詩意】裴侍中が集賢里の池館は盛大ではあるが、吾が履道里の林亭も馬鹿にしたものではない。集賢の池館から歸つて來て、自ら吾が林亭の狹小を恥ぢはするが、年年此亭の主人となつてゐるからには親愛の情なきを得ない。

重戲答

重ねて戲れに答ふ

小水低亭自可親。
大池高館不關身。
林園莫妬裴家好。
憎故憐新豈是人。

小水低亭自ら親む可し、
大池高館身に關せず。
林園妬む莫れ裴家の好きを、
故を憎み新を憐むは豈是れ人のみならんや。

【字解】〔一〕林園　樂天の邸の林園なり。裴家は裴侍中の家。

【題義】重ねて林園に答へた詩である。

【詩意】池は小く亭は低いが、吾が物となれば親愛の情が深い。たとひ池は大く館は高くとも、他人のものは親みが薄い。だから我が林園よ、俺が裴家の林園を愛好して屢〻遊びに行くことを妬むな。見慣れたものは珍らしからず、新しいものを好むのは、人ばかりではない。園池だつて同じことだ。俺の屢〻遊ぶのはただ此理由に過ぎないので、お前に冷淡なわけではない。

早秋登天宮寺閣贈諸客

早秋天宮寺の閣に登り諸客に贈る

天宮閣上醉蕭辰。
絲管閒聽酒慢巡。
爲向涼風清景道。

天宮の閣上蕭辰に醉ふ、
絲管閒に聽きて酒慢く巡る。
爲に涼風清景に向つて道ふ、

【字解】〔一〕蕭辰　秋の時節。〔二〕絲管　絲竹管絃。〔三〕兩三人　同遊の諸客なり。

今朝屬我兩三人。　今朝我が兩三人に屬すと。

【題義】初秋の時節に、天宮寺の高閣に登り、同遊の諸客に贈つた詩である。

【詩意】天宮閣の上で音樂を聽き酒を酌みかはせば、愉快此上なしである。因つて涼風清景に向つて謂つた、今朝は此風景が全く我等兩三人の所有物みたいなものだと。

曉上天津閣閒望。偶逢盧郎中張員外攜酒同傾

曉に天津閣に上りて閒望す。偶盧郎中・張員外の酒を攜ふるに逢ひ、同じく傾く

上陽宮裏曉鐘後。
天津橋頭殘月前。
空闊境疑非下界。
飄飄身似在寥天。
星河隱映初生日。
樓閣蔥蘢半出煙。
此處相逢傾一盞。

上陽宮裏曉鐘の後、
天津橋頭殘月の前。
空闊にして境は下界に非ざるかと疑はれ、
飄飄として身は寥天に在るに似たり。
星河隱映して初めて日を生じ、
樓閣蔥蘢として半煙を出づ。
此處相逢うて一盞を傾け、

【字解】〔一〕上陽宮　宮の名。洛陽に在る。〔二〕天津橋　洛水に架せる橋の名。〔三〕下界　人間界。〔四〕飄飄　ふらふらする。〔五〕寥天　空虛なる天。〔六〕星河　あまのがは。〔七〕蔥蘢　青盛の貌。〔七〕一盞　一杯なり。

始知地上有神仙。　始めて知る地上にも神仙有るを。

【題義】曉に天津閣に上つて閒望してゐる處へ、盧郎中と張員外とが酒を攜へて遊びに來たので、俱に一醉したといふのである。

【詩意】上陽宮に夜明の鐘が鳴り、天津橋頭に殘月の懸る時、閣上から遙に眺むれば、一望空闊として下界とは思はれず、身はひらひらとして天上に在るかと疑はれる。天河は曉の日と隱映し、樓閣は朝霧を破つて現れる。此景を賞しつつ俱に酒を酌めば、此世ながらの神仙かと思はれる。

八月十五日夜同諸客翫月

八月十五日夜諸客と同じく月を翫ぶ

月好共傳唯此夜。
境閒皆道是東都。
嵩山表裏千重雪。
洛水高低兩顆珠。
清景難逢宜愛惜。
白頭相勸强歡娛。

月の好きは共に傳ふ唯此夜、
境の閒なるは皆道ふ是れ東都と。
嵩山表裏千重の雪、
洛水高低兩顆の珠。
清景逢ひ難し宜しく愛惜すべし、
白頭相勸めて强ひて歡娛す。

【字解】〔一〕此夜　八月十五夜。〔二〕東都　洛陽。〔三〕兩顆珠　天上と水中とに月がうつる故。

誠知亦有來年會。　誠に知る亦來年會する有るも、
保得晴明强健無。　晴明强健を保し得るや無や。

【題義】八月十五日の晩に諸客と俱に月を賞した詩である。

【詩意】昔から十五夜の月と謂はれて今夜の月は格別であり、又土地の閑雅なことは洛陽が第一である。滿月を浴びた嵩山は表裏に千重の雪を戴いたやうで、洛水に月が浮んで天上と水上とに二個の珠が現れたやうである。かかる清景には再び逢ひ難いから特に愛惜すべきである。因つて老人連が互に酒を勸めて娛んだ。また來年此會がないわけではないが、今夜のやうに月が呀えるか、我我が健康であるかは保證の限りではないから。

【註】保得　保證する。

對晩開夜合花贈皇甫郎中

移晩校一月。花遲過半年。
紅開杪秋日。翠合欲昏天。
白露滴未死。涼風吹更鮮。
後時誰肯顧。唯我與君憐。

移す晩きこと校一月、花遲くして半年を過ぐ。
紅は開く杪秋の日、翠は合す昏れんと欲する天。
白露滴りて未だ死れず、涼風吹きて更に鮮かなり。
時に後れて誰か肯て顧みん、唯我と君と憐むのみ。

【字解】〔一〕夜合花　ねむの花。合歡花とも書く。〔二〕杪秋　秋の末。〔三〕白露　秋の露。

【題義】時に後れて咲いた合歡花に對し、皇甫湜に贈つた詩で、身の不遇を嘆ずる意を寓したものである。

【詩意】移植することが一月ばかり後れたので、花の咲くのが半年も遲くなり、秋の末に紅の花を開き、夕暮に翠の葉を合せてゐる。白露が降つても尙ほ枯れず、秋風が吹いても元氣でゐる。時節はづれの花だから、誰も顧みる者もないが、君と僕とは身につまされて愛情が深い。

醉遊平泉

狂歌箕踞酒樽前。
眼不看人面向天。
洛客最閒唯有我。
一年四度到平泉。

醉うて平泉に遊ぶ

狂歌箕踞す酒樽の前、
眼は人を看ずして面は天に向ふ。
洛客最も閒なるは唯我有るのみ、
一年四度平泉に到る。

【題義】醉うて平泉（洛陽の伊闕山中の地名。李德裕に平泉樹石記と題する文あり）に遊んだ詩である。

【詩意】酒樽の前に狂歌箕踞し、人などには目もくれず、天上に聳ゆる山の巔ばかり眺めてゐる。洛陽の寓客の中でも俺ほど暇のある者はあるまい。だから年に四度は必ず此處に遊びに來る。

【字解】〔一〕箕踞　兩足を伸ばして坐すること。〔二〕洛客　洛陽に寓居する人。

題贈平泉韋徵君拾遺

平泉の韋徵君拾遺に題贈す

箕潁千年後。唯君得古風。
箕潁千年の後、唯君のみ古風を得たり。

位留丹陛上。身入白雲中。
位は丹陛の上に留まり、身は白雲の中に入る。

躁靜心相背。高低跡不同。
躁靜心相背き、高低跡同じからず。

籠雞與梁燕。不信有冥鴻。
籠雞と梁燕と、信ぜず冥鴻有るを。

【字解】〔一〕平泉　前の詩に見ゆ。〔二〕箕潁　高士傳に、許由聞堯致天下、而讓焉、乃退而遁於中嶽、潁水之陽、箕山之下とある。〔三〕丹陛　朱塗の殿階。〔四〕梁燕　梁上に巣くふ燕で、小人に喩ふ。〔五〕冥鴻　高く天上に飛ぶ雁。高士に喩ふ。

【題義】平泉の韋徵君（學行ありて詔書の徵召を蒙つた者を尊んで徵君といふ）に書き贈つた詩である。韋徵君とは韋楚を いふ。白樂天の作に薦韋楚狀といふ文がある。また全唐詩話に「李德裕の平泉莊は洛を去ること三十里。東南は卽ち徵士韋楚拾遺（拾遺は官名）の別墅なり。楚老は風雅高致あり、雅より山水を好む。德裕相たりし時白衣を以て諫署に擢んづ。後平泉に歸り門に造りて之を訪へば、楚老走りて山谷に避く。李詩あり云く、昔日銜黃紙。余慙在鳳池。今來招隱士。恨不見瓊枝と。その品格の高逸なる以て想見すべし」とある。

【詩意】君は千年の後に出で、古の許由の遺風を傳へた高士で、位は拾遺であつて身は山中に隱れ、心は躁急に背いて恬靜であり、行は世俗と違つて高尚である。世の籠雞や梁燕にも比すべき俗人は、君の如き高士のあることを知らない。

酬皇甫郎中對新菊花見憶

皇甫郎中が新菊花に對して憶はるるに酬ゆ

愛菊高人吟逸韻。
菊を愛する高人は逸韻を吟じ、

悲秋病客感衰懷。
秋を悲む病客は衰懷を感ず。

黃花助興方攜酒。
黃花は興を助けて方に酒を攜へ、

紅葉添愁正滿階。
紅葉は愁を添へて正に階に滿つ。

居士葷腥今已斷。
居士は葷腥今已に斷ち、

仙郎杯杓爲誰排。
仙郎は杯杓誰が爲にか排する。

愧君相憶東籬下。
愧君が東籬の下に相憶ふを愧ぢ、

擬廢重陽一日齋。
擬廢重陽一日の齋を廢せんと擬す。

【字解】〔一〕高人　高尚な人。皇甫郎中を指す。逸韻はすぐれた詩。〔二〕病客　樂天自ら謂ふ。〔三〕居士　樂天自ら謂ふ。葷腥の葷は蔬菜の辛烈なるもの、腥は肉。佛家之を食ふを戒む。〔四〕仙郎　皇甫郎中を指す。〔五〕東籬　陶淵明の詩に、采菊東籬下、悠然見南山とある。〔六〕重陽　九月九日をいふ。齋は齋戒。

【題義】皇甫湜（郎中は官名）が菊花を看て樂天を憶うた詩に酬いたのである。

【詩意】菊を愛する高士たる君は、すぐれた詩を吟じてゐる。病客たる我は秋を悲み老衰を感じてゐる。君は新菊の花の興を助くるに因つて酒を攜へ、我は階に滿つる紅葉を見て愁を增す。我は居士と

して輩腥を斷つてゐるが、君は誰の爲に杯杓を用意してゐるのであるか。折角君が東籬の下に我を憶ふの辱きに感じ、重陽一日の齋を廢して君と一酌を俱にしようかと思ふ。

夜宴醉後留獻裴侍中

九燭臺前十二姝。
主人留醉任歡娛。
翩翻舞袖雙飛蝶。
宛轉歌聲一索珠。
坐久欲醒還酩酊。
夜深初散又踟躕。
南山賓客東山妓。
此會人間曾有無。

夜宴醉後、留めて裴侍中に獻ず

九燭臺前十二の姝、
主人留め醉はしめて歡娛するに任す。
翩翻たる舞袖雙飛の蝶、
宛轉たる歌聲一索の珠。
坐すること久しく醒めんと欲して還た酩酊し、
夜深け初めて散せんとして又た踟躕す。
南山の賓客東山の妓、
此會人間曾て有りや無や。

【題義】夜宴して醉後に裴侍中（裴度なり）に留め獻じた詩である。

【詩意】九個の燭臺の前に十二人の美妓を竝べ、主人は客を留め肆に歡娛せしめる。舞の袖はひらひらとして雙び飛ぶ蝶の如く、流暢な歌の聲は珠を貫いた索のやうである。一旦醒めかけた酒に更に醉ひ、夜が深けて退散せんとしては又尻を落著ける。南山の客と東山の妓との今夜の如き盛會は、嘗て此世にあつたであらうか。

【字解】【一】姝　美女。【二】主人　裴侍中を指す。【三】宛轉　歌聲の流暢なる貌。【四】東山妓　東山は晉の謝安の妓を攜へて遊宴せし處。【五】人間　世間。

和韋庶子遠坊赴宴未夜先歸之作。兼呈裴員外

韋庶子が遠坊に宴に赴き未だ夜ならずして先に歸るの作に和し、兼ねて裴員外に呈す　員外亦た先に逃がれ歸るを愛しむ。

促席留歡日未曛。
遠坊歸思已紛紛。
無妨按轡行乘月。
何必逃杯走似雲。
銀燭忍抛楊柳曲。
金鞍潛送石榴裙。
到時常晚歸時早。
笑樂三分校一分。

席を促け留歡して日未だ曛れず、
遠坊の歸思已に紛紛。
妨ぐる無し轡を按じ行くゆく月に乘ずるを、
何ぞ必ずしも杯を逃れて走ること雲に似ん。
銀燭忍んで抛つ楊柳の曲、
金鞍潛に送る石榴の裙。
到る時は常に晚くして歸る時は早し、
笑樂三分校一分。

先逃歸。

【字解】【一】遠坊　遠方の街。【二】紛紛　むらむらと起る貌。【三】按轡　手綱を持つ。【四】楊柳曲　楊柳枝の歌曲。【五】石榴裙　美妓の服する所の緋色の裳。

【題義】韋庶子（庶子は官名）の「遠方の街の宴に赴き、まだ夜に入らざるに先づて歸宅した」といふ題の詩に和し、兼ねて裴員外（員外は官名）に呈した詩である。

【詩意】君は席を接して獻宴し、まだ日は暮れなかつたが、歸思がむらむらと起つた。手綱を執つて馬上に月を賞しつつ歸るのも亦一興であらうが、杯を逃れて雲のやうに走り去るにも及ぶまい。然るに銀燭の下の楊柳の曲を無碍に棄て去り、窃に美妓に送られ金鞍に跨つて歸つた。來るのが晩くて歸るのが早いから、つまり三分の一の笑樂を得たに過ぎない。

集賢池答侍中問

集賢池にて侍中の問に答ふ

主人晩入皇城宿。　主人晩に皇城に入りて宿す、
問客徘徊何所須。　客に問ふ徘徊して何の須つ所ぞと。
池月幸閒無用處。　池月幸に閒にして用ふる處なし、
今宵能借客遊無。　今宵能く客に借して遊ばしむるや無や。

【題義】集賢（前の代に林園に戲贈の自注を見よ）の池の邊で侍中（裴度）の問に答へた詩である。

【詩意】主人は夕方皇城に入つて宿するので、我に問うた、「君は池邊に徘徊してゐるが何の用があるのだ」と。我因つて之に答へた。「君の池館は月が良いのに君が不在になるとすれば、甚だ惜いものだから、一晩僕に貸してはくれまいか」と。

【字解】〔一〕主人　裴侍中を指す。〔二〕客　樂天を指す。

楊柳枝二十韻

楊柳枝。洛下新聲也。洛之小妓有二善歌レ之者一。詞聲音韻。聽可レ動レ人。故賦レ之。

楊柳枝二十韻　楊柳枝は洛下の新聲なり。詞聲音韻、聽けば人を動かすべし。故に之を賦す。

小妓攜桃葉。新歌蹋柳枝。
粧成剪レ燭後。醉起拂レ衫時。
繡履嬌行緩。花筵笑上遲。
身輕委迴雪。羅薄透凝脂。
笙引簧頻煖。箏催柱數移。
樂童翻怨調。才子與妍詞。
便想人如樹。先將髮比絲。
風條搖兩帶。煙葉貼雙眉。
口動櫻桃破。鬟低翡翠垂。
枝柔腰嫋娜。荑嫩手葳蕤。

小妓桃葉を攜へ、新歌柳枝を蹋む。
粧ひ成る燭を剪る後、醉ひて起つ衫を拂ふ時。
繡履嬌び行くこと緩に、花筵笑ひて上ること遲し。
身輕くして廻雪に委ね、羅薄くして凝脂を透す。
笙引きて簧頻に煖かに、箏催して柱數ば移る。
樂童怨調を翻へし、才子妍詞を與ふ。
便ち想ふ人は樹の如く、先づ髮を將て絲に比す。
風條兩帶を搖かし、煙葉雙眉に貼す。
口動きて櫻桃破れ、鬟低れて翡翠垂る。
枝は柔かなり腰嫋娜、荑は嫩かなり手葳蕤。

〔一〕啼鶴晴呼侶。哀猿夜叫兒。
玉敲音歴歴。珠貫字纍纍。
袖爲收聲點。釵因赴節遺。
重重徧頭別。一一拍心知。
塞北愁攀折。江南苦別離。
〔二〕黄遮金谷岸。綠映杏園池。
春惜芳華好。秋憐顔色衰。
取來歌裏唱。勝向笛中吹。
曲罷那能別。情多不自持。
〔三〕纏頭無別物。一首斷腸詩。

【字解】〔一〕羅。薄絹。凝脂は美妓の肌。〔二〕黛。眉墨。兩の眉。長恨歌に、芙蓉如レ面柳如レ眉とある。〔七〕櫻桃。さくらんぼ。〔八〕翠翠。玉の名。〔九〕嫩柳。しなやかな柳。〔一〇〕黄。つばな。始生の茅。詩經に手如二柔荑一とある。蒍蒍は動搖する樹。柳の如きなり。〔四〕比レ絲。絲は柳の枝なり。〔六〕啼鶯。鳴く鶯。〔一二〕金谷。地名。洛陽の西に在り。晉の石崇の園の在りし處。〔一三〕杏園。長安の西に在り。芙蓉園と、曲江の宜春下苑の地。〔一四〕纏頭。祝儀として贈る物。

【題義】楊柳枝は樂曲の名である。

【詩意】小妓が手に桃葉を攜へ楊柳枝の歌に合せて舞を舞ふ。日暮れて燭既に點ぜられた時微醺を帶びて起つて衫を拂ひ、繡履を穿ちて緩かに嬌行し、遲遲として花筵に上る。身の輕きことは廻雪の如く、羅衣を透して玉肌が見える。笙を吹き箏を彈じ、樂童は怨調を弄し、才子は麗詞を與へて景氣を附け、舞妓は柳樹の風に舞ふが如く、綠の黑髮は柳の絲にも比ぶべく、兩帶を搖かすことは風中の條の如く、二つの眉は柳の葉を貼つたやうで、口を開けば櫻桃の破るるが如く、聲を低るれば翡翠の垂れたやうで、腰は柳の枝のしなやかなるが如く、さす手引く手は柔荑のやうで、聲は鳴鶯の侶を呼ぶが如く、哀猿の夜叫ぶに似て、玉を敲き珠を貫くが如く、聲を收むるに因りて袖を點じ拍子を取る爲に釵を遺す。塞北に攀折を愁ふるの情、江南に離別（人と別るる時柳の枝を折つて贈るを常とす）を悲むの情、嫩芽の金谷を遮り、綠葉の杏園に映ずる、春は春華を惜み、秋は衰顔を憐むなど、一一取り來りて歌中に唱へ、笛中に吹くに勝ること萬萬。人をして其眞況實情を感知せしめる。曲罷むも別れ去るに忍びず、情感自ら禁ずる能はず。この一首の斷腸の詩を賦し聊か以て纏頭となす。

答皇甫十郎中秋深酒熟見憶

皇甫十郎中が秋深け酒熟せしとき憶はるるに答ふ

煙景冷蒼茫。秋深夜夜霜。　煙景冷かにして蒼茫、秋深し夜夜の霜。

爲思池上酌。先覺甕頭香。
未暇傾巾漉。還應染指嘗。
醍醐慙氣味。琥珀讓晶光。
若許陪歌席。須教散道場。
月終齋戒畢。猶及菊花黃。

【字解】〔一〕蒼茫　あなあなとしてひろきこと。樂天の詩に寒銷春蒼茫ともある。〔二〕甕頭　酒瓶のほとり。〔三〕傾巾漉　陶淵明は巾で酒を漉したといふ。杜甫の詩に、謝氏尋山展、陶家漉酒巾とある。〔四〕醍醐　最上の飲料。〔五〕琥珀　飴色の鏡物の名。〔六〕道場　佛法を修する處。

【題義】皇甫十郎中（郎中は官名。十は輩行。皇甫朗之であらう）が秋深けて酒の成る時、樂天を憶うたといふ詩に答へたのである。

【詩意】あたりの景色が蒼茫として、秋も深け霜も繁くなつた。君は池の邊で僕と俱に酒を飲みたいと思ふので、先づ酒瓶の香氣を感ずるのであらう。まだ巾を脱いで漉すほどにはなるまいが、指を染めて嘗めて看るくらゐにはなつたらしい。醍醐の味も其酒に比ぶれば遙に劣り、琥珀の光澤も其酒の色には及ぶまい。若し歌席に陪することを許さるるならば、道場の散ずるを待つて俱に一醉しよう。今月の末には齋戒も終るが、其頃にはまだ菊の花も殘つてゐるだらうから、それを看に一酌致さう。

池上の酌を思ふが爲に、先づ甕頭の香しきを覺ゆ。
未だ巾を傾けて漉すに暇あらざるも、還た應に指を染めて嘗むべし。
醍醐も氣味を慙ぢ、琥珀も晶光を讓る。
若し歌席に陪するを許さるれば、須らく道場を散ぜしむべし。
月終に齋戒畢らば、猶ほ菊花の黃なるに及ばん。

老去

老去愧妻兒。冬來有勸詞。
煖寒從飲酒。衝冷少吟詩。
戰勝心還壯。齋勤體校羸。
由來世間法。損益合相隨。

【題義】老況を詠じた詩である。

【詩意】老いて冬を迎へ妻子から彼此と勸說を受け、寒を凌ぐ爲に縱に酒を飲み、冷を冒して少しく詩を吟じ、心外物と戰つて之に勝ち、意氣頗る旺に、齋戒を勤行して身體少しく勞した。由來世間の常法として、益あれば損あり損あれば益あり、損と益とは互に相隨從するものである。

老い去つて妻兒に愧づ、冬來りて勸詞有り。
寒を煖めて從に酒を飲み、冷を衝きて少しく詩を吟ず。
戰勝ちて心還た壯に、齋勤めて體校羸る。
由來世間の法、損益合に相隨ふべし。

送宗實上人遊江南

忽辭洛下緣何事。
擬向江南住幾時。
每過渡頭應問法。

宗實上人の江南に遊ぶを送る

忽ち洛下を辭するは何事にか緣る、
江南に向ひて住せんと擬する幾時ぞ。
渡頭を過ぐる每に應に法を問ふべし、

【字解】〔一〕洛下　洛陽。〔二〕渡頭　わたしば。渡津。〔三〕香嚴　既に能く自ら本性を覺り、又能く衆生を濟度する者をいふ。

無妨菩薩是船師。　妨ぐる無し菩薩は是れ船師。

【題義】宗實上人の江南に遊ぶのを送る詩である。

【詩意】君は何故か忽ち洛陽を去つて江南に往くさうだが、いつ頃江南に定住することになるであらう。途中で渡場を過ぐる毎に法を問ふがよい。菩薩は衆生を濟度する船頭であるから、船頭に法を問ふのに敢て不思議はない。

和同州楊侍郎誇柘枝見寄

同州の楊侍郎が柘枝を誇りて寄せられしに和す

細吟馮翊使君詩。　馮翊使君の詩を細吟して、

憶作餘杭太守時。　餘杭の太守と作りし時を憶ふ。

君有一般輸我事。　君は一般我に輸くる事有り、

柘枝看校十年遲。　柘枝をば看ること校十年遲し。

【題義】同州刺史楊汝士（汝士、字は慕巢。太和三年工部侍郎となり、八年出されて同州刺史となる）が柘枝の舞を誇つた詩を寄せたのに和したのである。

【詩意】君の柘枝の舞を誇る詩を細吟するにつけて、自分が杭州刺史たりし時屢〻この舞を觀たことを憶ひ出した（後集巻五に柘枝妓と題する詩あり）。君は柘枝の舞を觀たことを得意さうに誇つてゐるが、何事でも一般に俺よりも劣つてゐる。現に此舞を看るのも俺よりは十年後れてゐるではないか。

【字解】〔一〕同州　漢の左馮翊の地、西魏の時改めて同州となす。柘枝は舞の名。〔二〕馮翊使君　同州刺史楊侍郎を指す。〔三〕餘杭太守　杭州刺史。樂天嘗て杭州刺史たり。

冬初酒熟二首

霜繁脆庭柳。風利剪池荷。　霜繁くして庭柳脆く、風利くして池荷を剪る。

月色曉彌苦。鳥聲寒更多。　月色は曉に彌よ苦え、鳥聲は寒くして更に多し。

秋懷久寥落。冬計又如何。　秋懷久しく寥落、冬計又如何。

一甕新醅酒。萍浮春水波。　一甕新醅の酒、萍は浮ぶ春水の波。

【字解】〔一〕池荷　池の蓮の葉。〔二〕秋懷　秋の心。〔三〕新醅　新に熟する。〔四〕萍　うきぐさ。ここは酒滓の浮べるものをいふ。

【題義】冬の初に酒の新に成つたことを述べた詩である。

【詩意】今や霜が繁くて庭の柳の枝も枯れ、風が鋭いので蓮の葉も剪られた。月は曉に至つて彌〻冴えわたり、鳥の聲は寒に際して殊に多い。悲秋の情は既に久しく寥落し、冬を過す計畫もまだ立たない。幸に瓶の中の酒が新に熟して、滓が春水の上の萍のやうに浮んでゐる。

〔一〕

酒熟無來客。因成獨酌謠。
人間老黃綺。地上散松喬。
忽忽醒還醉。悠悠暮復朝。
殘年多少在。盡付此中銷。

【字解】〔一〕人間　世間。黃綺は商山四皓中の人、夏黃公及び綺里季。〔二〕散松喬　散は閒散なり。松喬は赤松子と王子喬、並に仙人の名。〔三〕忽忽　茫然として得失を忘るる貌。司馬遷の文に、居則忽忽若レ有レ所レ亡とある。〔四〕悠悠　閒暇の貌。〔五〕殘年　餘年。多少は、いくらか。若干。

【詩意】酒は熟しても訪ひ來る人もないので、ひとりで飲んでゐる。何の屈托もない閒散な身は恰も夏黃公か綺里季か、赤松子か王子喬のやうである。萬事を忘れて醒めては醉ひ、爲すこともなく朝晩を送つてゐる。まだいくらか餘命があるが、盡く此生活狀態で過さうと思つてゐる。

送姚杭州赴任。因思舊游二首

姚杭州の任に赴くを送り、因つて舊游を思ふ　二首

與君細話杭州事。
君が與に細に話る杭州の事、

〔一〕

【字解】〔一〕等閒　なほざりにする。おろそかにする。〔二〕閭里　邑民なり。〔三〕樓臺　高遠の貌。〔四〕依稀　かすかなる貌。〔五〕詩人　純杭州を指して言ふ。〔六〕一盞　一杯なり。

爲レ我留レ心莫等閒。
我が爲に心を留めて等閒にする莫れ。
閭里固宜勤撫恤。
閭里固より宜しく撫恤を勤むべし、
樓臺亦要數躋攀。
樓臺亦要す數ば躋攀せんことを。
笙歌縹緲虛空裏。
笙歌縹渺たり虛空の裏、
風月依稀夢想間。
風月依稀たり夢想の間。
且喜詩人重管領。
且詩人の重ねて管領するを喜び、
遙飛一盞賀江山。
遙に一盞を飛ばして江山を賀す。

【題義】姚氏の杭州刺史となつて赴任するを送り、因つて自己の杭州刺史たりし時の舊遊を思うた詩である。

【詩意】君が爲に杭州の事を詳細に話してやるから、よく心を留めて聽き給へ。苟くも刺史たる以上は鄕邑を治めることを勤むべきは無論であるが、杭州には多くの樓臺があるから屢〻登攀して遊賞するがよい。虛空の裏から漏れ聞ゆる笙歌の聲を聞き、夢想の間に依稀たる風月を見るのは、實に快心の極である。自分も君のやうな詩人が重ねて杭州を統治するのを喜び、遙に祝杯を擧げて江山の爲に賀する次第である。

〔一〕

渺渺錢塘路幾千。
想君到後事依然。
靜逢竺寺猨偸橘。
閒看蘇家女採蓮。
故妓數人憑問訊。
新詩兩首倩留傳。
舍人雖健無多興。
老校當時八九年。

杭人至今呼余爲白舍人。

〔二〕

渺渺たる錢塘路幾千、
想ふ君到りて後事依然たるを。
靜に竺寺に猨の橘を偸むに逢ひ、
閒に蘇家の女の蓮を採るを看ん。
故妓數人憑りて問訊し、
新詩兩首倩ひて留傳せん。
舍人健なりと雖も多興無し、
老ゆること當時に校ぶれば八九年。

【詩意】君が此地を去つて幾千里を距つる杭州に往かれたならば、想ふに君の見る所逢ふ所の光景は、嘗て余の杭州に在りし時と同じく、天竺寺の靜な境内で猨が橘を偸み去るのを見たり、蘇家の美女が舟を泛べて蓮を採るのを看るであらう。君に憑んで以前の妓女の樣子を尋ね、また君を煩はして此詩を杭州に留傳しよう。自分は今以て健在ではあるが、昔のやうな興はない。杭州にゐた頃から親れば八九年老いたわけだから。

【字解】〔一〕渺渺　遙なる貌。錢塘は杭州。〔二〕依然　もとのまなること。〔三〕竺寺　杭州の天竺寺。〔四〕蘇家　蘇氏の家。蘇小小は錢塘の妓なり。〔五〕故妓　昔日の妓。問訊は近況を問ふ。〔六〕新詩兩首　この二首の詩を指す。〔七〕舍人　中書舍人。樂天嘗て中書舍人たり。因つて自ら謂ふ。

寄李相公

漸老只謀歡。雖貧不要官。
唯求造化力。試爲駐春看。

李相公に寄す

漸く老いて只歡を謀り、貧しと雖も官を要めず。
唯造化の力を求め、試みに春を駐めて看んことを爲す。

【題義】宰相李宗閔に寄せた詩である。

【詩意】年老いたので只歡樂を得んことを謀り、たとひ貧なりとも好官にありつきたいなどとは願はない。ただ造化の力を借りて、永く春景を駐めて置きたいと思ふのみである。

冬日平泉路晚歸

山路難行日易斜。
煙村霜樹欲棲鴉。
夜歸不到應閒事。
熱飲三杯卽是家。

冬日平泉の路より晚に歸る

山路行き難く日斜なり易し、
煙村の霜樹鴉を棲ましめんと欲す。
夜歸りて到らず應に閒事なるべし、
熱飲三杯卽ち是れ家。

【字解】〔一〕平泉　洛陽の南の地名。唐の李德裕の別墅あり、德裕に平泉樹石記と題する文あり。〔二〕閒事　緊要ならざる事。どうでもよい事。〔三〕熱飲　熱燗の酒。

【題義】冬、平泉から日暮に家に歸る時の詩である。

【詩意】山路が險しくて進み難いので日も早や西に傾き、煙棚引く村里の樹には鴉が宿らうとしてゐる。夜家路を指して歸り、仲仲歸り著けなくとも格別問題ではない。三杯の熱燗にでもありつければ、吾が家に歸つたと同然である。

利仁北街作

利仁北街の作

草色斑斑春雨晴。　草色斑斑として春雨晴る、
利仁坊北面西行。　利仁坊北西に面して行く。
踟躕立馬緣何事。　踟躕して馬を立つるは何事にか緣る、
認得張家歌吹聲。　認め得たり張家歌吹の聲。

【字解】〔一〕利仁　洛陽の街の名。〔二〕斑斑　まだらに生えてゐる貌。〔三〕坊北　街北といふに同じ。〔四〕踟躕　たちどまる。〔五〕張家　張氏の家。

【題義】利仁街の北を過ぎて作つた詩である。

【詩意】春草が斑に生えて雨の晴れた時、利仁坊の北を西に向つて進み往き、ふと馬を駐めて立ち止つたのは何故ぞといふに、張氏の家から歌吹の聲の漏れるのを聞いたからである。

洛陽堰間行

洛陽堰間行

洛陽堰上新晴日。　洛陽堰上新晴の日、
長夏門前欲暮春。　長夏門前暮れんと欲する春。
遇酒卽沽逢樹歇。　酒に遇ひては卽ち沽ひ樹に逢ひては歇ふ、
七年此地作閒人。　七年此地に閒人と作る。

【字解】〔一〕長夏門　門の名。

【題義】洛陽堰（堰の名。後集巻三、洛陽春、贈劉李二賓客」と題する詩に見ゆ）のあたりを閒行した詩である。

【詩意】洛陽堰の上には日晴れ、長夏門の前には春が暮れんとしてゐる。自分は七年間此地に閒居してゐるので、酒に遇へば買ひ樹に逢へば憩うて毎春ここに閒遊する。

過永寧

過永寧

村杏野桃繁似雪。　村杏野桃繁くして雪に似たり、
行人不醉爲誰開。　行人醉はず誰が爲にか開く。
賴逢山縣盧明府。　賴に山縣の盧明府に逢ひ、
引我花前勸一杯。　我を引きて花前に一杯を勸む。

【字解】〔一〕山縣　山中の縣。永寧縣を指して言ふ。盧明府の盧は姓、明府は縣令の稱。

【題義】永寧（縣の名。明清には河南省河南府に屬す）を過ぐる詩である。

【詩意】路傍の桃や杏の花が雪よりも白く咲き亂れてゐる。行人が若し此花を觀て一醉せぬならば花の本意に背くであらう。幸に永寧縣令盧氏の、我を誘うて花前に一杯を勸むるに逢うた。

往年稠桑曾喪白馬。題詩廳壁。今來尚存。又復感懷。更題絶句

往年稠桑にて曾て白馬を喪ひ、詩を廳壁に題す。今來れば尚ほ存せり。又復感懷し、更に絶句を題す

路傍埋骨蒿草合。　路傍に骨を埋めて蒿草合し、
壁上題詩塵蘚生。　壁上に詩を題して塵蘚生ず。
馬死七年猶悵望。　馬死して七年なるも猶ほ悵望す、
自知無乃太多情。　自ら知る無乃太だ多情なるを。

【題義】先年稠桑驛で乘用の白馬が斃れた時、驚傷のあまり、詩を作つて役所の壁に題して置いた。（後集巻八、有二小白馬一乗駁多時、奉レ使東行至二稠桑驛一、澹然而斃、足レ可二驚傷一、不レ能レ忘レ情、題二二十韻一及び出使在レ途、所レ騎馬死、改乘二肩輿一、將レ歸二長安一、偶詠二旅懷一、寄二太原李相公一を參照せよ）今七年ぶりで來て見た所が、まだ其儘に存してゐたので、更に感懷を起して此絶句を題したのである。

【詩意】嘗て馬の屍を埋めた處を今來て見れば蒿が生え雜り、詩を題した壁には塵や蘚が積つてゐる。自分ながら多情に過ぎるやうにも思はれるが、之を見ては七年を歴た今日でも猶ほ悵傷せざるを得ない。

【字解】〔一〕蒿草　よもぎ。草の名。〔二〕蘚　ちり、こけ。

羅敷水

野店東頭花落處。　野店の東頭花の落つる處、
一條流水號羅敷。　一條の流水羅敷と號す。
芳魂艶骨知何在。　芳魂艶骨知んぬ何にか在る、
春草茫茫墓亦無。　春草茫茫として墓も亦無し。

【題義】羅敷水は川の名である。後集巻八に過二敷水一と題する詩がある。

【詩意】野店の東の花の落つる處に一筋の川が流れてゐる。此川を名づけて羅敷といふ。羅敷とは昔の美人の名であるが、あたりを見ても芳魂艶骨は何處にも見えず、ただ春草が茫茫と雜生してゐるのみで墓すらない。

【字解】〔一〕東頭　東邊なり。〔二〕知何在　どこに在るか知らないといふ意。知は不知の意である。津阪東陽の夜航詩話を見よ。

路逢青州王大夫赴鎮。立馬贈別

路にて青州の王大夫が鎮に赴くに逢ひ、馬を立てて贈別す

大旆擁金羈。書生得者稀。　大旆金羈を擁するは、書生得る者稀なり。
何勞問官職。豈不見光輝。　何ぞ勞せん官職を問ふを、豈光輝を見ざらんや。
赫赫人爭看。翩翩馬欲飛。　赫赫として人爭ひ看る、翩翩として馬飛ばんと欲す。
不期前歲尹。駐節語依依。　期せず前歲の尹、節を駐めて語ること依依たらんとは。

【字解】【一】大旆　觀察使の立てる旗。金羈は黃金のくつわ。【二】翩翩　進むこと速かなる貌。【三】駐節　節とは觀察使の大子より賜はる符節。依依は戀戀たる貌。

前年春。予爲二河南尹一。王爲二少尹一。

【題義】途中で王大夫（王は姓）が觀察使として青州に赴任するのに逢ひ、馬を立てて此詩を贈り別を告げたといふ意。

【詩意】一書生の身を以て觀察使に任ぜられることは古來稀である。今更君の官職を問ふまでもなく、一目君の光輝を見さへすれば觀察使たる榮職に任ぜられたことがわかる。されば道行く人も赫赫たる威風を仰ぎ、君の馬は翩翩として勢よく去らんとする。前年の河南少尹たりし君が、一躍して觀察使となり、戀戀として別を告げて去らうとは、思も掛けぬ榮進と謂はねばならぬ。

和楊同州寒食乾坑會後。聞楊工部欲到。知予與工部有宿酲。

楊同州が寒食に乾坑に會して後、楊工部の到らんと欲せしを聞き、予と工部と宿酲ありしを知るに和す

夜飲歸常晚。朝眠起更遲。　夜飲みて歸ること常に晩く、朝に眠りて起くること更に遲し。
舉頭中酒後。引手索茶時。　頭を擧ぐ酒に中る後、手を引く茶を索むる時。
拂枕青長袖。攲簪白接䍦。　枕を拂ふ青長袖、簪を攲つ白接䍦。
宿酲無興味。先是肺神知。　宿酲は興味無し、是より先肺神知る。

【字解】【一】中酒　酒に醉ふこと。杜牧の詩に、中酒落花前とある。【二】青長袖　召使の女。婢を稱して青衣といふ。【三】白接䍦　帽なり。晉書山簡傳に、簡出遊輒、每醉二高陽池一、時童兒歌曰、時時能騎レ馬、倒二著白接䍦一とあり。杜甫の詩に、曾騎白帽稜とある。

【題義】同州刺史楊汝士（前の和二同州楊侍郎誇二柘枝一見寄を見よ）が寒食（冬至から百五日目をいふ）に乾坑（地名。唐書德宗紀に興元元年十二月、渾瑊及李懷光戰二於乾坑一とある）に集會した後、楊虞卿（虞卿は太和八年に工部侍郎になつた）も其會に到らんと欲してゐたことを聞き、當時樂天と虞卿と宿酲の爲、虞卿は竟に其會に列しなかつたのだと知つた由の詩を作つたのに、樂天が和したのである。

【詩意】夜まで飲み續けていつも歸りが遲くなり、寢坊して朝は仲仲起きない。醉後に頭を擧げ手を延して茶を索め、侍婢に枕を拂はせ、帽子をかぶつたまま寢込んでゐる。宿酲と來ては乾坑の會に列してもつまらないことは、わかりきつてゐるから、つひ行かなかつた。

和劉汝州酬侍中見寄長句。因書集賢坊勝事。戲而問之

劉汝州が侍中の長句を寄せられしに酬ゆるに和し、因つて集賢坊の勝事を書し、戲れて之に問ふ

洛川汝海封畿接。　洛川汝海封畿接し、
履道集賢來往頻。　履道集賢來往頻なり。
一復時程雖不遠。　一復時程遠からずと雖も、
百餘步地更相親。　百餘步の地更に相親む。
朱門陪宴多投轄。　朱門宴に陪して多く轄を投じ、
青眼留歡任吐茵。　青眼留まり歡して茵に吐くに任す。
聞道郡齋還有酒。　聞道らく郡齋還た酒有りと、

【字解】〔一〕洛川　洛陽。樂天の居る處。汝海は劉禹錫の居る處。封畿は境界なり。〔二〕履道　洛陽の里の名。樂天の宅の在る處。〔三〕朱門　豪富の家。貴顯の家を指して言ふ。投轄は客を引留めて歸さぬこと。漢書に陳遵が賓客を會すれば門を閉ぢ車轄を取つて井中に投じ、歸り去ることの出來ぬやうにしたとある。〔四〕青眼　喜ぶ時の目つき。晉の阮籍は禮俗の士を見れば白眼を以て之に對し、嵇康が酒を携らし琴を抱いて來れば青眼を以て迎へたといふ。吐茵は漢書丙吉傳に、馭吏

風前月下對何人。　風前月下何人にか對する。
請酒、會從吉田、醉嘔丞相車上云云とある故事を用ふ。〔五〕郡齋　汝州刺史の役所。

【題義】汝州刺史劉禹錫が侍中（裴度なり、後集巻三に、裴侍中晉公以集賢林亭即事詩二十六韻見贈云云と題する詩あり）から長詩を寄せられたのに酬いた詩に和し、兼ねて集賢坊（洛陽の街名）の快事を書いて禹錫に戲れ問うたといふ意。

【詩意】僕の居る洛陽と君の居る汝州とは境だけは接してゐる。僕は履道里に住み裴侍中は集賢坊に住み、常に往來して樂を俱にしてゐる。洛と汝とは往復僅に一宿程ではあるが、履道と集賢との相距ること百三十步なるの近密なるには及ばない。だから僕は屢侍中の盛宴に侍して歡待を受け、僕が嘔吐して茵を汙しても笑つて見逃してくれる。聞けば汝州の郡齋にも美酒はあるさうだが、清風明月の下に歡醉を俱にする良友があるまい。氣の毒なことだ。

池上二絶

山僧對棊坐。局上竹陰清。　山僧棊に對して坐す、局上竹陰清し。
映竹無人見。時聞下子聲。　竹に映じて人の見る無し、時に聞く子を下す聲。

【題義】池邊の實景を寫した詩である。

【詩意】山寺の僧が碁盤に向つて坐すれば、碁盤の上に竹の葉陰が清らかにさし、竹に遮られて見る人もなく、時時碁石を下す聲がパチンパチンと響くのみである。

〔二〕

小娃撐小艇。偸採白蓮廻。
不解藏蹤跡。浮萍一道開。

【字解】〔一〕小娃　少女。〔二〕浮萍　うきぐさ。一道は一筋の道。

【詩意】少女が小舟に棹さし偸に白蓮の花を折り採つて歸る。其舟の通つたあとかたを藏すことを知らず、その儘にして置くので、浮萍が一筋開いて道をなし、舟がここを通りましたと謂はぬばかりになつてゐる。

白羽扇

素是自然色。圓因裁製功。
颯如松起籟。飄似鶴翻空。
盛夏不銷雪。終年無盡風。

白羽扇

素は是れ自然の色、圓は裁製の功に因る。
颯として松の籟を起すが如く、飄として鶴の空に翻るに似たり。
盛夏にも銷えざる雪、終年盡くること無き風。

引秋生手裏。藏月入懷中。
麈尾斑非匹。蒲葵陋不同。
何人稱相對。清瘦白鬚翁。

秋を引いて手裏に生じ、月を藏して懷中に入る。
麈尾は斑にして匹に非ず、蒲葵は陋にして同じからず。
何人か相對するに稱ふ、清瘦白鬚の翁。

【字解】〔一〕素　白い色。〔二〕裁製　つくりかた。〔三〕手裏　手の中。〔四〕麈尾　毛で作つた拂子。匹は匹儔。〔五〕蒲葵　常綠喬木の名。葉は掌狀分裂をなし、甚だ棧櫚に似たり。以て扇となすべし。俗に芭蕉扇と稱す。〔六〕清瘦白鬚翁　瘦せた白鬚の老人。樂天自ら謂ふ。

【題義】白い羽で作つた團扇を詠じた詩である。

【詩意】この團扇の白いのは染めたのではなくて自然の色で、その圓いのは製法の然らしむる所である。松風のやうな涼しい風を起し、鶴の空中に翻るやうにヒラヒラとする。夏にも銷えぬ雪かと怪まれ、年中盡くる所なき風を含んでゐる。手に握つた儘で秋風を引き入れ、懷に收むれば滿月を抱いたやうである。かの拂子などは斑があつて到底比較にはならず、蒲葵扇は陋しくて見劣りがする。この高潔圓滿な團扇を持つのに相應しい人物はといはば、この瘦せた白鬚の老人ぐらゐのものであらう。

五月齋戒罷宴徹樂聞韋賓客皇甫郎中飲會亦稀又知欲攜酒饌出齋先以長句呈謝

五月齋戒し宴を罷め樂を徹す、韋賓客・皇甫郎中も飲會亦稀なるを聞く、又酒饌を

撫へ齋を出さんと欲するを知り、先づ長句を以て呈謝す

妓房匣鏡滿紅埃。　妓房の匣鏡紅埃瀰ち、
酒庫封瓶生綠苔。　酒庫の封瓶綠苔を生ず。
居士爾時緣護戒。　居士は爾時戒を護るに緣る、
車公何事亦停杯。　車公何事ぞ亦杯を停む。
散齋香火今朝散。　散齋の香火今朝散じ、
開素盤筵後日開。　開素の盤筵後日に開く。
隨意往還君莫怪。　意に隨ひて往還す君怪む莫れ、
坐禪僧去飲徒來。　坐禪僧去りて飲徒來る。

両親鄰設酒散。以相援熱、名曰開齋。於理合。曰開素。とある。樂天の詩に、月終齋滿離開素とある。盤筵は酒散なり。【七】飲徒酒飲み仲間。

【題義】五月に齋戒し酒を罷め音樂を廢して謹慎せる時、韋賓客（賓客は官名）と皇甫郎中（郎中は官名）と、樂天に倣つて飲會すること稀なりと聞きしが、樂天の齋戒を畢るや酒殽を攜へて之に饗せんと欲するを知り、先づ此詩を呈して謝意を表せるなり。

【字解】【一】妓房　妓の居る部屋。匣鏡は鏡奩なり。【二】封瓶　目ばりをした酒瓶。【三】居士　佛を奉する人。樂天自ら謂ふ。爾時は其時。【四】車公　世說に坐無車公、不樂とある。車武子をいふ。ここでは車公を借りて韋賓客・皇甫郎中に比す。【五】散齋　禮記に君子之齋也、專致其精明之德也、故散齋七日以定之、致齋三日以齊之とある。香火は燒きて神明に誓ふなり。【六】開素　野客叢書に、今人茹素開素とある。盤筵は酒殽なり。【七】飲徒

【詩意】妓の部屋の鏡臺は塵に埋もれ、酒庫の目ばりをした瓶には苔が生えてしまつた。これは居士たる僕が當時齋戒中であつたからであるが、君等も僕に同情して酒を禁じてゐたさうで、誠に恐縮に堪へない。いよいよ今朝で齋戒も畢ることになつた所が、君等は又もや酒殽を攜へて僕を饗してくれるさうで、誠に辱い次第である。意に任せて往還するも、坐禪僧が去つて飲仲間が代つて來るまでの事で、敢て怪むには足るまい。

閒園獨賞

因夢得所寄蜂鶴之詠。因成此篇以和之。

閒園獨賞　夢得寄する所の蜂鶴の詠に因み因つて此篇を成し以て之に和す。

午後郊園靜。晴來景物新。　午後郊園靜に、晴れ來りて景物新なり。
雨添山氣色。風借水精神。　雨は山の氣色を添へ、風は水の精神を借す。
永日若爲度。獨遊何所親。　永日若爲してか度る、獨遊何の親む所ぞ。
仙禽狎君子。芳樹倚佳人。　仙禽は君子に狎れ、芳樹は佳人に倚る。
蟻鬬王爭肉。蝸移舍逐身。　蟻鬬ひて王肉を爭ひ、蝸移りて舍身を逐ふ。
蝶雙知伉儷。蜂分見君臣。　蝶雙びて伉儷を知り、蜂分れて君臣を見る。
蠢蠕形雖小。逍遙性卽均。　蠢蠕形小なりと雖も、逍遙性卽ち均し。

不知鵬與鷃相去幾微塵。　知らず鵬と鷃と、相去ること幾微塵ぞ。

【字解】〔一〕永日　ながき日。〔二〕仙禽　鶴をいふ。〔三〕伉儷　夫妻相親むこと。〔四〕蠢蠕　蟲のうごめくこと。〔五〕逍遙　其天性に安んじ、莊子の所謂逍遙遊すること。〔六〕鵬　大鳥の名。鷃は斥鷃、小鳥の名。並に莊子逍遙遊篇に見ゆ。〔七〕微塵　微少なり。

【題義】園中の景物を賞翫する意を述べた詩で、自注にあるやうに劉禹錫（字は夢得）から寄せられた詩に和したのである。

【詩意】午後になれば郊園が物靜で、景色が晴晴としてゐるであらう。雨は山を洗つて色を添へ、風は漣を立てて趣を增してゐる。君は永き日を如何にして過し、獨遊して何と親んでゐるかといへば、鶴が君と相狎れ、花樹は佳人と竝び立ち、蟻が鬪つて王は肉を爭ひ、蝸は其家を攜へて移動し、螺の飛び交ふを見ては夫妻の親睦を知り、蜂の分散を見ては君臣の分を知るであらう。此等の蟲類は形こそ小さいが、各〻其性に安んずることは皆同じである。されば莊子も謂つてゐるやうに、大鵬であらうが斥鷃であらうが殆ど差別はない。萬物皆一なりと謂つてよいのである。

柳を種う　三詠

白頭種松桂。早晚見成林。
不及栽楊柳。明年便有陰。

白頭にして松桂を種ゑなば、早晚林を成すを見ん。
及かず楊柳を栽ゑ、明年便ち陰有らんには。

春風爲催促。副取老人心。　春風催促を爲し、老人の心に副取す。

【字解】〔一〕白頭　しらがあたま。老年の意。〔二〕早晚　いつ。〔三〕副取　そふこと。取は助辭で別に意味なし。

【題義】柳を種ゑることを詠じた詩である。

【詩意】年を取つてから松や桂を植ゑても、いつになつたら林を成すのを見られるだらう。恐らく林を成すまでは生きてゐられまい。それよりは柳を植ゑた方がよい。柳ならば今年栽ゑれば來年は陰を成すほど育つのである。今や春風が柳を栽ゑろと催促顏に吹いてゐる。誠に老人の心に副うた心意氣である。

〔一〕

從君種楊柳。夾水意如何。
準擬三年後。青絲拂綠波。
仍教小樓上。對唱柳枝歌。

君が楊柳を種うるに從ず、水を夾む意如何。
準擬す三年の後、青絲の綠波を拂はんことを。
仍つて小樓の上、對して柳枝の歌を唱へしめん。

【字解】〔一〕準擬　豫期すること。〔二〕青絲　柳の絲。〔三〕柳枝　隋の宮名。唐の張祜の詩に、莫折宮中楊柳枝、當時曾向笛中吹とある。

【詩意】君の意に任せて柳を栽ゑよう。さて流を夾んで栽ゑるのはどういふ譯かとならば、三年の

後に青柳の絲が綠波を拂ふやうになることを期してゐるからである。そして美妓をして小樓の上で柳に對して楊柳枝の曲を歌はせようと思ふ。

〔三〕

更想五年後。千千條麴塵。
路傍深映月。樓上闇藏春。
愁殺閒遊客。聞歌不見人。

〔三〕

更に想ふ五年の後、千千條麴塵ならんと。
路傍深く月に映じ、樓上闇に春を藏す。
愁殺す閒遊の客、歌を聞きて人を見ず。

【字解】〔一〕麴塵　淡黃色をいふ。

【詩意】更に想へば五年の後には千本も枝が垂れて淡黃色の葉を生ずるであらう。そして路傍に立ちては深く月を翳すを見、樓上からは闇に春を收藏するを見るであらう。又閒遊の人をして唯樓上の歌聲を聞くのみで、美妓の姿の見えないのを恨ましむるであらう。

偶吟

好官病免曾三度。
散地歸休已七年。

偶吟

好官は病みて免ずること曾て三度、
散地に歸休すること已に七年。

【字解】〔一〕散地　閒散な地位。

老自退閒非世棄。
貧蒙强健是天憐。
韋荆南去留春服。〔二〕
王侍中來乞酒錢。〔三〕
便得一年生計足。
與君美食復甘眠。

老いて自ら退閒す世の棄つるに非ず、
貧にして强健を蒙るは是れ天憐。
韋荆南は去るとき春服を留め、
王侍中は來りて酒錢を乞ふ。
便ち一年の生計足るを得ば、
君と美食して復た甘眠せん。

【二】韋荆南　荆南の刺史韋氏。春服は春著。
【三】王侍中　侍中王氏。

【題義】偶然身の境遇を詠じた詩である。

【詩意】病の爲に三回、好官を棒にふり、閒地に就いてから既に七年になる。併し年老いたから自ら引退したので世間から棄てられた譯ではなく、貧乏でも身體の丈夫なのは天の惠である。韋荆南は去る時形身に春著をくれ、王侍中は酒錢を貰ひに來た。一年の生計が足りれば、君と旨い物を食つて甘睡しよう。

池上卽事

移牀避日依松竹。

池上卽事

牀を移し日を避けて松竹に依り、

【字解】〔一〕薜蘿　つたかづら。

解帶當風挂薜蘿。　帶を解き風に當りて薜蘿に挂く。
鈿砌池心綠蘋合。　鈿は池心に砌して綠蘋合し、
粉開花面白蓮多。　粉は花面に開きて白蓮多し。
久陰新霽宜絲管。　久陰新に霽れて絲管に宜しく、
苦熱初涼入綺羅。　苦熱初めて涼しくして綺羅に入る。
家醞瓶空人客絶。　家醞瓶空しくして人客絶ゆ、
今宵爭奈月明何。　今宵月の明かなるを爭奈何せん。

【題義】池邊の卽景を敍した詩である。

【詩意】日光を避け腰掛を移して松と竹とに依り、帶を解き薜蘿に挂けて涼風に當つた。池の綠蘋は螺鈿を鏤めたやうで、白蓮の花は白粉をつけた美人の顏のやうである。打續いた陰鬱な天氣が霽れたので管絃を弄するに宜しく、炎熱が稍衰へて涼しさが著物に透る。酒瓶は空になり客も絶えて、折角の月明でも何の風情もない。

南塘暝興

南塘の暝興

水色昏猶白。霞光暗漸無。
風荷搖破扇。波月動連珠。
蟋蟀啼相應。鴛鴦宿不孤。
小僮頻報夜。歸步尙踟躕。

【字解】【一】風荷　風に吹かるる蓮の葉。【二】蟋蟀　こほろぎ。【三】踟躕　ためらふ。

【題義】南塘に於ての夕の興致を敍した詩である。

【詩意】黃昏になつてもまだ水が白く見え、夜に入つて徐徐に夕映が消えて行つた。風にゆられて團扇のやうな蓮の葉が破れ、月光を浴びた蓮が珠を貫いたやうにちらつき、蟋蟀があちこちで啼きかはし、鴛鴦が番離れず漂つてゐる。小僮が夜の深けることを氣遣つて頻に歸を促すけれども、兎角名殘が惜まれて歸られない。

小宅

小宅里閭接。疎籬雞犬通。
渠分南巷水。窓借北家風。

小宅

小宅里閭接し、疎籬雞犬通ず。
渠は南巷の水を分ち、窓は北家の風を借る。

【二】綠蘋　綠のうきぐさ。【三】綠管　綠竹管絃。【四】綺羅　薄絹の著物。【五】家醞　自家釀造の酒をいふ。

庾信園殊小。陶潛屋不豐。　庾信園殊に小なり、陶潛屋豐ならず。
何勞問寬窄。寬窄在心中。　何ぞ勞せん寬窄を問ふを、寬窄は心中に在り。

【字解】〔一〕庾信　北周の詩人。〔二〕陶潛　陶淵明。〔三〕寬窄　廣狹。

【題義】己の小宅を詠じた詩である。

【詩意】我が小宅は閭里に接し、疎籬は雞犬が自由に通りぬける。南巷の水を分ちて渠となし、北鄰の家から風が窓に吹き入る。庾信のやうに園は小さく、陶淵明と同じく生活が豐でない。併し宅の廣狹は問題ではない。廣狹は畢竟氣の持ちやうに由る。

諭親友

親友に諭す

適情處處皆安樂。　情に適へば處處皆安樂なり、
大抵園林勝市朝。　大抵園林は市朝に勝る。
煩鬧榮華猶易過。　煩鬧なる榮華は猶ほ過ぎ易く、
優閒福祿更難銷。　優閒なる福祿は更に銷し難し。
自憐老大宜疎散。　自ら憐む老大宜しく疎散なるべきを、
却被交親歎寂寥。　却つて交親に寂寥を歎せらる。
終日相逢不相見。　終日相逢へども相見ず、
兩心相去一何遙。　兩心相去ること一に何ぞ遙なる。

【題義】親友に諭して其惑を解いた詩である。

【詩意】何處にゐても己の情に適ひさへすれば安樂は得られるもので、大抵園林に閒居するは市朝にゐて官吏生活を營むに勝つてゐる。併し煩鬧なる榮華は過し易いが、優閒なる福祿は過し難いもので、俺などは老朽だから閒散に甘んずるのが當然であるのに、却つて君等から寂寥を憐まれるのは情理に悖つた事である。君等は終日俺と顏を合せてゐても俺の心持がわからない。どうして兩者の心がかくは隔つてゐるのであらう。

龍門送別皇甫澤州赴任。韋山人南遊

龍門にて皇甫澤州が任に赴き、韋山人が南に遊ぶに送別す

隼旗歸洛知何日。　隼旗洛に歸るは知んぬ何の日ぞ、
鶴駕還嵩莫過春。　鶴駕嵩に還る春を過す莫れ。

【字解】〔一〕隼旗　はやぶさを畫きし旗。行軍に建つるところの旗なり。

惆悵香山雲水冷。　惆悵す香山雲水の冷かなるを、
明朝便是獨遊人。　明朝便ち是れ獨遊の人。

【題義】龍門山（洛陽の南に在る山の名）で皇甫某が澤州刺史となつて赴任し、韋山人が南方に旅立つのに送別した詩である。

【詩意】隼を畫いた旗を押し立てて洛陽に歸るのはいつの事であらう。なるべく早く歸つて來てもらひたい。（皇甫澤州に對して言ふ）來年の春までには鶴に乘つて嵩山に還つて來るがよい。（韋山人に對して言ふ）悲しいかな君等が去つてしまへば香山の雲水も淋しくなり、明朝からは僕が唯一人で遊ばねばならない。

〔二〕香山　龍門山の東に在る山の名。

劉蘇州寄釀酒糯米李浙東寄楊柳枝舞衫偶因嘗酒試衫。

輒成長句寄謝之

劉蘇州は酒を釀す糯米を寄せ、李浙東は楊柳枝の舞衫を寄す。偶〻酒を嘗め衫を試むるに因り、輒ち長句を成して之に寄謝す

柳枝謾蹋試雙袖。　柳枝謾に蹋みて雙袖を試み、
桑落初香嘗一杯。　桑落初めて香しくして一杯を嘗む。

【字解】〔一〕柳枝　楊柳枝なり。樂曲の名。〔二〕桑落　陳雪峰に、河東桑落坊有レ井、每レ至二桑落時一、取レ水釀レ酒甚美、故名二桑落酒一とあり、一說に、西羌有二桑落河一、出二馬乳酒一、羌人彩二葡萄一壓レ之、晉宣帝時嘗來獻と。〔三〕金屑醅　泮の金粉の如くに浮んでゐる酒。〔四〕銀泥衫　後集卷六、看二常州裴刺史贈二賈使君一詩見よ。越娃は浙東即ち越の美人。〔五〕故人　舊友。劉蘇州と李浙東とを指す。

金屑醅濃吳米釀。　金屑醅濃かなり吳米の釀、
銀泥衫穩越娃裁。　銀泥衫は穩かなり越娃の裁。
舞時已覺愁眉展。　舞ふ時已に愁眉の展ぶるを覺え、
醉後仍教笑口開。　醉ひて後仍ほ笑口をして開かしむ。
慙愧故人憐寂寞。　慙愧す故人寂寞を憐み、
三千里外寄歡來。　三千里外歡を寄せ來るを。

【題義】蘇州刺史劉禹錫は酒を釀す糯米を送つてくれ、浙東觀察使李遜は楊柳枝（樂曲の名、前に見ゆ）の舞衫を送つてくれたので、酒を飲み衫を試用するに因つて此詩を作り、兩人に寄せて謝意を表したのである。

【詩意】舞衫を著て謾に楊柳枝の曲を舞うて看た。新に熟した美酒を一杯飲んで看た。金粉のやうに泮の浮んでゐる此酒は吳地の糯米で作つたので、銀泥の舞衫は越地の美女が仕立てたのである。之を著て舞ふ時は自然と愁眉が開け、醉うて後まで口を開いて快笑せしめる。この二品は辱くも我が舊友が余の寂寞たる境遇を憐んで、三千里外から送り屆け、歡に供してくれたものである。

詔授同州刺史病不赴任因詠所懷

詔して同州刺史を授けられしも病んで任に赴かず、因つて所懷を詠ず

同州慵不去、此意復誰知。　同州には慵くして去らず、此意復た誰か知らん。
誠愛俸錢厚、其如身力衰。　誠に俸錢の厚きを愛すれども、身力の衰へたるを其如せん。
可憐病判案、何似醉吟詩。　憐む可し病判案、何ぞ似かん醉吟の詩。
勞逸懸相遠、行藏決不疑。　勞逸懸に相遠く、行藏決して疑はず。
徒煩人勸諫、只合自尋思。　徒に人の勸め諫むるを煩はす、只合に自ら尋ね思ふべし。
白髮來無限、青山去有期。　白髮は來ること限り無し、青山は去ること期有り。
野心惟怕鬧、家口莫愁飢。　野心惟閑しきを怕る、家口飢を愁ふる莫し。
賣却新昌宅、聊充送老資。　新昌の宅を賣却して、聊か老を送る資に充てん。

【字解】〔一〕病判案　病氣届。新唐書百官志に、節度使觀察使判二節度使、團練使判二觀察使一とある。〔二〕勞逸　煩勞と安逸。〔三〕行藏　進退といふが如し。論語に、子謂二顏淵一曰、用之則行、舍之則藏、唯我與爾有是夫とある。〔四〕青山　墓山をいふ。蘇軾の詩に、是處青山可埋骨とある。〔五〕野心　野人の心。〔六〕新昌　洛陽の里の名。樂天の宅の在る處。

【題義】　詔ありて同州刺史に任せられたけれども、病の爲に辭して任に赴かず、感懷を詠じた詩である。

【詩意】　同州に赴任することは一向に氣が進まない。聊か之に就いての吾が眞情を述べて見よう。なるほど澤山の俸錢の戴けることは結構だが、吾が身心が衰耗してゐるのだから仕方がない。病氣届などを出してぐづぐづしてゐるよりは、一杯機嫌で詩でも吟じてゐる方が遙にまさつてゐる。官に就けば苦勞が多く隱居すれば安樂である。進んで官に就くか、退いて隱居するかの判斷は明かについてゐる。人から勸諫せられるまでもなく、自分で考へてもわかることだ。白髮はドンドン殖えるばかりで、死んで墓穴に入るのも遠くはない。野人の心として熱鬧が大嫌ひであり、家族も食ふに困るといふ程ではない。だから辭して同州に赴かず、新昌里の家でも賣拂つて、老を送る資金にしよう。

寄楊六侍郎

時楊初授二戸部一。予不レ赴二同州一。　楊六侍郎に寄す　時に楊初め戸部を授けられ、予は同州に赴かず。

西戸最榮君好去。　西戸最も榮君好し去れ、
左馮雖穩我慵來。　左馮穩かなりと雖も我來るに慵し。
秋風一箸鱸魚鱠。　秋風一箸鱸魚の鱠、
張翰搖頭喚不迴。　張翰頭を搖かして喚べども迴らず。

【字解】〔一〕西戸　戸部をいふ。〔二〕左馮　左馮翊。同州は漢の左馮翊の地なり。〔三〕鱸魚鱠　晉の張翰秋風の起るに因り、吳中の菰菜蓴羹鱸魚鱠を思ひ、官を辭して郷に歸る。〔四〕張翰　樂天自ら比す。

【題義】楊汝士（字は慕巢、太和三年工部侍郎となり、八年出されて同州刺史となり、九年入りて戸部侍郎となつた）に寄せた詩である。

【詩意】戸部となるのは光榮の至りであるから就任するがよい。同州刺史となれば安穩ではあるが、僕は一向に氣が進まない。秋風が吹き立つて鱸魚の鱠の旨くなる時節になつても、この張翰は尻が重いので首を振つて仲仲歸らない。

韋七自太子賓客再除秘書監以長句賀而餞之　韋往年嘗與予同爲秘監

韋七太子賓客より再び秘書監に除せらる。長句を以て賀して之を餞す　韋は往年嘗て予と同じく秘監たり。

離筵莫愴且同歡。　離筵愴む莫く且く歡を同じうし、
共賀新恩拜舊官。　共に賀せん新恩ありて舊官に拜せらるるを。
屈就商山伴麋鹿。　屈して商山に就きて麋鹿を伴とす、
好歸芸閣狎鵷鸞。　好し芸閣に歸りて鵷鸞に狎る。
落星石上蒼苔古。　落星石上蒼苔古く、
畫鶴廳前白露寒。　畫鶴廳前白露寒し。
老監姓名題在壁。　老監の姓名題して壁に在り、
相思試爲拂塵看。　相思はば試みに爲に塵を拂ひて看よ。

【字解】【一】離筵　送別の宴席。【二】舊官　もとの官職。秘書監を指して言ふ。【三】商山　山の名、秦の時四老人あり此山に隱る。漢の高祖の時徵され太子の友となる。之を商山の四皓といふ。ここでは太子賓客の職を指して言ふ。【四】芸閣　秘書省をいふ。鵷鸞は官吏の列。【五】落星石　江西省星子縣の湖中に在る石の名。【六】畫鶴廳　湖山野錄に、李顧言蜀、張乘崖儆之、郡有二四樓一、樓前有二堂堂之屏一、乃黃筌畫二雙鶴花竹怪石一、名曰二雙鶴廳一とある。【七】老監　嘗て秘書監たりし樂天自ら謂ふ。

【題義】韋七（七は輩行）が太子賓客（官名）から再び秘書監（官名）に任せられた。因つて此詩を作つて賀し且送別したのである。

【詩意】別の筵にも悲傷することをなさず、且く歡を俱にし、君が君恩を蒙つて秘書監に任せられた事を祝さう。これまで君は太子賓客の閑職に屈してゐたが、今度は秘書省に歸つて顯官に伍するやうになつた。秘書省の落星石の上には蒼苔が生え、畫鶴廳の前には白露が寒く、如何にも幽雅な處である。そこの壁に僕の名も書いてあるから、若し僕を思ひ出したら塵を拂つて看るがよい。

酒熟憶皇甫十

新酒此時熟。故人何日來。　新酒此時熟す、故人何の日にか來らん。
自從金谷別。不見玉山頹。　金谷に別れてより、玉山の頹るるを見ず。
疎索柳花盌。寂寥荷葉杯。　疎索たり柳花の盌、寂寥たり荷葉の杯。

今冬問氈帳。雪裏爲誰開。　今冬氈帳に問ふ、雪裏誰が爲にか開くと。

【字解】〔一〕故人　舊友。〔二〕金谷　地名。洛陽の西に在る。晉の石崇の金谷園の在りし處。〔三〕玉山頹　醉ひつぶれること。世說に、嵇叔夜之爲人也、巖巖若孤松之獨立、其醉也傀俄若玉山之將崩とある。〔四〕蔬素　蔬圃なり。柳花盌は樂天の詩に、素水柳花盌ともある。〔五〕荷葉杯　杯の名。〔六〕氈帳　毛織のとばり。

【題義】新酒の熟成したについて皇甫十を憶ふ詩である。

【詩意】今丁度新酒が出來た。友達が飲みに來てくれればよい。皇甫十とは金谷で別れてから、彼の醉ひつぶれた姿を見ず、柳花盌も荷葉杯も近頃はトント御無沙汰である。チョット氈帳に聞いて見よう。「此冬には雪の日に誰の爲に開いて迎へるか」と。

九年十一月二十一日感事而作　其日獨遊香山寺。

九年十一月二十一日事に感じて作る　其の日獨り香山寺に遊ぶ。

禍福茫茫不可期。　禍福茫茫期す可からず、
大都早退似先知。　大都早退は先知に似たり。
當君白首同歸日。　君が白首にして同じく歸る日に當り、
是我青山獨往時。　是れ我青山獨り往く時。

【字解】〔一〕茫茫　漠然として知るべからざるをいふ。〔二〕早退　早く身を退くること。先知は賢明なるをいふ。孟子に先知先覺とある。〔三〕君　暗に王涯等を指す。白首　同歸は晉の潘岳と石崇とが刑殺せられる時の語。〔四〕青山　香山を指して言ふ。〔五〕素琴　禮記に、絃之日鼓之素琴とある。〔六〕黃犬　李の丞相李斯刑せらるるに臨み、言つて曰く、吾また黃犬を牽き上蔡の東門を出で狡兎を逐はんと欲するに

顧索素琴應不暇。　顧みて素琴を索むる應に暇あらざるべし、
憶牽黃犬定難追。　黃犬を牽かんことを憶ふも定めて追ひ難し。
麒麟作脯龍爲醢。　麒麟は脯と作り龍は醢と爲る、
何似泥中曳尾龜。　何ぞ泥中尾を曳くの龜に似かん。

豈得べけんやと。〔七〕麒麟・龍　竝に顯榮の士に喩ふ。

【題義】唐の文宗の太和九年十一月、李訓・鄭注等宦官を誅せんことを謀りて克たず。宦官大に宰相王涯等を殺す。是を甘露の變といふ。此詩は此事に感じて作つたのである。東坡志林に云く「樂天王涯の讒する所となり江州司馬に謫せらる。甘露の禍に、樂天洛に在り、適〻香山寺に遊び「白首にして同じく歸る」の二句あり。知らざる者は以て之を幸となすなり。樂天豈人の禍を幸とする者ならんや、蓋し之を悲むなり」と。

【詩意】禍福は去來して定めなきものであるが、大抵早く引退するのが賢明な仕方である。一時に時めいた宰相王涯等が長老の身を以て相連立つて殺される時に、閑地に在る自分は青山の間に悠遊してゐる。彼等は忽ち殺されて素琴を索むるに暇あらず、黃犬を牽いて遊獵しようとしても其れすら出來ない。麒麟や龍となれば脯醢にせられるから、泥の中に尾を曳き摺つて自由に遊びまはつてゐる龜となる方が遙によい。

卽事重題

重裘暖帽寬氈履。　重裘暖帽寬氈履、
小閣低窻深地爐。　小閣低窻深地爐。
身穩心安眠未起。　身穩かに心安く眠りて未だ起きず、
西京朝士得知無。　西京の朝士知るを得るや無や。

【題義】眼前の事を賦し重ねて題した詩である。

【詩意】裘を重ねて襲て暖かな帽子をかぶり、ゆるめに作つた毛氈の履をはいて散歩し、小ぢんまりとした部屋に深く火爐を設けて閉居し、身も心も安穩に朝寐をこかしてゐる。こんな呑氣な生活狀態は長安の役人どもには夢想も出來まい。

【字解】〔一〕西京　帝都長安をいふ。

將歸渭村先寄舍弟

一年年覺此身衰。　一年年此身の衰ふるを覺え、
一日日知前事非。　一日日前事の非なるを知る。
詠月嘲風先要減。　月を詠じ風を嘲るは先づ減ずるを要し、
登山臨水亦宜稀。　山に登り水に臨むは亦宜しく稀なるべし。
子平嫁娶貧中畢。　子平が嫁娶は貧中に畢り、
元亮田園醉裏歸。　元亮が田園は醉裏に歸る。
爲報阿連寒食下。　爲に阿連に報ず寒食の下、
與君釀酒掃柴扉。　君と酒を釀して柴扉を掃はん。

【題義】樂天の舊居なる渭村に歸らんとして先づ弟に寄せた詩である。

【詩意】一年增しに身が衰へ、一日增しに事の非なるを悟つた。風月を詠ずることも山水の間に遊ぶことも今後は大に減じようと思ふ。貧乏ながらも子女の嫁娶が畢つたから、これからは故園に歸つて醉臥しよう。因つて先づ阿連に告げるが、寒食の時節に柴扉を拂つて俱に酒を酌まう。

【字解】〔一〕一年年　一年一年。一年ましに。〔二〕一日日　一日ましに。〔三〕子平　後漢の向長、字は子平、隱居して仕へず老易に通ず、建武中、男女嫁娶畢に畢り、遂に家を棄てにして北海の禽慶と俱に五嶽名山に遊び、終る所を知らず。後の詠懷の詩を見よ。〔四〕元亮　陶淵明字は元亮。彭澤縣令を辭し歸去來兮辭を作つて鄉里に歸隱した。〔五〕阿連　弟の名。寒食は冬至から百五日目をいふ。

看嵩洛有歎

今日看嵩洛。回頭歎世間。　嵩洛を看て歎あり
今日嵩洛を看、頭を回らして世間を歎ず。
榮華急如水。憂患大於山。　榮華は急なること水の如く、憂患は山よりも大なり。
見苦方知樂。經忙始愛閒。　苦を見て方に樂を知り、忙を經て始めて閒を愛す。

未聞籠裏鳥。飛出肯飛還。　未だ聞かず籠裏の鳥、飛び出でて肯て飛び還るを。

【題義】歸隱の途中に嵩山と洛水とを看て歎じた詩である。

【詩意】今日嵩山と洛水とを看、頭を回らして世間に問ふ。榮華の忽ち去ることは流水の如く、憂患は山よりも大である。苦を見て始めて樂がわかり、忙を經て始めて閑を好むものである。籠中の鳥が一旦飛び出して再び飛び還つたといふ話を聞かない。それと同じく一旦歸隱すれば復た世に出ようとは思はない。

詠懷

時阿羅漢初稼。及同州官吏放歸。

隨緣逐處便安閒。　緣に隨ひ處を逐うて便ち安閒、
不入朝廷不住山。　朝廷にも入らず山にも住まず。
心似虛舟浮水上。　心は虛舟の水上に浮ぶに似、
身同宿鳥寄林間。　身は宿鳥の林間に寄るに同じ。
尙平婚嫁了無累。　尙平が婚嫁了に累無く、
馮翊符章封却還。　馮翊の符章封じて却還す。
處分貧家殘活計。　貧家の殘活計を處分し、
匹如身後莫相關。　匹如す身後相關する莫きに。

【題義】感懷を詠じた詩である。

【詩意】朝廷にも入らず山にも住まず、緣に任せ處に任せて安住の地となし、心は虛舟の水上に浮べるが如くで凝滯する所なく、身は林間に宿する鳥の如くに安定を得てゐる。子女の婚嫁も事なく畢り、同州刺史の印章も封じて還し、貧家の殘物を賣り飛ばしてしまつて、死後のことには少しも顧慮しないもののやうである。

詠老贈夢得

老を詠じて夢得に贈る

與君俱老也。自問老何如。　君と俱に老いたり、自ら問ふ老いて何如と。
眼澀夜先臥。頭慵朝未梳。　眼澀りて夜先づ臥し、頭慵くして朝に未だ梳らず。
有時扶杖出。盡日閉門居。　時ありて杖に扶けられて出で、盡日門を閉ぢて居る。
懶照新磨鏡。休看小字書。　新磨の鏡に照すに懶く、小字の書を看るを休む。

【字解】〔一〕尙平　前の將軍歸二渭村一先寄二舍弟一の子平を見よ。〔二〕馮翊　漢の馮翊は唐の同州なり。樂天詔して同州刺史を授けられしも辭して赴かず。因つて其印章を封還せるなり。〔三〕匹如　相似たりとの意。餘冬序錄に、匹讀如レ疋とある。身後は死後なり。

情於故人重。跡共少年疎。
唯是閒談興。相逢尚有餘。

【字解】【一】 終日　終日。【二】 故人　舊友。

【題義】 老を詠じて劉禹錫（字は夢得）に贈つた詩である。

【詩意】 君も僕も同じく老人になつた。因つて自ら老態如何と考へて見るに、眼が澀つて夜は早く寐たくなり、頭は大儀で朝も梳らず、時としては杖に倚つて散歩し、或は終日門を閉ぢて閒居し、新しく磨いた鏡にも照し見るに懶く、細字の書物は見ることが出來ず、やたらに友達が懷しくなり、兎角若い者とは緣が遠くなる。ただ口數が多くなつて人に逢へばやめなしにしやべり續ける。

白樂天詩後集　巻十四

律詩　凡九十六首

從同州刺史改授太子少傅分司

同州刺史より改めて太子少傅分司を授けらる

承華東署三分務。
履道西池七過春。
歌酒優游聊卒歲。
園林瀟灑可終身。
留侯爵秩誠虛貴。
疏受生涯未苦貧。
月俸百千官二品。
朝廷雇我作閒人。

承華の東署に三たび務を分ち、
履道の西池に七たび春を過す。
歌酒優游聊か歲を卒へ、
園林瀟灑身を終る可し。
留侯が爵秩誠に虛しく貴し、
疏受が生涯未だ苦だ貧しからず。
月俸百千官二品、
朝廷我を雇ひて閒人と作す。

【字解】【一】 承華　洛陽記に、太子宮在二太宮東一、中有二承華門一とある。東署は東方の役所。【二】 履道　洛陽の里の名。樂天の宅の在る處。【三】 瀟灑　さつぱりとしてゐる。【四】 留侯　漢の張良、功を以て留に封ぜらる。【五】 疏受　人名。太子少傅たりしも年老いたるを以て職を辭して鄉に歸る。【六】 閒人　閑人なり。

張良・疏受並爲太子小傅。

【題義】樂天は開成元年に同州刺史に任せられたが辭して任に赴かず、改めて太子少傅分司東都を授けられた。其時の作である。

【詩意】自分は太和三年に太子賓客分司東都となり、爾來七年間履道里の池上の宅に暮して來た。其間詩を吟じ酒を飲み優游して歳を卒り、一生を終るに足る所のさつぱりした園林もあつた。同じく太子少傅でも張良は我に比べて徒に虛しく貴きのみ、我は疏受と同じく生活に困る程ではない。要するに澤山の俸錢と二品の官とを給し、朝廷では我を雇つて一閑人としてくれたわけである。

奉和裴令公新成午橋莊綠野堂即事

裴令公の新に午橋莊の綠野堂を成す卽事に和し奉る

舊徑開桃李。新池鑿鳳凰。　舊徑桃李開き、新池鳳凰を鑿つ。
只添丞相閣。不改午橋莊。　只添ふ丞相の閣、改めず午橋の莊。
遠處塵埃少。閒中日月長。　遠處塵埃少く、閒中日月長し、
青山爲外屏。綠野是前堂。　青山外屏をなし、綠野是れ前堂。
引水多隨勢。栽松不趁行。　水を引いて多く勢に隨ひ、松を栽ゑて行を趁はず。
年華玩風景。春事看農桑。　年華風景を玩び、春事農桑を看る。
花妬謝家妓。蘭偸荀令香。　花は謝家の妓を妬み、蘭は荀令の香を偸む。
遊絲飄酒席。瀑布濺琴牀。　遊絲酒席に飄り、瀑布琴牀に濺ぐ。
巢許終身穩。蕭曹到老忙。　巢許は身を終るまで穩かに、蕭曹は老に到るまで忙はし。
千年落公便。進退處中央。　千年公の便に落ち、進退中央に處る。

時裴加中書令。

【字解】〔一〕桃李　すぐれた門下生の多いこと。通鑑に、唐狄仁傑薦姚元崇等數十人、或謂仁傑曰、天下桃李、悉在公門。とある。〔二〕鳳凰　鳳凰池なり。禁苑中の池の名で、中書省の在る處。〔三〕午橋　洛陽の地名。〔四〕外屏　外牆なり。〔五〕趁行　行列を成す。〔六〕年華　年歳といふが如し。〔七〕謝家妓　晉の謝安東山に隱居し妓を以て相從ふ。〔八〕荀令　荀粥、潁陵の令となる。〔九〕遊絲　かげろふ。〔一〇〕琴牀　琴を支ふる臺石。〔一一〕巢許　巢父・許由。堯の時の隱者。〔一二〕蕭曹　蕭何・曹參。

【題義】中書令（官名）裴度が新に午橋莊の綠野堂を成し、卽景を詠じた詩に和したのである。裴度の本傳に「度、年懸車（七十歳）に及び王綱板蕩せるを以て復た出處を以て意となさず。東都（洛陽）に第を集賢里に立て、山を築き池を穿ち、竹木叢萃し、風亭水榭あり。橋に梯し閣に架し島嶼回環し、都城の勝を極む。既にして又午橋に於て別墅を創制し、花木萬株。中に涼臺暑館を起し、名づけて綠野堂といふ。甘水を引きて其中を貫かして、醽引脈分して左右に映帶す。度、事を視るの隙、詩人

白居易・劉禹錫と酬宴して日を終へ、高歌放言し詩酒琴書を以て自ら樂む」とある。

【詩意】舊徑には桃や李を栽ゑ、新に鳳凰池を墜ち、もとの午橋の莊に更に宰相の閣を添へた。遠く俗塵を離れた閑靜な處で、青山が四方を繞つて外觀をなし、綠野が堂前に闊つてゐる。地勢の高低に隨つて水を引き、わざと行列を亂して松を栽ゑ、四時風景を賞すべく、春は農桑を看ることが出來る。謝家の美妓を凌ぐほどの美花が咲き亂れ、蘭の香氣が四邊に漂ひ、遊絲は酒席に飄り、瀑布は琴を支ふる臺石に濺いでゐる。君（裴度を指す）は國家の宰相として老年に到るまで多忙の身であるが、名利を貪らないから巢父や許由のやうに生涯安穩である。此莊も永遠に君の所有に歸し、君は其中央に進退して樂むことが出來る。

自題小艸亭

新結一茅茨。規模儉且卑。
土階全壘塊。山木半留皮。
陰合連藤架。蘂香近菊籬。
壁宜藜杖倚。門稱荻簾垂。
窻裏風清夜。簷間月好時。

自ら小艸亭に題す

新に一茅茨を結ぶ、規模儉にして且卑なり。
土階全く塊を壘ね、山木半皮を留む。
陰合うて藤架に連り、蘂香しうして菊籬に近し。
壁は藜杖の倚るに宜しく、門は荻簾の垂るるに稱ふ。
窻裏風の清き夜、簷間月の好き時。

留連嘗酒客。勾引坐禪師。
伴宿雙棲鶴。扶行一侍兒。
綠醅量盞飲。紅稻約升炊。
齷齪豪家笑。酸寒富室欺。
陶廬閒自愛。顏巷陋誰知。
螻蟻謀深穴。鷦鷯占小枝。
各隨其分足。焉用有餘爲。

留連す嘗酒の客、勾引す坐禪の師。
宿に伴ふ雙棲の鶴、行を扶く一侍兒。
綠醅盞を量つて飲み、紅稻升を約して炊ぐ。
齷齪豪家笑ひ、酸寒富室欺く。
陶廬閒自ら愛し、顏巷陋誰か知らん。
螻蟻は深穴を謀り、鷦鷯は小枝を占む。
各〻其分に隨つて足れり、焉んぞ有餘を用ふるを爲さん。

【字解】〔一〕茅茨　草屋。〔二〕規模　家の構造。〔三〕土階　入口の土で築いた階段。〔四〕餘合　葉などの重れ合うて蔭を成すこと。藤棚は藤棚。〔五〕蘂　蕊に同じ。〔六〕藜杖　あかざの杖。〔七〕嘗酒客　酒を飲む客。〔八〕勾引　招くこと。〔九〕綠醅　醅　濁酒。〔一〇〕酸寒　生活のみじめなこと。欺は馬鹿にするなり。〔一一〕陶廬　陶淵明の居宅。閒は閒靜なり。〔一二〕顏巷　顏子の住む陋巷。〔一三〕鷦鷯　みそさざえ。小鳥の名。

【題義】新に構へた草庵の有樣を敍した詩である。

【詩意】新に一草堂を構へた。きりつめた小ぢんまりした建方である。自然の儘の土を盛り上げて階段となし、皮の付いた儘の材木を用ひ、木蔭が深く藤棚に連り、藜が香氣を發して籬の菊と接してゐる。壁に藜の杖を倚せかけ、門に荻で作つた簾の懸つてゐるのも相應しい。』窻の中に清風が吹き込

み、簷に月の冴えてゐる夜には、酒飲仲間が來て留連したり、坐禪の僧を招いたりする。二羽の鶴が我と共に宿し、散歩する時は一人の小僮が伴をする。杯で酌んで綠酒を飲み、米を儉約して飯を炊ぎ、以て獨り樂んでゐる。』こんなこせこせした、みじめな生活は、金持は嘲り笑ふであらうが、我は陶淵明と同じく其閑靜なるを愛し、顏子と同じく陋巷をも厭はない。螻蟻は身に適した深い穴を掘り、鷦鷯は身に適した小枝に巢くふ。各〻其本分に隨つて滿足してゐるからである。我も亦身分相應に滿足して、堂堂たる豪奢な生活などは求めない。

自詠

細故隨緣盡。衰形具體微。
闕閒僧尙鬧。較瘦鶴猶肥。
老遣寬裁襪。寒教厚絮衣。
馬從銜草輾。雞任啄籠飛。
只要天和在。無令物性違。
自餘君莫問。何是復何非。

【字解】〔一〕細故　微細な事。〔二〕具體微　孟子公孫丑上篇に、冉牛・閔子・顏淵、則具體而微とある。〔三〕裁襪　足袋の作り方。〔四〕絮衣　わたいれ。〔五〕天和　莊子に若正=汝形一、天和將至とある。〔六〕自餘　其他の件件。

【詩意】つまらぬ小事は緣に隨つて盡き、身は衰へて纔に形を具へてゐる。僧よりも閑暇多く、鶴よりも瘦せて居り、老いて足袋がゆるくなり、寒いので綿を厚くせしめる。馬は道草を食ひながら車を牽くに任せ、雞は飛んで籠に啄むに任せ、只自然の和氣を求めて萬物の性に違はぬやうにしてゐる。其他の事は敢て問ふまでもない。是もなく非もなく是非の外に超然としてゐる。

新亭病後獨坐。招李侍郎公垂

新亭未有客。竟日獨何爲。
趁暖泥茶竈。防寒夾竹籬。
頭風初定後。眼暗欲明時。
淺把三分酒。閒題數句詩。
應須置兩榻。一榻待公垂。

【字解】〔一〕竟日　終日。〔二〕頭風　頭痛。〔三〕兩榻　二つの腰掛。

【題義】病後に新亭に獨り坐し、戶部侍郎李紳（字は公垂）を招いた詩である。

【詩意】新亭にはまだ客が來ない。終日獨りで何をしてゐるかといへば、暖に乘じて茶竈を塗り、寒を防ぐ爲に竹垣を繞らし、頭痛がなほつて眼の冴えた時に、杯に三分目ぐらゐ酒を飲み、數句の詩を書きつけなどして日を送つてゐる。腰掛を二つ並べて待つてゐるから、どうぞ遊びに來てくれ。

閒臥寄劉同州

軟褥短屏風。昏昏醉臥翁。
鼻香茶熟後。腰暖日陽中。
伴老琴長在。迎春酒不空。
可憐閒氣味。唯欠與君同。

閒臥劉同州に寄す

軟褥短屏風、昏昏たる醉臥の翁。
鼻香し茶熟する後、腰暖かなり日陽の中。
老に伴ひて琴長く在り、春を迎へて酒空しからず。
憐むべき閒氣味、唯君と同うするを欠く。

【字解】〔一〕昏昏　醉臥する貌。〔二〕可憐　愛すべしといふ意。

【題義】閒臥して同州刺史劉禹錫に寄せた詩である。太和九年九月に、樂天は同州刺史に任ぜられたが辭して就任しなかつたので、代つて劉禹錫が汝州から同州に移つたのである。

【詩意】僕は軟かい褥に低い屏風を立てまはし、終日昏昏として醉臥してゐる。茶が煮えて鼻が香氣を感じ、日が當つて腰が暖かさを覺える。琴は常に我が傍に在り、酒は心に春を生せしめる。この愛すべき閒中の趣味をば、君と倶に味はれないのが遺憾である。

殘酌晩餐

閒傾殘酒後。煖擁小爐時。
舞看新翻曲。歌聽自作詞。
魚香肥潑火。飯細滑流匙。
除却慵饞外。其餘盡不知。

殘酌晩餐

閒に殘酒を傾けて後、煖かに小爐を擁する時。
舞は新翻の曲を看、歌は自作の詞を聽く。
魚香しうして肥えて火に潑し、飯細にして滑かに匙に流る。
慵饞を除却して外、其餘盡く知らず。

【字解】〔一〕新翻　新作といふが如し。〔二〕潑火　膏が火にそそぐ。〔三〕慵饞　懶惰と貪食と。

【題義】殘の酒を酌み晩く食事したことを敍した詩である。

【詩意】殘の酒を飲みほし爐を圍んで暖を取り、新曲の舞を看て自作の歌を聽く。魚は肥えて膏が火にそそぎ、飯は滑かに匙を流れる。ほんに自分は懶惰と貪食の問屋で、この二つを取除いては何の取柄もない男である。

喜見劉同州夢得

紫綬白髭鬚。同年二老夫。
論心共牢落。見面且歡娛。

劉同州夢得を見るを喜ぶ

紫綬白髭鬚、同年の二老夫。
心を論じて共に牢落、面を見て且歡娛。

酒好攜來否。詩多記得無。酒好く攜へ來るや否や、詩多く記得するや無や。
應須爲春草。五馬少踟躕。應に須らく春草の爲に、五馬少しく踟躕すべし。

【字解】〔一〕紫綬　紫の印綬。〔二〕宰落　さびしき處。〔三〕記得　記憶する。〔四〕五馬　刺史の馬をいふ。踟躕は、ためらひて進まぬこと。

【題義】同州刺史劉禹錫（字は夢得）の來訪を受けて喜んだ詩である。

【詩意】君と僕とは俱に紫の印綬を佩び白い鬚を蓄へた同年の老人で、共に意氣の揚らぬ仲間であるが、面を合せれば喜の色が顏に溢れる。好い酒を持つて來たか。詩が澤山出來たらうが、一一覺えてゐるか。さぞ春草の時節だから馬が道草を食つて進まなかつたであらう。まアよく來てくれた。

裴令公席上贈別夢得　裴令公の席上夢得に贈別す

年老官高多別離。年老い官高うして多く別離し、
轉難相見轉相思。轉た相見ること難く轉た相思ふ。
雪銷酒盡梁王起。雪銷え酒盡きて梁王起つ、
便是鄒枚分散時。便ち是れ鄒枚分散の時。

【題義】中書令（官名）裴度の席上で劉禹錫（字は夢得）に贈つて別を告げた詩である。

【字解】〔一〕梁王　漢の時、梁の孝王、宮室苑囿の樂を好み、文學の士を招引す。ここでは裴令公に比したのである。〔二〕鄒枚　鄒陽・枚乘、並に梁の孝王の客たりし文士なり。ここでは樂天と夢得とに比す。

【詩意】君と僕とは年老い官高く東西に離れてゐて、ただ相思ふのみで相見ることは出來ない。今や雪も消え酒も盡きて梁王が起つた。いよいよ鄒陽と枚乘とが又東西に分散せねばならぬ時になつた。

尋春題諸家園林　春を尋ねて諸家の園林に題す

聞健朝朝出。乘春處處尋。聞健朝朝出で、春に乘じて處處に尋ぬ。
天供閒日月。人借好園林。天は閒日月を供し、人は好園林を借す。
漸以狂爲態。都無悶到心。漸く狂を以て態と爲し、都て悶の心に到る無し。
平生身得所。未省似而今。平生身所を得れども、未だ省せず而今に似たるを。

【字解】〔一〕聞健　身の達者なるをいふ。聰明未だ衰へざる義を取る。〔二〕而今　今日。今。

【題義】春を尋ねて諸家の園庭に題した詩である。

【詩意】身體の達者なのに任せて毎日出遊し、處處の春色を探つてあるく。天は我に閒暇を與へてくれ、人は結構な庭園を開いて觀せてくれる。殆ど狂氣の沙汰となり、心に憂悶の到ることがない。平生何の不平もないけれども、未だ嘗て今日ほど愉快を覺えたことはない。

又題一絶　又一絶を題す

貌隨年老欲何如。貌は年に隨つて老ゆ何如せんと欲する。

興遇春牽尚有餘。　興は春に遇うて牽かれ尚ほ餘り有り。
遙見人家花便入。　遙に人家を見て花あれば便ち入り、
不論貴賤與親疎。　貴賤と親疎とを論せず。

【題義】春を尋ねて又一絶句を題したといふ意。

【詩意】容貌は一年増しに老衰して如何ともし難いが、春に遇うて餘りあるほど感興が牽かれる。遙に人の家を見て花が咲いてゐれば、貴賤親疎に拘らずはひり込んで行つて貪り看る。

家園三絶

滄浪峽水子陵灘。　滄浪の峽水子陵が灘、
路遠江深欲去難。　路遠く江深うして去らんと欲すること「難し」。
何似家池通小院。　何ぞ似かん家池の小院に通じ、
臥房階下插魚竿。　臥房の階下魚竿を插むに。

【題義】自家の園池を詠じた詩である。

【詩意】漢水だの子陵灘だのは、如何に好い處であつた所が、路も遠く水も深いから往かうにも往かれない。だから吾が家の池の、小亭の近くに在り、寢室の階段に釣竿を插して置いて、いつでも釣を垂れることの出來るのには及ばない。

【字解】〔一〕滄浪　川の名。漢水。子陵灘は嚴陵瀨ともいふ。漢の嚴子陵の居りし處。〔二〕小院　小亭なり。

〔一〕

籬下先生時得醉。　籬下には先生時に醉ふを得、
甕間吏部暫偸閒。　甕間には吏部暫く閒を偸む。
何如家醞雙魚榼。　何ぞ如かん家醞雙魚の榼、
雪夜花時長在前。　雪夜花時長に前に在るに。

【詩意】籬下には先生が時時飲むを得、酒瓶の間には畢卓が暫く偸んで飲んだといふが、吾が自家釀造の酒の、二箇の魚榼に蓄へてあつて、雪の夜にも花咲く春にも自由に飲めるのには及ぶまい。

〔二〕

鴛鴦怕捉竟難親。　鴛鴦は捉はるるを怕れて竟に親み難し、
鸚鵡雖籠不著人。　鸚鵡は籠すと雖も人に著かず。
何似家禽雙白鶴。　何ぞ似かん家禽雙白鶴、
閒行一步亦隨身。　閒行一步にも亦身に隨ふに。

【字解】〔一〕吏部　晉書畢卓傳に、比舍郎釀熟、卓因醉夜至其甕間、盜飲之、爲掌酒者所縛、明旦視之乃畢吏部也とある。〔二〕家醞　自家釀造の酒。魚榼は魚の形した酒器。

【詩意】鴛鴦は捉はれることを怕れて狎れ親むことが出來ず、鸚鵡は籠にはひつてゐるが人に寄り著かない。吾が家の二羽の白鶴の、チョットの散歩にも俺の後について來るのには及ばない。

老來生計

老來生計君看取。
白日遊行夜醉吟。
陶令有田唯種黍。
鄧家無子不留金。
人間榮耀因緣淺。
林下幽閒氣味深。
煩慮漸銷虛白長。
一年心勝一年心。

老來の生計
老來の生計君看取せよ、
白日遊行して夜醉吟す。
陶令田有りて唯黍を種ゑ、
鄧家子無くして金を留めず。
人間の榮耀は因緣淺く、
林下の幽閒は氣味深し。
煩慮漸く銷して虛白長じ、
一年の心は一年の心よりも勝れり。

【字解】〔一〕看取　看る。〔二〕白日　日中。〔三〕陶令　晉の陶淵明。彭澤縣令たり、故にいふ。〔四〕鄧家　晉の鄧攸、字は伯道。石勒の兵起りしとき家を挈へて走る。其弟早く亡せるを以て特に其姪を全うせんとし、己の子を樹に繫ぎて去る。死して竟に嗣なし。時人之を哀んで曰く、天道知なく、鄧伯道をして兒なからしむと。〔五〕人間　世間。榮耀は榮華。〔六〕虛白　虛心といふが如し。莊子人間世篇に、虛室生白、吉祥止止とある。

【題義】老來の生活振りを詠じた詩である。

【詩意】君、吾が老來の生活振りを看よ。晝は遊びあるき夜は醉吟し、陶淵明と同じく田には酒を造る爲に唯黍を種ゑ、鄧攸と同じで子がないから金などは遺さず、世間の榮華には緣が薄くてありつけないが、林下の幽閒は味が深い。煩累が段段消えて心が虛淡になり、一年增しに心が純化される。

早春題少室東巖

三十六峰晴。雪銷嵐氣生。
月留三夜宿。春引四山行。
遠草初含色。寒禽未變聲。
東巖最高石。唯我有題名。

早春少室の東巖に題す
三十六峰晴れ、雪銷えて嵐氣生ず。
月留めて三夜宿せしめ、春引いて四山に行かしむ。
遠草初めて色を含み、寒禽未だ聲を變せず。
東巖の最高石、唯我名を題する有り。

【字解】〔一〕少室　山の名。河南省登封縣の北、太室山の西に在り、凡て三十六峰あり。〔二〕嵐氣　山氣。

【題義】春の初に少室山の東巖に題した詩である。

【詩意】三十六峰悉く晴れ、雪が消えて翠色が生じた。明月は我を引留めて三泊せしめ、春は我を誘うて四山に遊ばしめた。遠山の草が初めて綠を呈し、鳥はまだ春の歌を歌はない。東巖の最高石に我獨り我が名を署して記念にした。

早春即事

眼重朝眠足。頭輕宿酒醒。
陽光滿前戸。雪水半中庭。
物變隨天氣。春生逐地形。
北簷梅晩白。東岸柳先青。
葱壠抽羊角。松巣墮鶴翎。
老來詩更拙。吟罷少人聽。

【字解】〔一〕宿酒　宵に飲んだ酒。〔二〕葱壠　草深き丘。羊角は植物の新芽。形の似たるを以ていふ。〔三〕鶴翎　鶴の羽。

【題義】早春の實況を詠じた詩である。

【詩意】朝寢して目蓋が重く、宵の酒が醒めて頭が輕い。日の光が軒先に滿ち、雪融の水が庭の半分ほど廣がつてゐる。天氣につれて總ての物が變り、地勢に隨つて春が來てゐる。北簷の梅はいつまでも咲き殘り、東岸の柳は早くも新芽を生じ、草深い丘には若芽が伸び出し、松の巣からは鶴の羽が墮ちる。老來特に詩が拙くなつて、吟じても聽く人もない。

歎春風。兼贈李二十侍郎二絶

春風を歎じ、兼ねて李二十侍郎に贈る　二絶

樹根雪盡催花發。
池岸氷消放草生。
唯有鬢霜依舊白。
春風於我獨無情。

【題義】春風を歎じ兼ねて李紳（二十は輩行。戸部侍郎）に贈つた詩である。

【詩意】樹の根本の雪が消えて花が開きさうになり、池の岸の氷が釋けて草が生えそめた。ただ吾が鬢の霜のみは相變はず白く、春風も我には至つて無情である。

〔二〕

道場齋戒今初畢。
酒伴歡娛久不同。
不把一杯來勸我。
無情亦得似春風。

【字解】〔一〕道場　佛寺。〔二〕酒伴　酒飲仲間。

【詩意】佛寺の齋戒もやつと畢つた。酒飲仲間の歡樂も久しく倶にしない。君が若し杯を把つて俺に酒を勸めてくれぬならば、その無情さは此の春風にも劣らない。

春來頻與李二賓客郭外同遊因贈長句

春來頻に李二賓客と郭外に同遊し、因つて長句を贈る

風光引歩酒開顏。　風光歩を引いて酒顏を開く、
送老消春嵩洛間。　老を送り春を消す嵩洛の間。
朝蹋落花相伴出。　朝には落花を蹋んで相伴うて出で、
暮隨飛鳥一時還。　暮には飛鳥に隨つて一時に還る。
我爲病叟誠宜退。　我は病叟たり誠に宜しく退くべし、
君是才臣豈合閒。　君は是れ才臣なり豈合に閒なるべけんや。
可惜濟時心力在。　惜む可し時を濟ふ心力あるも、
放教臨水復登山。　放つて水に臨み復た山に登らしむ。

【題義】春になつて以來太子賓客（官名）李二（二は輩行）と屢〻洛陽の郭外に同遊し、因つて此詩を贈つたのである。

【詩意】春景色は人の行遊を誘引し、酒は人の愁を霽らす。因つて酒を攜へ嵩洛の間に遊んで、老を送り春を消する。朝は落花を蹋んで君と俱に出で、暮には飛鳥に隨つて歸る。俺は病叟だから引退するのは當然であるが、君は才臣だからまだまだ引退してはいけない。可惜一世を濟ふべき心力を持ちながら、徒に山水の間に遊ばせて置くのは國家の不經濟である。

【字解】〔一〕嵩洛　嵩山、洛水。

二月二日

二月二日

二月二日新雨晴。　二月二日新雨晴れ、
草芽菜甲一時生。　草芽菜甲一時に生ず。
輕衫細馬春年少。　輕衫細馬春年少、
十字津頭一字行。　十字の津頭一字に行く。

【題義】二月二日見る所の實景を敍した詩である。

【詩意】二月二日に雨が初めて晴れ、草木の新芽が一時に發生した。見れば輕衫をまとひ若駒に跨り、今や盛の春を賞せんものと、勇み立つた若者共が、十字形を成す渡場のあたりを、眞一文字に突進して行く。

【字解】〔一〕菜甲　野菜の甲坼。種が裂けて新芽の出づること。〔二〕年少　少年。わかもの。

奉和令公綠野堂種花

令公の綠野堂花を種うに和し奉る

綠野堂開占物華。　綠野堂開いて物華を占む、

【字解】〔一〕物華　萬物の菁華。

路人指道令公家。　路人指して道ふ令公の家と。
令公桃李滿天下。　令公桃李天下に滿つ、
何用堂前更種花。　何ぞ用ひん堂前更に花を種うるを。

王勃の滕王閣序に、物華天寶、龍光射斗牛之墟とある。【三】令公　中書令公。【四】桃李　すぐれた門下生の多いこと。通鑑に、唐狄仁傑薦桓元崇等數十人、率爲名臣、或謂仁傑曰、天下桃李、悉在公門とある。

【題義】中書令（官名）裴度の「綠野堂（堂の名。前の奉和裴令公新成午橋莊綠野堂即事を見よ）に花を種ゑた」といふ詩に和したのである。

【詩意】綠野堂が今や正に春景色を展開してゐる。路行く人は「これが中書令殿の御邸ぢや」と指して眺める。中書令殿の門下には桃李が滿ちてゐるのだから、今更堂前に花を植ゑる必要はあるまい。

清明日登老君閣望洛城贈韓道士

清明の日老君閣に登り、洛城を望み韓道士に贈る

風光煙火清明日。　風光煙火あり清明の日、
歌哭悲歡城市間。　歌哭悲歡す城市の間。
何事不隨東洛水。　何事か隨はざらん東洛の水、
誰家又葬北邙山。　誰が家か又葬る北邙の山。
中橋車馬長無已。　中橋の車馬長く已む無し、
下渡舟航亦不閒。　下渡の舟航亦閒ならず。
冢墓纍纍人擾擾。　冢墓纍纍として人擾擾たり、
遼東悵望鶴飛還。　遼東悵望鶴飛び還る。

後化レ鶴歸レ遼、集二華表柱一云、有レ鳥有レ鳥丁令威、去レ家千年今始歸、城郭如レ故人民非、何不レ學レ仙塚纍纍とある。

【字解】【一】清明　冬至の後百五日目を寒食といふ。この日には火を用ふるを禁じて冷食す。寒食の後二日を清明といふ。【二】煙火　後漢書禮儀志に、清明節士傳レ火とあり、唐摯下歳時記に、清明日、取二榆柳之火一以賜二近臣一とある。【三】北邙山　洛陽の北に在る山の名。墓地多し。【四】冢墓　墳墓。纍纍はかさなる貌。擾擾は混雜する貌。【五】遼東　漢の遼東の人丁令威をいふ。後神仙記に、丁令威學二道於靈虛山一、

三月三日

三月三日

韓詩　清明日登老君閣望洛城贈韓道士　三月三日

詩意　清明の日に老君閣から洛陽を望めば、風光が好く楡柳の煙火が東西に飛びかはし、（唐の韓翃の寒食と題する詩にも、日暮漢宮傳蠟燭、青煙散入五侯家とある。）市中の人人は或は哭泣し或は歡歌してゐる。人生れて誰か東流の水に隨つて此世を去り、北邙山上に葬られぬ者があらうか。これ人の哭泣する所以であり、人生の果敢なき所以である。然るに尙ほ橋上には車馬の往來暫くも已まず、渡場の舟航暇なき程に名利に奔走し、墳墓は纍纍として人は擾擾たりといふ有樣なのは、誠に憐むべき事である。遼東の鶴が悵望して飛び還つたのも此が爲である。